

## すまいるん

季刊  
1996  
夏号

(通巻第39号) 一九九六年六月一五日発行 ©

イリアン・ジャヤダニ族の住居。厨房、豚小屋と一体化して細長い形に変化した女の棟の内部には、円形の原形をそっくり内包して残している——(風紋)より。



## 特集Ⅱ戦後住宅史を読み直す

## 目次

〈風紋〉内包された住居イリアンジャヤ 藤井明……………2

〈焦点〉戦後住宅史を読み直す——その関を探る……………4

いま、建築家にとって住宅設計とは……………6

伊東豊雄(建築家)・内藤 廣(建築家) 司会Ⅱ中谷礼仁(早稲田大学助手)

近代住宅史は、まどのような地点にきているのか 大河直躬……………20

戦後住宅は歴史たりうるか 中谷礼仁……………24

戦後低層集合住宅計画の歩みと課題 藤本昌也……………31

〈すまいるのテクノロジー〉住まいのつくり方を 増田一真……………37

〈私のすまいる〉根拠地への道のり 岡本茂男……………42

96住総研シンポジウム住宅設計の現在——設計者は何を考えているかへ向けて

〈論文〉住居設計論——光スケール場所性 室伏次郎……………46

〈論文〉住まいを巡るつなぎのデザイン 平倉直子……………55

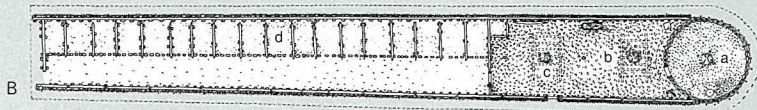
〈図書室だより〉住について考える ①住居計画の本 横山勝樹……………70

〈すまい再発見〉アメリカの草の根の住居に見たもの 益子義弘……………74

ひろば……………69 次号予告・お知らせ……………72 編集後記……………76

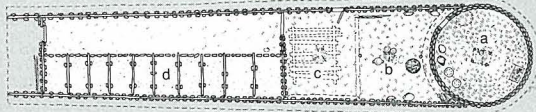


# 風紋



B

- a 居間、2階が寢室
- b 厨房
- c 炉
- d 豚小屋



女の棟の平面図 A





# 内包された住居

—イリアン・ジャヤ：ダニ族の女の棟

文と写真／藤井 明

イリアン・ジャヤのバリエム峡谷を上空から眺めると、整然と並ぶさつまいも畑の畝の間を細い水路が縫うように走り、満々と湛えられた水が陽光を煌めかせている。畑の一隅の疎林の中にダニ族のコンパウンドがある。細長い矩形の広場の短辺側にひときわ大きく聳えている凹形の棟が男の棟であり、長辺側のやや小振りのものが女の棟である。周辺に異様に細長い棟が幾つかあるが、これらは厨房棟と豚小屋である。この峡谷では今でも石斧が使われ、新石器時代さながらの生活が営まれているが、上空からの俯瞰では、幾何学的で明快な配列則を持つ住文化の存在がうかがわれる。

一般にダニ族のコンパウンドは成人男子が共同生活するひとつの男の棟と複数の女の棟に分かれている。共に凹形平面の住居で、内部は狭い入口を入った所が居間で、中央に四本の棟持柱に囲まれた炉がある。壁際の人がやつと潜り抜けられる孔から二階に上ると、そこは一面に青草が敷き詰められた寝室になっている。厨房棟は細長い平面の内部に、ほぼ等間隔で炉が切られている。豚小屋はこれも極めて細長いが、内部は一頭毎のピットに分けられている(一九九三年秋号参照)。このコンパウンドが少し進化したと思われる構成をもつものを谷の南部で見ることができ、

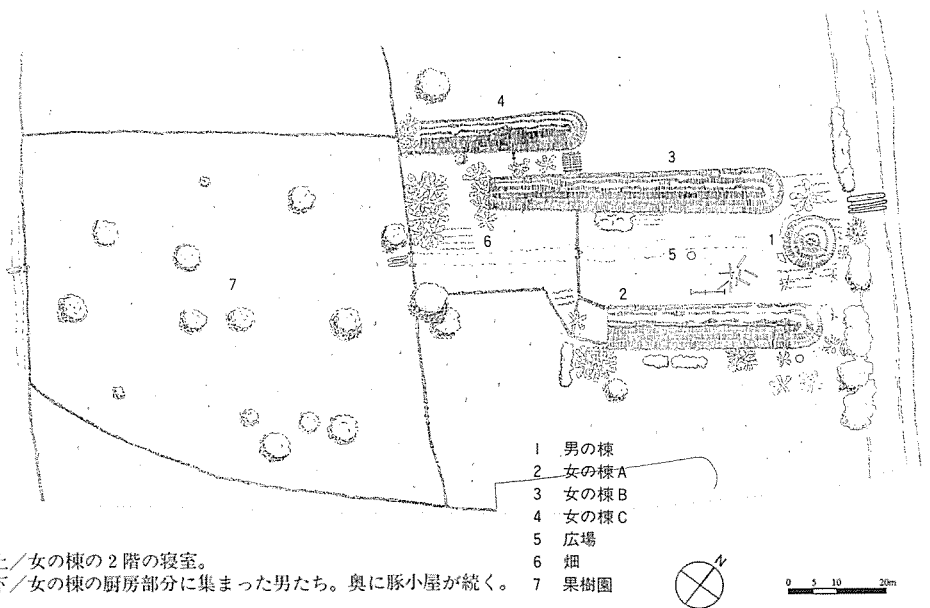
へブバはワメナの南方約一〇kmの所にある小村である。この住居で面白いのは女の棟である。女の棟は元来、凹形の棟が独立していたが、ここではそれが厨房棟と豚小屋と一体化し、ひとつの細長い棟を形成している。元もと凹形のものとは長方形のものを合体させたのであるが、その名残が外観にも現われていて、細長い棟の一端は半凹形になっている。内部に入ると更に驚くが、凹形の棟がそのまま内包され、原形を留めている。凹形の棟の屋根は室内側でもちゃんと葺かれている。このことは先ず凹形の棟がつくられ、次いで長方形の部分が継ぎ足されたことを意味する。壁の構造も異なり、凹形部分は矢板状の板を縦に桶状に並べたものであるのに対し、長方形の部分は外側は縦板、内側は横板で間に草のインシユレーションが挟まれたものになっている。凹形部分の内部は普通の女の棟と全く同じで、二階建てで内部には一面草が敷かれている。厨房部分と豚小屋との間には低い隔壁がある。長い棟では三〇mに及ぶが、この谷には不思議な幾何学がある。

(ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所教授)

右頁写真——上／女の棟の厨房部分から凹形の住居を見る。中／上空から見たコンパウンド。下／女の棟の外観。



左上／女の棟の2階の寝室。  
左下／女の棟の厨房部分に集まった男たち。奥に豚小屋が続く。



# 戦後住宅史を読み直す

——その<sup>し</sup>闕を探る

## 一九五〇年代の光芒

戦後の日本住宅史は、一言でいえば、「思想（イズム）」と「風景（様式と場所性）」によって語られてきている。

焼け跡のバラックを背景に、小住宅コンペ（一九四七年～五〇年代初め）から発した住宅設計の歩みは、

- 「立体最小限住居」（池辺陽・一九五〇年）
- 「最小限住宅」（増沢洵自邸・一九五二年）
- 「SHI」(広瀬鎌二自邸・一九五三年)
- 「自邸」（丹下健三・一九五三年）
- 「私の家」（清家清・一九五四年）
- 「栗の木のある家」（生田勉＋宮島春樹・一九五六年）
- 「スカイハウス」（菊竹清訓自邸・一九五八年）

など、自邸を中心として、熱い思いを込めた試作による実験住宅を輩出した。これは、一九五〇年代の優れた「小住宅」の記憶の風景として、今日に残映し、六二年の「正面のない家」（坂倉準三建築研究所大阪支所・西澤文隆）、六七年の「塔の家」（東孝光）へと続くのである。もちろん、A・レーモンド、山口文象とRIA、吉村順三、みねぎしやすお、吉田桂二、林雅子、宮脇檀、高須賀晋などの仕事も忘れてはなるまい。

ふと、書架を見ると、『ギネマ旬報』一九八九年一月上旬号が目にとまった。戦後復刊一〇〇〇号特別記念号と銘打って、日本映画史上のベストテンを載せている。面白いのでその結果をお知らせしよう。

- 一、七人の侍（黒澤明・一九五四年）
- 二、東京物語（小津安二郎・一九五三年）
- 三、生きる（黒澤明・一九五二年）
- 四、浮雲（成瀬巳喜男・一九五五年）
- 五、飢餓海峡（内田吐夢・一九六四年）
- 六、幕末太陽伝（川島雄三・一九五七年）
- 七、西鶴一代女（溝口健二・一九五二年）
- 八、雨月物語（溝口健二・一九五三年）
- 九、用心棒（黒澤明・一九六一年）
- 十、二十四の瞳（木下恵介・一九五四年）

以上である。これは、映画評論家たち八六人の投票による結果である。

ざっと目を通してもお気づきになると思うが、戦前はもちろん最近の作品は一本もないし、一〇本のうち八本までが五〇年代で、あとの二作も六〇年代前半の作品である。私だと「豚と軍艦」（今村昌平）なども入りたいが、やはり五〇年代の作品で、封切時に観た感動の反映としてか、その時期に青春を過ごした世代の特徴かもしれない。しかし、これを見ても一九五〇年代は、モノづくりの活気に溢れた時代であったことが判るような気がする。

### 一億総中流化へ

話が横道にそれたが、では昭和とは、どんな時代だったのか。おおまかに区切ると、前半が軍部の台頭と戦争、中が敗戦と混乱、後半が繁栄と無秩序という極端な変化に揺れ動いている。私自身が昭和一ケタ生まれで、戦前、



戦中、戦後の混乱を身をもって体験し、現在のいつわりの繁栄に身を置いて  
いる。

高揚した六〇年安保による政治への挫折感、かえって、東京オリンピック  
クが開かれた一九六四年を浮き彫りにし、日本が経済成長の波に乗って国際  
化の時代へと急傾斜してゆく勢いを後押しした、と見る。昨年オーブンした  
東京都現代美術館で、「日本の美術——よみがえる1964年」展が企画さ  
れた。「次第に無所属の前衛作家と画壇所属の作家という日本美術の二重構  
造が明確化してきたのである」という位置付けが、その骨子だ。また、六六  
年から七〇年代へと過熱した学生運動の不完全燃焼での終焉は、混沌と不毛  
の時代の到来を予兆した。

それは、一九七三年に行なわれた「あなたの生活程度は、世間一般から見  
てどの程度だと思うか」という意識調査で、「中流」と答えた人が九割に達  
したことでも判る。一億総中流意識の始まりである。そして、七四年の「巨  
大建築論争」（神代雄一郎vs村松貞次郎）以降、建築運動（イズム）の形態  
は、ほとんど影をひそめ、多様化の時代へと移行してゆく。

### 住宅史の周縁

このような時代にあっても、住宅史の周縁を目をこらして見ると、集落や  
町並みの実測調査から発した「デザインサーウェイ」が、その実を挙げてい  
る。オレゴン大学による「金沢」に触発され、東京芸大の「外泊」、白豪  
寺<sup>\*</sup>、そして法政大学の「倉敷」、日本大学の「大平宿」などの調査が目につく。  
これは、単に町並み調査として見るか、地域主義への萌芽と読むかは  
ともかくとして、住宅史の見直しに影響を与えていることは間違いない。  
その後、多様化の時代は進み、一見、タレント主義の時代とも読める八〇  
年代を迎える。この時代は、ポストモダンニズムの洗礼と喪失を超えて、土地  
神話による「地上げ」の横行と「円高」を引きずって九〇年代に入り、バブ  
ルの崩壊を見ることになる。

この八〇年代で特筆すべきは、「民家の再生」（降幡廣信ほか）の仕事だろ  
う。これは、やっと光が当たるようになった木造建築再認識の流れと、民家

史の見直し（大河直躬ほか）に裏打ちされていることは言うまでもないが、  
もう一つ、明治以降、置いてきぼりにされてきた無名の棟梁の手になる近代  
数寄屋建築の発掘と再評価（伊藤ていじ、稲垣栄三、田中文男、中村昌生、  
早川正夫、山口廣、吉田桂二、横山正ほか）の気運の高まりも、無視できな  
いことだ。

八〇年代後半のある日。羽田で、猫背にお馴染みレインコート姿の俳優・  
小沢昭一さんにバッテリーお目にかかった。「小沢さん、お久しぶり」「や  
あ」と、待ち時間のおしゃべりの中、役者生活の苦しい時代のお話。「仕事  
は一度断ると、その仕事は他の奴にゆくから、できるだけ断らないようにし  
てますが、私はどうも偏屈だから、馴染まないものには出たくないで、ど  
うぞお先<sup>\*</sup>について、また旅をしているわけ……」。こんな会話をして別れた。

私は、建築の雑誌は、単にニュース性を重要眼目にして、いつも新作紹介  
を競い合う必要はないと思っている。新しい情報が必要だった戦後の過渡期  
ならともかく、いまのような情報過多の時代では、情報の量だけの勝負はあ  
まり意味がない。新作紹介で何らかの競い合いが垣間見えたら降りればいい。  
小沢さんの言葉を借りれば、「どうぞお先に」である。ジャーナリズムの住  
宅史に対する取り組み方も、各々の雑誌の特性を生かした情報の質（時代の  
切り口）で競うべきだと思っている。それが、多様化の時代における編集の  
作法ではないだろうか。この特集を提案したのもそんな理由によるのである。

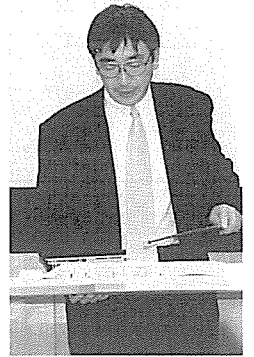
\*

昨今の大学における設計の課題で、〈住宅〉は、難しいテーマの一つだと  
聞く。それは、旧態依然とした建築教育の制度のためなのか、それとも住ま  
いに実感をもてない学生たちの中流思考の影響なのだろうか。

社会的な器としての住居と、個人の根拠地たるべき住まい。この二つの狭  
間Ⅱ（しきみ）は、一体どこに在るのだろうか。現代の社会的経済的状況  
の中にあつて、「思想」と「風景」のどちらにも偏らず、住まう人の側から  
の住宅史の読み直しは、果たして可能なのだろうか。

（立松久昌）たてまつ・ひきよし／編集者、月刊『住宅建築』顧問





## 伊東 豊雄

いとう・とよお  
建築家

一九六五年、東京大学工学部建築学科卒。菊竹建築事務所勤務（六五年～六九年）の後、七一年にアーバンロポット設立。七九年に㈱伊東豊雄建築設計事務所に改組。主な作品として、「アルミの家」、「中野本町の家」、自邸「シルバーハット」などの住宅のほか、「八代市立博物館・未来の森ミュージアム」、「養護老人ホーム八代市立保寿寮」など。「シルバーハット」で日本建築学会賞作品賞を受賞。

# いま、 建築家にとって 住宅設計とは

「社会的器」と「根拠地」としての住まい」という戦後住宅の二項対立的語り口から、大きく変わった住宅設計のパラダイム

作品としての完全性への指向から

非中心的、非完結的、非表現的でありようへ移行

## 伊東 豊雄

伊東 私は八四年に自邸「シルバーハット」をつくり、八六年に「馬込沢の家」という小さな住宅をつくりました。そのあと、八八年に青山に住宅を一軒設計したきり、その後なぜか住宅設計の仕事がブツンとこなくなりました。私のほうでお断りしたわけではなく、ときどきは住宅をやりたいなと思いつながら、かれこれ一〇年近く住宅を手掛けておりませんでした。

昨年、蓼科に雑誌編集者の中野さんご夫妻の小さな別荘をつくり、続いて久しぶりに住宅の仕事がはまりました。現在、設計途中です。私にとっての住宅設計の位置を話せということですが、ありのままの、いま自分がやっているものを見ていただくのがいちばんいいだろうということで、その設計中の住宅について、まずお話をさせていただきます。

熊本県に小国という山のなかの小さな町があります。葉祥栄さんが木を使つてつくった建築で有名ですが、町長が建築に大変理解の深い町です。私はいまそこに彫刻家・末田さんの仕事場兼住宅を設計しています。末田さんの奥さんもテキスタイルの仕事をやっておられ、そのアトリエも兼ねた住宅です。

この末田さんは、原広司さんが湯布院につくった末田美術館のクライアーントです。いまはその美術館の上の小さなスペースに住んでおられ、出身地の小国に戻って仕事場をつくりたい、小国を訪れる人に自分の作品をみてもらいたい、奥さんも町の人たちにテキスタイルの教室を開きたい、ということと、小国に最後の家をつくりたいと、設計を私に依頼されました。

小国の町の中心部から車でほんの五分も走った場所に直径五〇～六〇メートルぐらいの農業用水の貯水池があり、それを囲むように山が取り巻いています。ここにかなり古い民家が建っていて、その土地を買い受けたのです。



このミニシンポジウムの目的は、建築家における住宅設計の位置づけとその現在といった問題です。いま戦後住宅史を通観してみると、その枠組みが大きく変わりつつあります。その状況をややくだいで言うと、いわば、住宅における五五年体制の崩壊ということになるのではないでしょうか。つまり、自由民主党と社会党、あるいはアメリカとソ連とのポリティックなバランスが鮮かに崩壊してしまったように、戦後住宅のパラダイムもぐんぐん変わっているように思うのです。

このような状況を、住宅を設計する建築家の側がどのようにとらえ、克服しているのでしょうか。七〇年代に建築家としてデビューされた伊東豊雄さん、八〇年代にデビューされた内藤廣さんのお二人をお迎えして、今日は考えてゆきたいと思います。(中谷礼仁)

本文文責 編集部



## 司会 中谷 礼仁

なかたに・のりひと

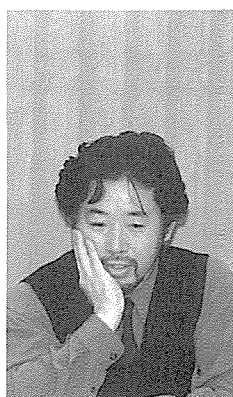
早稲田大学理工学部建築学科助手  
近世的日本近代建築史専攻

## 内藤 廣

ないとう・ひろし

建築家

一九七二年、早稲田大学理工学部建築学科卒。大学院修士課程で吉阪隆正に師事。菊竹建築事務所勤務(七九年〜八一年)の後、八一年に内藤廣建築設計事務所を設立。主な作品として、「共生住居」、「稜線の家」など住宅多数のほか、「ギャラリー・トム」、「海の博物館」など。「海の博物館」で日本建築学会賞作品賞・吉田五十八賞を受賞。



非常に静かな山あいの風景が残っている場所です。ゆくゆくは自分の作品をこちらに展示したいという希望があるわけですが、仕事場と住宅を合わせて一八〇㎡ぐらいの建築を計画しています。

大きく三つの部分から成り立っていて、向かって左側が石の彫刻の仕事場です。大きな石をトラックが運んできて、クレーンで運び込んで、石の加工をする。これはほとんど屋根だけの空間です。小国は大変寒いところで、冬には雪も降りますし、大変風が冷たいところですから、そういう場合にはシートを吊るして仕事をするような場所です。

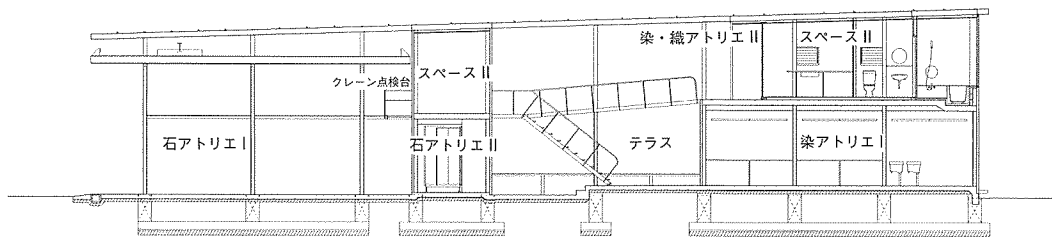
仕事中は石の粉などが飛び散る場所なので、中央部を緩衝ゾーンとし、東側の一階を奥さんのアトリエとして機を五台ぐらい置けるようにします。その上が一五坪ぐらいの住居部分で、ベッドルームや小さなダイニングのスペース、そして水まわりがあるという最低限の居住スペースです。

仕事場と住居の間には、仕事の合間に休憩をしながら、上から製作中の自分の作品を見ることができ、また、町の人との交流ができるスペースがあります。緩衝ゾーンは屋根付きテラスになっていて、気候のいいときには、町の人たちがやってくると、ここで雑談できるようなところです。ごく単純な空間構成です。

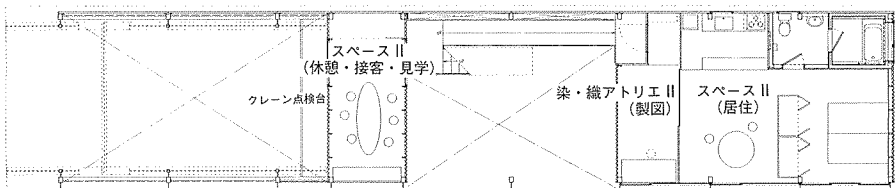
この住宅は、ある意味では特殊な住宅でありながら、別の意味では今日の住宅の一つの姿を示しているのかもしれないということで、きょうの話のところがかりにしたいと思っただけです。

それはどういうことかといいますと、末田さんご夫妻には、子どもさんがなく、お二人だけの住宅であるのはやや特殊な条件かもしれませんが、自分の故郷の阿蘇へ戻っていくのだけれども、ここに小国の町の人たちが自由に訪れて、自分の仕事をみてもらったり、一緒に酒を飲んだり、教えたり、そうやって小国に文化的遺産を残したいのだ、という思いが強くある。ですから小国という町に対する末田夫妻のポジションが、非常に現代的な意味をもっているなと思うわけです。地元の人でありながら、数十年間、人生の大半を外で暮らして、また戻ってくる人である。湯布院の美術館は存続しているわ

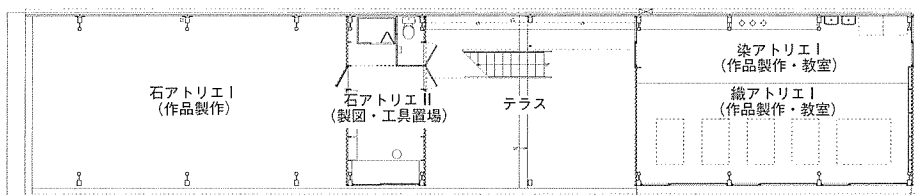




断面図 1/250



2階平面図



1階平面図 1/250



けですから、湯布院を離れて小国だけで生活が完結するというわけでもなく、入り込んでもあるし、入り込んでもないといった両義的な意味をもっている。

そして、この建築自体も、住まいでありながら、実際の居住部分はわずかな部分で、それぞれ独立した、普通の家だったら書齋に相当する部分が拡大されている。ある意味では、居住空間よりそちらが大きな意味をもっている。

また、各部分間の関係にほとんど重みがありません。たとえば私の自邸「シルバーハット」では、中庭をもっているテントの空間が真んなかにあつて、そこが圧倒的に全体の空間の中心を占めていて、その周りに小さな部屋がとりつくという、空間の主従がはっきりしたつくられ方になっているわけですが、末田さんの住宅では、中央にある半屋外の空間は、仕事場とも等価のものであるし、居住部分とも等価のものである。したがって、それぞれの空間がほとんど並列に並んでいるにすぎません。

「非完結的」で、「非中心的」である。それは私自身が建築をそうつくりたいという意思もありますが、それ以上に、末田さんというクライアントが求めてきた条件を素直に整理していくと、そうなっていく。むしろそちらの側からの要請が強いのです。

そして、非常にコストが厳しく、「末田美術館をつくったときも、外壁のペンキは全部自分たちで塗りました。今回も本当にぎりぎりの予算なので、最低限の素材で結構です」ということで、外壁等をどんな素材にしていっても、コストとの絡みで決定されると思います。いままで私が使ってきたメタリックな素材とか、ガラスにはこだわっていません。小国は木材の町ですから、木材を外壁に張ってもいいかもしれない。どんなイメージになるのか、結論めいたことは申し上げられない状況です。

できるだけ自分の統一されたイメージというものをもち、そこにあるもの、あるいは経済的な条件、機能的な条件を組み合わせなければいいではないか、と考えております。

一〇年前には、もうちょっとこだわりがあって、ある統一の意思が強く働いていたような気がするのですが、いまはかなり即物的につくっていきける、と思っっているのです。

そういった意味では、「非中心的」、「非完結的」という言葉に加えて、「非表現的」とでもいったらいいでしょうか。その三つは、一〇年間の住宅設計のプランクの中に、私自身が公共建築をやりながら考えてきたことともかなりオーバーラップしています。

## クライアント、設計、施工が分断された状況から つくる喜びを分かち合える連続性のある姿に戻したい

内藤 廣

内藤 住宅に関してはいろいろな問題点を感じております。私は原則として、年に二つは住宅設計をやりたいと思っつてやっています。

その理由は、住宅の設計がいちばんむずかしいと思っっているからです。大  
学教育では、二年生になると設計課題の最初に住宅の課題が出ます。それが  
そもそもの間違いの始まりで、住宅がいちばん簡単な設計入門のような感じ  
でとらえられているのですが、私もここまでやっつてきて、住宅がいちばんむ  
ずかしいと思うようになってきています。

オフィスビルなら、働いている方はせいぜい八時間ほどそこにいるだけで  
すが、住宅の場合は、一日二四時間いる人もいます。一年一二月、それも何  
十年も同じ場所にいる。なおかつ、いつも二メートルぐらいの範囲内で建築  
のディテールが全部みえる距離にあることからすると、与件としてはいちば  
ん厳しいのじゃないかと思っつています。博物館だったら滞留時間は一時間ぐ  
らいだから、少しぐらいますずくつくつても、大きいところでうまくいっつてい  
れば、まあいいか、と思っつ部分もあるのですが、住宅はそういうわけにい  
きません。

もう一つの理由は、住宅が、いずれにせよ現代的な問題を深く内包して  
いるということです。いまの時代が必ずそこにみえるかたちで新しい建築がで  
きあがってくるとすれば、それはひょつとしたら住宅かもしれない。むしろ  
住宅にこそ、その可能性があるかもしれないからです。

実際のところ、作業量と設計料のバランスはきわめて悪くて、仕事として  
はまったくペイしないし、大変なんですね。だけど、やらなきゃいけないと  
思っつています。

最近、住宅に関していろいろなことを考えるんですね。たとえばホームレ  
スの人が新宿駅の通路にいる。あの段ボールの箱だつて住宅の原形とみるこ  
ともできます。オウムの事件がありました。オウムは、ある意味で、家族  
とか地域社会の崩壊の裏返しのかたちとみることもできる。サティアンなる  
ものがどのように住まわれていたか。住んでいた人は幸せだつたわけでは  
うから、それだつて住宅のかたちだろうと。

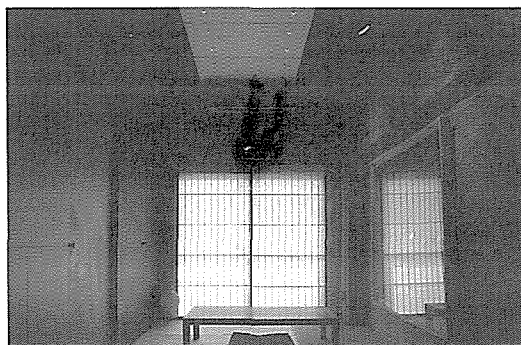
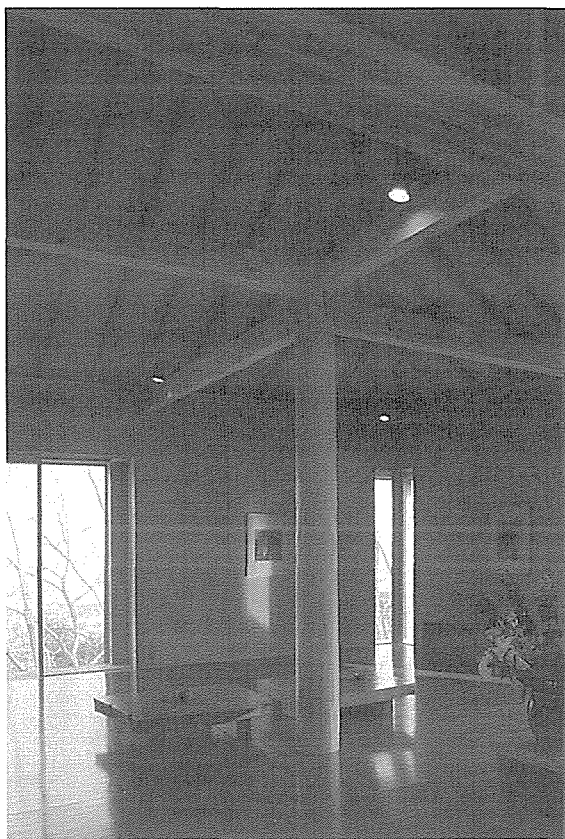
また、インターネットというようなメディアが侵入してきて、われわれの  
生活のなかで、物理的な三次元の大きさがどういう意味をもつのかというこ  
と。

忘れてはならないことに、阪神大震災がありました。あのとき被災者はテ  
レビのインタビューで、最初は家族や友人が生きているか死んでいるかとい  
う、生死の話をしていました。それが二日たつと食料の話になる。食い物がな  
い。水がない。もう少したつと、寒いから洋服をなんとかしてくれということに  
なります。そのあとに、住むところがない。もう少したつと、土地の権利上  
の問題などに話が移つていく。震災が起つてから何日間かの時間的推移は、  
われわれが日常的にもつている生活感覚の底のほうからだんだん積み上が  
ってきたような感じがします。

そういうこともあつて、住まうこととは何なのかもう一回考えてみよう  
と。一九九五年はそんな感じでした。

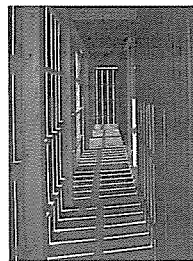
「住宅のクライアントというのは、神経症みたいなものだ」と書いたこと  
があります。かなりの批判を受けるかと思つたら、そうでもなかった。この





●マンションの改造 設計=内藤廣建築設計事務所  
壁と天井を引きはがして、面白いのでそのままにしてある。

●陶芸家の家 設計=内藤廣建築設計事務所  
徹底したローコスト住宅。ほとんど何もしていない裸の状態のまま。



国では住宅を建てるということが人生の一大事業になっていて、建てる側はある種トランス状態になるんですね。住宅設計の依頼を受けると、最初のうちはいいのですが、しばらくすると、この人、普通の人じゃないと思うようなことまでクライアントは言い出し始めます。僕らはそれに耐えなきゃいけない。かなりの忍耐力が要ります。

そういうのを何軒かやるうちに、住宅を建てるというのは、ある種、精神疾患みたいなものであると考えるようになりました。よくよく考えてみると、人間の文化そのものも、ある種、精神疾患のようなもので、いま私たちが言語を介してコミュニケーションしているのも、実は非常に奇妙なことなのかもしれません。そういうことの延長上に住宅がある。ひよっとしたら住宅というのは、ある種の精神活動が生み出したイリュージョンかもしれないと思います。

そして実際に建てる段になると、(住宅に限ったことではないのですが)、ここにもある種、神経症的な世の中の仕組みが働いていることを痛感します。たとえば確認申請を出さなければいけない。住宅金融公庫のいろいろな規制もクリアしなければいけない。そうすると、たとえば屋根だけあって、お手洗いは外でやります、ということではできない。「リビングはどちらですか。キッチンはどこですか。お手洗いはどこですか。寝室はどこですか」と、学校の課題で出されるような与件を満たさなければいけない。住まうということは、そんなにステレオタイプ化されたものではないかもしれないのに、それをうまくくぐらないと、建築基準法上の建物と認知されないという、妙ななかで仕事をしています。そういうなかで、苦しませるいろいろなことをやっている。

本当は、住まうということとはもつとシンプルで、われわれの生活をより自由にするはずのものだったのではないか。しかし、結果として建てられた住宅をみると、建てる人は一大発奮をして、苦しませ、お金も借りる、世の中の法律にもさらされて、なおかつ、誇大な妄想を抱いている。はたして人間がより自由になることを保障すべき住宅、あるいは建築が、こういうので

いいのだろうか、というのがいま考えているところです。

戦後いまに至るも、一般論として、住宅に限らず建築が商品化されるプロセスが戦後五〇年、ここまでの経過だったのではないか。つまり、竣工というものがあって、完成することあらゆる価値が集約されるという、住宅もそのくびきのなかにいる。

それをいちばん加速させたのは、ジャーナリズムに載る、いわゆるきれいな、写真であった。そういうものが一つの加速装置になっていたのではないかと思っています。それをもう一回ほどこいて、建築をぶつ切りではなく、もつと連続した本来の姿、あるがままの姿に戻したい、というのが僕がいまやろうとしていることです。

## デイスカッション

### 住宅設計ははたして初心に帰れるか

立松久昌（編集者） 戦後住宅史をみると、焼け跡のバラックを背景に、終戦直後から一九五〇年代にかけて、建築家たちの熱い思いが、自邸を中心とする「小住宅」に結実した一時代がありました。「社会的器」対「自立的根拠」あるいは「思想」対「風景」として語られてきた住宅は、その後の高度成長の時代、ポストモダンを経て、その語り口が大きく変わってきているように感じられます。いま、住宅設計において社会とのつながりはどうとらえることができるのか、建築家にとって熱くなるものとはいったい何なのか。「はたして住宅設計は初心に帰れるか」というのが、この特集を企画するに至った率直な私の気持ちなのです。

中谷 伊東さんは、最近作をご提示なさりながら、その特徴について、「非完結的」「非中心的」「非表現的」といった三つのキーワードを挙げていただ

きました。

考えてみますと、「非」を抜いた「完結的」「中心的」「表現的」は、ある意味では戦後住宅の考え方の中心を占めるものであります。伊東さんは、戦後住宅の考え方が大きく変わってきていることをおっしゃりたかったのだろうかと思います。

内藤さんは、住宅にこだわる理由として、まず、住宅の質を隠すことができないこととしての作品的価値、現代的な問題を必ず内包していることが挙げられる、とおっしゃいました。

戦後住宅を通してみると、基本的には社会性へのまなざしと、作家性あるいは私的な領域へのまなざしの二つがあつたといえます。一九五〇年代は、それがうまくバランスでかみあつていたのではないか。それが「初心」とか「熱さ」といったことだと思つたのです。その後、六〇年代、七〇年代と移行する毎に、一方の社会性が大きくなっては、作家性が出たかたちで反発する。なかなかうまくバランスでかみあわなくなつてしまつたのではないのでしょうか。

しかし、どんな時代においても、何かしら熱いものはあると考えておりますので、お二人にちょっと前を振り返っていただいて、住宅設計を志すようになったその初心の部分と社会的背景みたいなものをお話いただきましょう。

#### メタポリズムへの憧れと失望、そしてそこからの自立

伊東 私が学生時代に憧れた建築家はメタポリストたちでした。この人たちが提案していた住宅、さらにそれが拡大されて都市にまでかわつていくようなプロジェクトをいま振り返ってみると、五〇年代の社会性と芸術性、表現とがうまくかみあつていた時代の延長上にあつただろうという気がいたします。そして、私自身も何かその先にユートピアをみる思いで、メタポリストたちのプロジェクトに引き込まれていきました。

しかし、いまにして思えば、そのときすでに表現と社会という問題は乖離



を始めていました。そして、大義名分を表現するための社会にいつからか置きかわっていました。それはたぶん日本の社会が加速度的に経済成長を遂げていったバックグラウンドと深い関係があるに違いありません。

私は六五年に菊竹事務所に入りました。それからの数年間を通じて、表現と社会のギャップがみえてしまったということです。そこから自分のものをつくりたいという志向が始まってきました。

私にとってはいちばん最初の住宅「アルミの家」が七一年で、この住宅は、メタボリストの社会性および表現の延長上にありつつ、かつ、自分がそのギャップを痛感して、いったい自分はどうかしたらいいんだろう、ということを経験的にあらわしているような気がします。アルミという素材を用いて、カプセルのような表現をとりながら、一方で、工業製品としての住宅にきわめて裏切られたといったような思いがこもっています。

そこから急速に、私は、社会よりもフォルマリズムに陥っていききました。そして、行くところまでいって、その反動が八〇年を境に出てきます。もう一度、都市の問題、あるいはもっと具体的な住宅で生活行為から住宅を見直

すことはできないのか、と考え始めます。

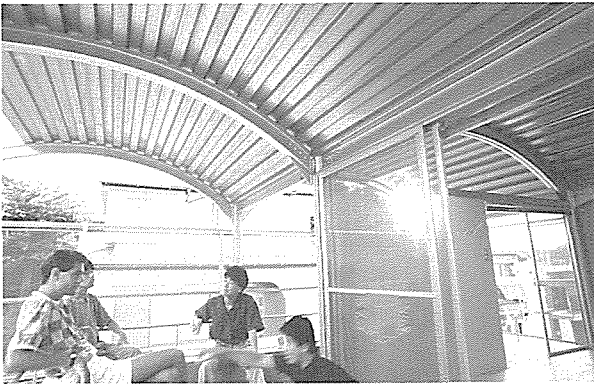
八〇年代の初めに「ドミノ」という小さな住宅のプロジェクトを考えました。これはほとんど知られていない小さなプロジェクトですが、私にとつては、もう一度、社会とか生活の側から住宅をみつめ直す契機になっています。そして、「シルバーハット」とか「馬込沢の家」などの八〇年代に考えた住宅は、変わっていく都市、あるいは変わっていく生活をいつたどのようになり現代の住宅に表現しうるのかを考えたつもりです。しかしやはり表現がかなり勝っていたのかなと、一〇年たってみるとそう思わずにはいられません。いま久しぶりに住宅をやりながら、もう少し現代の生活を素直に、あえて「表現」という言葉は使いたくありませんけれども、もつとストレートに表わせないかということにつながっています。

### 硬直化した現代社会のしくみすべてに憤慨している

内藤 五〇年代は生まれたばかりだったので、私は知りません。社会の求心力とか結合力が、ある種の希望によって支えられていた時代、ユートピアによって保持されていた時代は確かにあったんだろうと思います。五〇年代とか六〇年代とか……。ところが、いま足元をみると、諦めの気持ちがわれわれの社会を維持している原動力になっている。建築も当然、色濃くそういうなかにある。

それはむずかしく説明しなくても、東京の町を歩いて、そこらにある建物を見、あるいは新幹線に乗って、車窓からみえるわれわれの日本の景色をみれば、そこになんの希望も抱いていない人たちの暮らしがみえてくる。それでもいいかと思えるときもあるし、それじゃいけないと思うときもあります。もつとなんとかできないかな、それは建築家の仕事ではないのではないか、でも、建築家にもできる部分があるんじゃないか。

あらゆるものに腹が立っていることは事実です。それは何かやるにつけ、社会の法制度とか、資本主義社会の仕組みとか、それをつくっていく生産という場所、そういうものに染まっているクライアント、いろいろなもの



●馬込沢の家 設計=伊東豊雄建築設計事務所



●シルバーハット 設計=伊東豊雄建築設計事務所

が邪魔だなとか、おかしいなと思いつつ仕事をしているので……。自分がやっている事務所ですらそういう色がどうしても入ってしまう。そういうことすべてをもっと変えていかなきゃいけないのじゃないか、どう変えていけばいいのか、というところがなかなかみえないので苛立っているところがあります。

公共建築であれ住宅であれ、建築をつくる場というのが、建物の全体像を決めることもそうだし、コンセンサスをつくることもそうだし、ディテールを決めることもそうだし、見積りを落とすこともそうだし、あらゆることがチャレンジする場所だというのが、特にこの一、二年強く感じていることです。

### 自らのなかにある作家性が邪魔になる

内藤 私は七五〇七七年にスペインにいました。それから中近東などを一年ほどブラブラして、日本に帰ってきたときに、日本というのはなんてところだろうと、自分の生まれ故郷のある種の感慨をもって眺めた記憶があります。そのなかで唯一救いだつたのは、木造の上棟式の風景だった。大工さんが木造を歌って、クライアントがいて、設計者もいたかもしれないけれども、それはわかりません。非常に清々しくて美しい建物。こういうこともあるのかと思うような美しさを感じた記憶があります。ところが、建物が目を追ってできあがるにつれ、だんだんとそこらにある普通の住宅になっていく。

そのことはいったい何だろうと、思い返しているんです。

現場にいくと、多くの場合、左官屋さんや三日間ぐらいいるだけ、鉄筋屋さんも基礎が終わったら別の現場にいきます。現場で彼らと話をすると、「できあがった建物をみたことがありますか」と聞くと、「ない」というんですね。建てる側にある種の喜びみたいなものがない。一つの仕事としてやっているだけです。同じことがいろいろな局面ですべてそうです。いろいろな職種が入ってきます。サッシュをつくる人、ガラスをつくる人、コンクリートを工場で作る人、木を削る人、部材をつくる人、すべての人が建築という

ものがある種の価値が集約されていく商品のように扱っている。そうじゃないんだということをはどいていきたいんです。もつと建築はつなげたもの。建てる人も、それをアレンジする人も、つくる人も、使う人もが、もつと連続した運動体のような流れであるべきであろうと思うんです。

私がいまいちばん熱くなるところは何かといえば、そういうところなんです。きょうは正直に告白しますと、何か他人と違ったことをするのが作家だとすれば、自分としては作家性というものが邪魔になる場合があります。別に違つてなくてもいいじゃないかと。作家性というものの土俵に乗ったときに自分の存在がややしくなる。そこでうまいことやったところで、自分としてはあまりうれしくないと思うんですね。

それよりは、全体の流れのようなものがみえたときが本當にうれしい。クライアントも、つくる人間も全部含めて、全体がつながってみえたときにうれしさを感じるのであって、ちょっと変わった空間ができた、変わった建物できたということには、最近、ほとんど喜びのようなものを感じなくなりつつあります。

### 情報化時代の到来に負けたメタポリズム

伊東 メタポリズムの思想と離れて、作家としての菊竹さんを、いまでも大変尊敬しているし、私に建築を本當におもしろいと思わせてくれたのは菊竹さん以外にいませんでした。大学でメタポリストたちのプロジェクトをみていましたが、菊竹事務所の最初のひと月の感動のほうが大学の四年間よりは圧倒的に凄みがありました。建築はこんなふうにつくられていくものか、と実感したのです。

菊竹事務所に入ってからすぐにムーブメント、つまりバスユニットの設計に一時期携わりました。これも大学時代には、住居のなかの工業化される部分を取り替えていける。それが表現にも結びついて、インフラなものとエレメンタルなものとの組み合わせられた表現が、魅力的に形成されて、未来の住宅や未来都市を表現していくのだ、といった思想に憧れていたわけです。しかし



実際にムーブネットの設計を始めると、表現の部分にどうしても頼ろうとする。同じ時期にOTTO、INAXが同じようにバスユニットを開発するのですが、そちらは経済性の追及が中心になって、一方的に社会に普及していきます。

では、ムーブネットがOTTOのバスユニットよりも何によって優れているかをいくら考えても、何も自分で見当たらない。また、取り替えられるということが表現になっていたとしても、実際には外側がサビていくだけであって、それ以上の何の意味もない。むしろ表現がデメリットにしかなくなっていかない。そういった矛盾がいろいろな部分で出てきました。

つまり、急速に成長していく工業化社会のなかで、建築家の表現が一方的に裏切られていくという過程、その真ただなかにいたという言い方ができると思います。そして、そこで自分が毎日やっていることはいったい何なのだという方向にいきました。見事にそれをアジテートしてくれたのが篠原一男さんであつたのです。

中谷 内藤さんも同じ菊竹事務所の出身でおられますね。

内藤 私がいちばん惹かれたのは、菊竹さんの六〇年代の建物を幾つかみて刺激を受けたことと、学生のころに一度直接お話を伺う機会があつて、そのときに、原理原則を超えて常識を破っていく力のようなすさまじさ、パーソナリティに惹かれたんですね。

私が入所したときは、伊東さんも、長谷川逸子さん、富永譲さんも出られたあとで、僕の下には大江匡さんがいたぐらいです。ちょうど菊竹さんが六〇年代に猛スピードで走つたあとと休みみたいな時期で、若干迷いのようなものが入っていました。それが何だったのかを僕は一〇年ぐらいずっと考えていたんです。社会性というものと作家性というものに、あれほど鋭く切り刻まれてしまった建築家はいなかったのじゃないかと思えます。社会的な部分を広く自分のなかに取り込んでいく能力に関して、あれほど優れた人はいないと思つています。それを自分の作家としての感性とどう付き合わせ

るかということが、私がスタッフとして働いていたときは、なかなかうまくいかなかったような気がします。

その大きなキーワードとして、菊竹さんがよくいつていたのは、情報化時代のことだったんです。コンピュータが入ってくる、ネットワーク社会ができる、そういう「情報」というものをどう建築のなかで具現化するか。ところが、それがかたちにならない。

よくよく考えてみると、メタボリズムというもののなかに、情報という観点が入っていなかった。メタボリズムはあくまでもハードウェアの問題であつたというところに、七〇年の大阪万博、あるいはそのころを境にしてテレビが生活のなかに色濃く入ってきたなかで、引き裂かれていったのではないかと。メタボリズムの敗北は、情報化社会の到来にあつたのではないかと、漠然と考えています。

## 住宅設計という思考の可能性

中谷 内藤さんの『住宅という神話』という論文を読むと、現在においてもなお、住宅が建築を考えるうえで出発点になりうるであろう、と書いておられます。それから、伊東さんの作品が九〇年代の住宅に与えたインパクトはかなり大きかつたのではないかと思えます。以前の住宅で考えておられたことが現在どのように展開しているのか。そのへんを、住宅という思考の可能性としてお話しただければと思うのですが。

## 個と家族と社会のありようの大変化が建築を変える

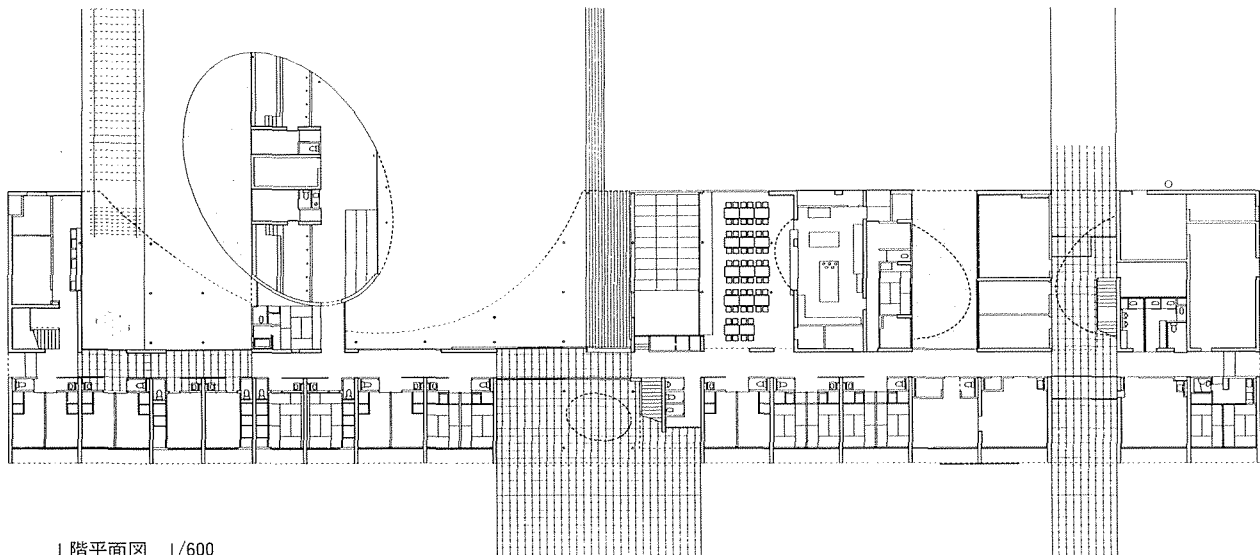
伊東 非常にむずかしい問題だと思います。冒頭にお話した私が住宅を離れたのと同様に、初めて公共建築を手掛けることになりました。公共建築とはいったい何だろうかということが、そのときはよくわかりませんでした。やってみて、ずいぶんいろいろなことがわかりました。

それまでのコマースナルな建築や住宅に比べると、ずいぶん楽にできちゃ



食堂でくつろぐお年寄りたち。

●養護老人ホーム八代市立保寿寮  
設計＝伊東豊雄建築設計事務所



1階平面図 1/600

うものだと感じる部分もありましたし、非常につまらないと思った部分もあります。住宅では、クライアントという個人と設計者との関係において、多かれ少なかれ住宅の条件に関してかなり突っ込んだ議論が行なわれ、それが表現に返っていくわけですが、私にとっての公共建築では、そういうディスカッションはありませんでした。一方的に与えられた条件を受け入れて、それを表現に置き換えていくだけでした。

それでは、それをどうやって突き崩していくことができるだろう。もう少しおもしろい公共建築のあり方を、いまのシステムのなかでいかに実現しうるのだろうか、自分なりの戦略を考え始めたのが九〇年代初めです。

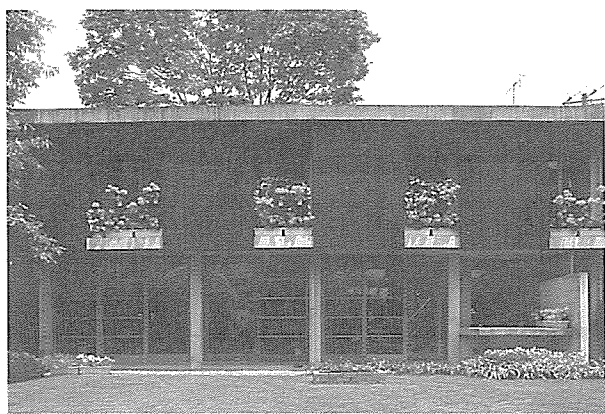
そして、八代市での二番目の公共建築の仕事の養護老人ホーム、三番目の消防署においては、そういう部分、つまり建築の社会性の問題に多少は入り込むことができたと思います。これはたぶん、人口一〇万そこそこの町のスケールで、何人かのお役人、あるいはクライアントとしての消防署なり老人ホームの管理者たちとの話し合いをうまくクリアしていけば、できるということ、東京とか横浜といった大都市ではそうはいかないだろうという予測があります。

老人ホームは、五〇人の定員で、いままで手掛けた公共建築のなかではいちばん住宅に近いと思いますが、そこでの生活が、ある意味では東京でマンション暮らしをしている人たちの生活と近いことを、できてから感じたいですね。

あのような埋立地で、しかも田舎のお年寄りたちが、私が設計するようなスチールとアルミ、ガラスを使った老人ホームにはたして住めるのだろうかと思っていたわけですが、意外に楽々と彼らは住みこなしています。非常に小さな町にいままで住んでいたにもかかわらず、きわめて個人主義的で、気の合う人たちだけで小さな集団をつくって一つのコーナーを占有し、また別の集団が小さなコーナーを占める。食事等はあるきまった時間に全員が集合しなくてはなりません、全員が一つの家に住むことは極力避けたいと彼らは思っています。

したがって、それが老人ホームとして完結してしまうと、非常に悲惨なことになる。町の人たちが訪れるとか、建築家たちが見学に行くとか、外からの人間が入り込んでくるのが彼らにとっては大変な救いになっています。そういう完結しないシステムをつくり出していくことが、こんな田舎の老人ホームでも非常に重要なのだと実感しました。そんな思いがいま末田さんの住宅につながっています。

実は、老人ホームの設計をする少し前に、何人かの若い建築家たちと新しい住宅についてのプロジェクトをつくったことがあります。そこでは、現代は家族のそれぞれが個人に返っていったって、自らのネットワークを外の社会に對してもつ。小さな子どもでも、いまの都市空間ではむしろ家族より外に對して強いネットワークを張っている。したがって住宅のプランは、従来のようにリビングルーム、ダイニングルームを中心にその後個室があるのではなくて、むしろ社会に對して個室が向かい合っているようなプランのほうがいいのではないかと考えて、そのモデルを老人ホームのプランニングとして計画してみたわけです。



しかし、そういった住宅のプランはいかにも観念的であり、現実に住宅をつくるときにはいったい自分はどのようなのだらう、とずっと考えてきたわけです。末田さんの住宅をやることになり、末田さんの条件を素直に受入れたときに、それぞれの個室に相当する部分がかなり外と向かい合って、しかも外に對して開いているようになった。ですから、自分としては非常に素直にそのダイアグラムがそのままプランになったのだなということを実感し、こういうつくり方があるのだということ、あとになって理解できました。そんな経緯です。

ですから、公共建築で考えていることが住宅にもまったくあてはまるし、また、住宅で考えなくてはいけないことは、公共建築でもまったく同じかたちで考えなくてはいけないのではないかと思っています。

### どんなに熟考しても、一〇年後には役に立たなくなる間取り

内藤 自分の事務所をつくってしばらくは自分の家を設計していました。実は自分の家を設計するのに、三一案もつくり、実施設計も二回終わらせていました。実際にできたのは三三三案目です。それが私の住宅設計の始まりです。私はだいぶ親不孝をしましたので、これからは親と住もうと決意した段階で、間取りとか考え始めたわけです。ところがいくらやっても間取りがまともありません。三〇三案目ぐらいでハタと気がつきまして、いくら間取りを熟考しても、一〇年後にはその間取り自体が全然役に立たない。であれば、もっとオープンに、楽に考えてもいいのではないかと、というのが私の住宅のきっかけです。どういう作品をつくるかということとはあまり考えていなかったのです。

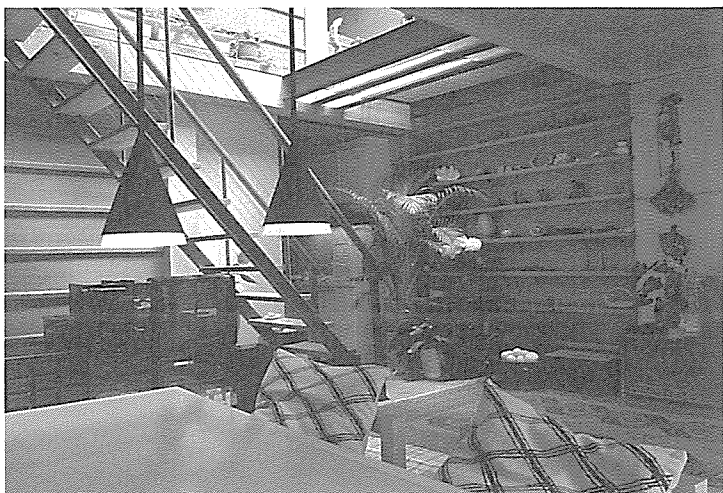
そのことがその後、私が設計していくうえで、非常に大きな意味をもっています。

たとえば、鳥羽市に「海の博物館」をつくりましたが、設計を依頼されたとき（一九八五年）は、博物館の収蔵物はだいたい一万点弱でした。ところが、収蔵庫を建てるのに設計から竣工まで四年ぐらいかかり、その間に収蔵



●自邸 設計＝内藤廣建築設計事務所

両親との2世帯住宅。設計にあたってプランを熟考したが、30案目ほどで、10年もたてば間取りは役に立たないことに気がついた。それならば、もっとオープンに楽につくつたらいい……、ということでほとんど間取りがない住宅である。



物が一万五千点になってしまった。お金がないものですから、またトコトコと展示棟を建てて、七年かけて一九九二年に博物館がようやくオープンしたときには、収蔵物が二万五千点ぐらいになっていました。博物館ができたことが新聞やテレビに出たものですから、俺のところにもこんなものがあるよというものが集まって、一九九五年現在で四万点を超えています。つまり、一万点ほどのために設計したのに、建物ができあがったこと自体で中身がどんどんパンクしていく。

住宅であれ大きい建物であれ、似たようなことがあるわけですね。どんどん物はふえるし、最初に考えたとおりに進まないし、どんどん変わっていく。中で営まれている活動が生きたものである以上、建築はどんどん時間とともに変わっていく。これはまたメタボリズムに戻ってしまう部分があるわけですが、変わっていかざるをえない。

では、そういうことを前提にして、建築は何を保証するのかということですね。メタボリズムのように、組み替え、増殖ということもなかなか考えにくい。私がいまできるだけそうしようと思っていることは、外と内とを切り離すいちばん原始的な建築の姿——つまり、まずシェルターとして建築を考えるということです。悪い言い方をすれば、中のことは知ったことかということになります。最低限自然から人間の生活を防御する部分にエネルギーを投下しようというのが、住宅から発生した建築に対する私のいまのつくり方です。

コミュニケーションの役割も担う建築

大河直躬（千葉大学名誉教授） いわゆるモダニズムの建築の考え方は、最初は非常に贅沢な人の住宅とか公共建築とかに使われました。それが世界で本当に一般大衆の住居に応用されたのは、大部分は第二次大戦後なんです。ヨーロッパでも、戦争が始まるちょっと前、三〇年代に一時実験的なものがつくられましたが、それはほんのちよつと前、第一次世界大戦から三〇年代までの社会的な住宅は、みんな伝統的な様式ですね。非常にいいものはあります。

それが一般の大衆社会の住宅に応用されたのも、ごくわずかな時期で、すぐ大衆社会の住宅には合わないことがわかるわけです。すぐパッとみんな捨てられてしまいました。そこには幻想があったと思います。ああいうもので大衆社会の住宅をつくり出していけるといいます。

伊東さんがそういうイデオロギーも含めあらゆるものを否定した「非〇〇」といわれましたけれども、その気持ちもよくわかる。一方で、そうすると、コミュニケーションとしての建築の役割はどこにいつっちゃうんだ、ということも当然ありますね。

建築は、単に個人と社会をつなぐものだけではない。建築をつくること自体が、昔は人を結びつけることに非常に大きな役割をしていました。だから、上棟式のような儀式もみんなやるわけです。

建築の役割をそういうものまで考えていくということ。建築がもつたものがつたもの——モノとしてもつながっているし、個人の部分と社会とがつながっているし、つくる人も住む人もつながっているということですね。そう考えていけば、将来的がみえるかな、と伺いました。

### 建築をつくっているのは建築家だけではない

服部岑生（千葉大学教授） 建築をつくる人は建築家だけではありません。非常に単純な例を出すと、建設省には都市工学科出身者、あるいは法律をつくるプロ、事務官もたくさんいて、その人たちが考えることが建築を大きく決めています。

先ほど来、内藤さんがいつておられる憤慨の対象にある体制というのは、彼らがつくっている。もちろん建築出の人もたくさんつくっているのですが、非建築家の人たちがたくさんつくっている。彼らも非常に大まじめに住宅、町並みをつくっている。そういう意味では工業化もすごい力ですね。

建築家には、そういう非建築家の領域との渡り合いが、システム論としてとらえられています。非建築家の領域はますますそういうふうになくなっていくような予感がします。それを私は悪いと思っているわけじゃないんです。建築というのはそういうものだと、客観論としてそう思っているんです。建築家の活動がどのくらいの社会のポジションを占めているか、ということですね。そのなかの全体がどうなっていくかをもう一度問い直さないと、「社会的器」と建築家たちが言い張っていても、その「社会的器」にはいろいろなとらえ方、条件があるので、どうなのだろうと思います。

### コンピュータ時代の到来は、建築のありようを大きく変える

中谷 メタボリズムが戦後住宅の一端結点だということは確かだろうと思います。よくも悪くも、メタボリズム、特に菊竹さんの作品群に戦後住宅の間題点が象徴されているわけで……。伊東さんも内藤さんもそこから出られてそれを積極的批判として現代に転化している、というふうにきれいにまとめ

てはいけないものでしょうか（笑）。

伊東 大河さんは、じゃ、建築って何になっちゃうんでしょうね、とおっしゃられたのですが、昨年一年間、仙台メディアテークの設計を通じて、相当建築に対する志向を変えられました。計画という問題をいまだどう考えたらいいのか、という問題にかかわってくださるわけです。

仙台メディアテークは、図書館、市民ギャラリー、AVセンターなど、幾つかの施設の複合体です。新しいプログラムを提示しろというのがコンペの条件でした。そこで、あるプログラムを提案しました。ところが、いざ設計が始まってみると、その建物を要求した市民たち、直接的には利用者団体ですが、彼らにとつてはきわめてクラシックな図書館、きわめてクラシックな美術館がほしいということであつたわけです。その間にきわめて大きなギャップがある。

しかし、そのギャップを一年間いろいろな場で議論して、いまあるところへおさまりつつあるわけですが、そのプロセスを通じて、さつき内藤さんもおっしゃったように、プランをつくるのがほとんど意味がないとか、完成像を予想することがほとんど意味がないということがわかってきました。

しかもこの建物には、コンピュータを大々的に入れて新しいメディアに対応していくという要素がかなり入っていて、たとえば四年後にそれがいったいどういうことになっていくのかを、だれも予測がつかない。そのような状況のなかで設計を進めていかななくてはならない。

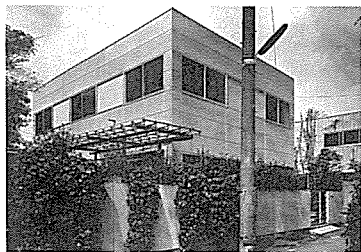
そうすると、完結した建物は考えようがない。そのことは私にとつては大変おもしろいことです。表現というものに対する自分の考え方を根底から変えていかないと、この建築はできていかないのだなど。表現者としての設計者ではなくて、プロデューサーに近い役割に徹底的に変わっていかざるをえない。それと同時に、できあがる建物の状態は本当に一つのあるプロセスでしかない。できた翌日からこの建築は変わっていくだろうということがいまからわかっている。そんなことが末田さんの住宅の設計にも影響を及ぼしていると思います。

僕はいまの社会のなかで、建築の完結性、あるいは外部と内部という概念を徹底的に切り崩さない限り、日本の都市の風景も変わっていかないし、建築という概念も変わっていかない。あまりうまくいえないのですが、それは建築のコスモロジーの問題にもかかわってくるでしょうし、それを徹底的になし崩しにしていくことが、私の「非〇〇」という言い方でいっているホッと部分であるというわけです。

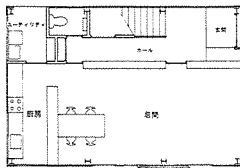
### 空間の設計ではなく、時間の設計をしているのだ

内藤 伊東さんのおっしゃることは、本当にそうだと思います。できあがる建物のあり方は、たぶん伊東さんと私とは違うというのをいわれたのだと思うのですが、基本的には、戦後五〇年をつくってきた法制度であるとか、建築を成立させる仕組みとかが制度疲労をきたして、建築が社会のなかでできあがるということ自体がかなり異様な硬直状態になってきている。本来、エンドユーザーであるとか、それをつくる人たちという生身の人たちの立場に立てば、きわめて異様なことが公共建築でもあたりまえのこととして通っています。たとえば、予算化される段階から間取りが決まって、機能が決まって、それに予算を張り付けてという、そういうもろもろがだいたい疲れしている。住宅ももちろんその外にはない。

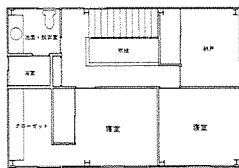
それをどうやったらほどこいていけるか。ほどこないと何もみえない。もう結果はわかっているわけです。もつと建築の価値を開いていく。開き方はいろいろあると思うんです。でも、それこそが問題なのじゃないか。その先にはいままでと全然違った建築の考え方が現われてくるのではないかと、かなりリアルに感じています。伊東さんがいわれたこととつながりますが、基本的には、時間という話なのではないか。このポイントが非常に狭い範囲で建築のなかに閉じ込められていた。建築は、時間ではなくて空間だといっていたが、実はわれわれは時間の設計をしているのだということを感じ知らされていくところではないかという気がします。



写真/大橋富夫



1階平面図



2階平面図

### ●商品化住宅「ドミノ」プロジェクト 設計=伊東豊雄建築設計事務所



すまいるんの特集のコアとなる記事は、毎号このようなミニシンポジウム形式でつくっています。

「非……」という否定表現しかできないところこそ、現在の特徴か  
中谷 伊東さんが「非」という言葉をつけた言葉、つまり「中心性」「完結性」「表現性」とかが、すべて昔のイメージのものである。そういった昔の建築の語られ方が、ちょうど戦後建築における五五年体制のようなものと考えられると、おそらく伊東さん、内藤さんはそういったものを超えようとしている。それも現在かなり明瞭な方法によってそれを切り開こうとされている。しかし、それがどうしても「非〇〇」とか、「アフター〇〇」とか「ポスト〇〇」というかたちでしか表現しえないところに、逆にもどかしさを感じるということもあると思います。  
おそらく戦後の五五年体制的な住宅像の考え方を一回批判し直したところから、もう少し自由に住宅の考え方を把握できるようなものを新しい言葉として提出しうるのでどうか。あるいは、いつまでも「非〇〇」という特殊な否定を維持させることこそが大事なのかもしれません……。  
話は尽きませんが、このあたりでおわりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



# 近代住宅史はいまどどのような地点にまわっているのか

——建築医の立場から

## 大河 直躬

### 1 ♪ わからねえ奴らと わかり合いたくなんかねえ♪

日本の現在の住宅をめぐる状況は、住む側の人にとっても、住宅をつくる側の人にとっても、非常にわかりにくい。これからの住宅はどうあってほしいか、良い住宅をつくり上げるにはどうしたらよいかについて、多くの人が賛同できる意見や理想は見いだしがたい。

一九六〇年代であったなら、公営の住宅団地に住むことが、住む側の一つの理想であった。つくる側も、個々の住戸の間取りと設備の改良や、建設技術の生産性の向上に懸命の努力をした。その後の七〇年代にかけての一戸建ての住宅でも、注文住宅であれ量産住宅であれ、事情はほぼ同様であった。

しかし、現在の住宅展示場や住宅用設備のショールームを訪れる消費者は、いま住んでいる家とはあまりにもかけ離れた豪華な居間、丸や三角のオブジェのような便器を見て、自分たちの欲しい住宅は本当にどれなのか、戸惑うばかりであろう。といって、マンションを購入しようとするれば、今後の値下がりや、将来の全面的修繕あるいは地震で被害を受けた場合に、区分所有から生ずるであろう厄介な問題が、不安を感じさせる。

現在の日本の住宅は、設備等の個々の技術の進歩、意匠の平均水準の向上、文化会館や史跡公園等の都市施設の充実など、個々の部分を取り上げると、以前よりもはるかによくなっているものが多い。しかし、全体として見ると、

大きな欠陥がある。阪神・淡路大震災は、それを白日下にさらけ出した。

六千余名の犠牲者、六万余棟の倒壊建物、受賞を重ねた高層集合住宅の鉄骨躯体の損傷、修復されて間もない重要文化財住宅の全壊など、一般市民だけでなく、それぞれの分野の専門家をも驚かせてあまりある被害であった。

また驚くべきことは、地震後一年以上経過しても、長田・東鷹取等の災害の甚大であったインナーシティ地区で、復興計画が未確定なことである。

大震災の直後に、多くの建築の専門家が現地へ赴き、詳細な調査をされたことや、地元在住の専門家が、住民の再建計画に献身的な協力をされていることは、敬服の至りである。それにもかかわらず、建築学会等における発表や討論を聞くと、被災から何を学ぶか、今後どのようにすれば二度とあのような惨事を起こさないのか、いっそうに見えてこない。

ジャーナリズムの仕事は、西欧では、事実を報道し (report)、説明し (explain)、解明する (clarify) ことだと言われる。この場合の説明とは、事実の相互の関係を明らかにすること、解明は真の原因を明らかにすることであろう。このような原則は、ジャーナリズムだけでなく、今度のような被災についての専門家の調査にも当てはまる。大震災についての報告に、今後そのような説明と解明が、果たして期待できるのだろうか。

さて、現在の住宅の不透明な状況に対する処方箋として、既にいろいろな提案がされている。第二次大戦後の小住宅設計の「初心」に戻ろうというの

も、その一つであろう。民家や近代の数寄屋建築に受け継がれた、伝統的な木造住宅の技術と意匠を、現代住宅に生かそうという努力もある。

これらの過去の遺産の再評価は、個々にそれなりの価値を持っているが、その内容と現在に持つ意味を、他の人に十分に「説明」し「解明」するのではないと、感傷的回顧か小グループの運動に陥る危険があると思う。

これらは、主として戦後から七〇年代までの社会を経験した世代からの提案であるが、もつと若い世代の建築家の意見はどうだろうか。筆者は、建築の雑誌等に現れる彼らの意見について、次のような印象を持っている。

まず第一は、自己の感性に忠実であつて、そこから発する意見を率直に述べていることである。二番目は、世界各地の住宅や都市を見た経験が豊富なことである。したがって、イデオロギーに基づいた、あるいは日本だけを視野に入れた発想は稀である。これらは、前の世代より優れた点であろう。

しかし、他の人に自己の考えを十分に伝え、理解させようとする気持ち、特に住む側の人にそれを伝えようとする気持ち、希薄だと思ふ。若い世代のこの傾向は、建築の世界に限つたものではないらしく、先日読んだ新聞の連載シリーズ『傷つくのがこわい「やさしさ」世代の若者たち』（朝日新聞九六年四月四日）に、アマチュアバンドの次のような歌詞が紹介されていた。

♪嫌いな奴らと 無理してつきあうために 俺は生きてるんじやねえ♪  
♪わからねえ奴らと わかり合いたくなんかねえ♪

現在の日本の住宅をめぐる状況の特色は、一言で言えば、コンタクトやコミュニケーションの欠落である。専門家は個別の事実の調査や技術の探究に没頭し、老人世代は自分が良かったと思ふ時代を回顧し、折角の若い世代の感性は、気の合った仲間うちの枠を越えることができないでいる。

このようなコンタクトやコミュニケーションの欠落が、さらに進行してゆくと、それらを本質的な要件とする住宅と都市にとって、致命的な危機になることは、多くの人が理解されることだと思ふ。また、この状況は、冷戦の

終結やバブル経済の崩壊のためだけではなく、もつと奥深い理由を持つてであろうことも、多くの人が感じておられることであろう。

筆者は、このような状況は一時的なものではなく、近代住宅の歴史がたどり着いた必然的な結果であると理解しているので、まず以下で簡単に、近代住宅の歴史的発展の道筋をたどつてみたい。

## 2 近代住宅の歴史的発展

近代住宅（ここでは近代市民のための住宅の意味）の歴史は、西欧諸国において、絶対王政の確立とそれに続く産業革命によつて、一八世紀後半に人口の都市への集中が開始されたことに始まる。

その後の発展は、次の四時期に区分されると思ふ。

第一期（西欧では一九世紀半ばまで、日本は明治維新から二〇世紀初頭まで）

この期間は、近代住宅の独自の形式は未成熟で、西欧では町や村から都市に移住した人びとは、既存の町家の上部を改造してつくられた住居、周辺の村落に建てられた住居等に住んだ。地下室に住む貧しい人も多かった。

日本でも、既存の武家屋敷、町家、長屋、周辺の村落に建てられた住居を利用した。上下水道は未発達で、疫病の流行が脅威であった。

第二期（西欧では一九二〇年代頃まで、日本では一九四五年まで）

産業革命の成功によつて、先進国に富が流入し、郊外での一般市民のための住居の大量建設が始まる。ヨーロッパ南部や特別に大規模な都市では煉瓦造の中層アパート、中北部ヨーロッパと北アメリカでは、煉瓦造の低層の連続住宅と、煉瓦あるいは木造の一戸建てが多く使われた。上下水道の発達、エレベーターと都市ガスの利用が、その質の向上に貢献し、住居の間取りは合理化されてゆく。

日本でも、大都市で郊外住宅地が開発され、中廊下型間取りの木造の平屋もしくは二階建ての住宅が大量に建てられる。旧市街の古い家に住む人もまだ多かったが、日本の技術・習慣に基づく市民住宅が成立した。

この時期の住居には、「狭いながらも楽しいわが家」という言葉が語るような、明るい面と暗い面があった。明るい面は、都市に住む小家族が独立した住む領域を確保できたことであり、それはガラス戸・上水道・都市ガスによって、町や村の彼らの以前の家よりも、はるかに便利で衛生的であった。

暗い面は、住居面積が以前の町や村の住居よりもはるかに狭いことである。客をもてなすリビングルームと座敷も、以前のように広くつくれなかった。

それを補うために、西欧では様式家具、日本では茶箆筭等を無理して購入して飾った。当時のフランスの小説に、様式家具を買えなくて正式の結婚ができない女性がしばしば登場する。今の若者には信じられない話である。また、洋の東西を問わず、クリスマスの飾りつけ、雛飾り等によって、「楽しいわが家」の幻想を高めるいじらしい努力をせざるを得なかった。

市民の生活に内在したそのようなストレスが、この時期の後期に現れる芸術上のロマン主義（建築ではセセッション、アールヌーボー等）と、社会思想上のユートピア主義の土壤になる。現実の制約を逃れた美による慰めと、現実の制約を越えた社会組織の待望である。

### 第三期（一九六〇年代まで）

以前は機能主義、現在は一般にモダニズムと呼ばれている、建築と住宅の設計に関する理論は、一九二〇年代のヨーロッパに現れるが、戦争の影響もあって、社会的に定着するのは一九四五年以降である。しかし、一九三〇年前後に行なわれたこの理論の普及のための住宅展や、集合住宅の実例を見ると、無装飾というような意匠上の特色のほかに、住居についての考え方が、それ以前とどう違ってきたかが、よく理解できる。

まず、既存の街路との関係が希薄になってゆく。それまでの集合住宅の一階の隅の部分などにあった店舗と軽食堂が姿を消す。中庭を囲んでブロックの周囲の街路沿いに住居を並べた配置から、中庭を囲む一辺を破った配置や、街路から後退して住居を並べる配置に変わる。

ユニット式の台所設備が考案されたのもこの時期で、それを活用して個々の住居の間取りを、少数の標準タイプに限定するようになる。

これらの二つの動きは深く関係していた。ブロックの周囲に住居を配置した形式は、隅の部分等で不整形の間取りが生じ、方位も自由でない。街路との関係を無視すれば、間取りをごく少数の標準タイプに限定できる。

また実験住宅のなかには、街路に面した窓を細いスリット状にして、意図的に街路との関係を拒否するようなものも現れた。

ウイーン市は一九二〇年代に公営の集合住宅をいちばん多く建てた都市であるが、モダニズム以前のものには、とても親しみの持てるものが多い。シエーンブルン宮殿近くの緩い傾斜地にある広大な集合住宅は、アーケードによって中庭が相互に繋がれ、途中に石段もあって、通り抜けるととても気持ちよい。多くの場合、街路から窓辺の人に話かけることができる。そのような良さは、モダニズムの影響が及ぶと次第に姿を消した。

日本でも、一九五〇年代から本格的な公営の集合住宅の建設が始まり、団地族という言葉が流行した。その配置と間取りの基本的原理が、どのようにして西欧で生まれたかは、右の例から理解していただけたと思う。

### 第四期（一九七〇年代から現在まで）

右に述べたようなモダニズムに基づく集合住宅は、第二次大戦後の世界の多くの国に広まった。西側諸国だけでなく、東ヨーロッパ諸国、中国、ラテンアメリカ諸国等にも広まり、その外観もほとんど一様で、どの国の住宅かを写真で判別するのが困難なほどであった。また、先進国では都市の地価の高騰等の理由から、高層の集合住宅が建てられるようになった。しかし、このようにモダニズムの集合住宅が、少数市民の住居から多数の市民のための住居へと移行してゆくなかで、それまで予想されなかった欠陥があらわになった。すなわち、そこで頻発する青少年の非行（麻薬・売春等）やバンダリズム（財産・器物の意図的破壊）等の社会的問題である。

何故それらが新しい集合住宅、特に高層の集合住宅で発生しやすいのかの客観的な説明は困難だと思う。しかし、バンダリズムの激化のために模範的な高層集合住宅を爆破して取り壊した例もあり、高層集合住宅の建設をとりやめる国も現れた。最近では、集合住宅団地がキャンピング団の縄張りに分かれて、



境界を通り抜けようとした母子が射殺された例さえある。

このような状況に対して、いろいろな対案が現れた。筆者が当時の西ドイッとオーストリアに在住した一九八〇年前後の時期は、一般にオルタナティブの名で呼ばれる、そのような対案の盛りの時期であった。気の合った若者が集まり住むコミュニティ、日乾し煉瓦や押し固めた干し草で壁をつくった住宅、低層だが高価な集合住宅などいろいろであった。

大学の学生寮の壁面を、個々の学生グループに好きなように設計させた例では、各室にモダニズムによる幾何学的な統一された壁面を採用したグループは、他の学生からコミュニティと嘲笑されていた。

これらのオルタナティブは、いずれも定着することなく消えていった。ポストモダニズムの意匠が住宅に影響を与え始めるのも、この頃からである。

しかしポストモダニズムは、モダニズムより以上に、既存の住環境と関係を持つことを避ける傾向を持つ。日本の例を見てもわかるように、ペジメント（西洋古典様式の破風）のような歴史上使われた様式言語を使う場合も、その国自身の過去の建築とは関係がないのが通例である。

それらは元の建築様式の文脈から切り離された断片であり、「ある黄金時代があった」こと、あるいは「まだ世界のどこかに理想郷がある」ことを感じさせる道具立てに過ぎない。

### 3 建築医の立場の勧め

以上から理解できるように、近代住宅は出発の当初から、かなりの弱点を内在させていた。面積が、町や村の住宅よりはるかに狭いことが、その一つである。また、見知らぬ人びとが集まった住居地であるが故に、近隣関係は、長い年月をかけて築かれた町や村に比べて弱かった。しかし、当時の人びとは、古くからの習慣に基づいて、良好な近隣関係を保つのに努力した。

第二期につくられた住宅地域の街路が、たとえ貧しい人びとの住む地域でも、現在なお清潔で安全であるのはそのためであろう。私がウィーン市で住

んだそのような地域では、住民は自分の町にとっても愛情を抱いていた。一般に他人に対して冷たいといわれるウィーン市でも、集合住宅の隣人の子どもの誕生日には、早朝そつと扉の前に贈り物を置く心遣いを持っていた。

そのような住宅は、もちろん、面積の狭さの他に、衛生・便利さなどに大きな弱点があったが、その改善の方法として採用されたのは、この面積・衛生・便利さの向上にのみ目標を限定するものであった。

このような建築と都市計画の方法は、以前は機能主義と呼ばれたが、理性主義 (rationalism) と呼ぶ方が適切であろう。この方法にとっては、理性によって把握できるもののみ、究極的には数学的に計量できるもののみが、確かな存在である。心や感覚によってしか捉えられない、隣人・既存市街・風景との関係や、材料の触感は、当然のこととして切り捨てられた。

筆者は、建築や都市計画に計量的方法を利用すること自体には、少しも反対しない。それによって得られる成果は大きい。しかし、計量できるもの、あるいは計量できることのみが、建築や都市計画の対象や方法であると考えるのは、大きな誤りである。

近代住宅史の後半は、このような理性主義・計量主義によって支配されてきた。それは、建築と都市計画の分野だけではなく、近代文明そのものの原理であったとも言えるであろう。このような原理が、住宅と都市を支配すればするほど、そこにおけるコンタクトとコミュニケーションが消滅してゆくのは当然である。また、そこから排除された心や感覚は、結び付くべき確かな対象を失って、糸の切れた凧のようにさまよい始める。この現象は、住宅に住む人にも、それをつくる人にも生じた。

以上のような近代住宅史についての筆者の考えは、特に目新しいものではない。建築と都市計画の分野以外でも、これに似た考えが現れ始めている。

肝心なことは、それにどう対処するかである。現在のような状況は、癒すことができるのか。できるとすれば、どんな具体的方法があるのか。

そのための方法として、筆者は、建築と都市に対して、「建築医」の立場をとることを提案したい。それは、医者が人体に対するように、住宅その他の

建築や都市に対処する立場である。医者といっても、専門医ではなくて、開業医（ジェネラル・プラクティシヨナー）の立場である。

「建築医」という言葉が日本で初めて使われたのは、文化財建築の修復を手がける建築家が集まって、建築修復学会（代表…宮澤智士氏）を結成し、機関誌『建築医』を、一九九三年一月に刊行されたのが最初だと思う。

この場合の「建築医」は、古建築の修復や再生に従う建築家を意味し、樹木医の先例にならったものらしい。筆者は「建築医」の意味をもう少し拡張して、建築の分野に関わる専門家全体に当てはまる立場として考えたい。そう考える理由の要点は、次のようである。

第一に、住宅と都市は、長い時間をかけてつくり上げられた非常に複雑な仕組みをもっている。住宅は世界のどこでも通用する「住むための機械」ではない。そこに住む人は、民族や地域に古くから伝わった固有の身体技法（座法や挨拶の仕方等）・居住習慣・シンボルを現在も保持している。

二番目に、住宅と都市は、このような複雑な仕組みのなかに、ある秩序をつくり上げ、またそれを長い時間をかけて発展させてゆける能力を内在させている。この能力は、文明から取り残されたような民族にさえ見いだせる。

三番目に、このような住宅や都市に対して、外部から部分的な干渉を加えることは、予期しないいろいろな随伴効果を伴う。常に全体を考えてかかる必要がある。この点が人体によく似ている。最近の学説では、杉花粉症は回

虫等の寄生虫を完全駆除したために生じたアレルギー症とされている。

では、「建築医」の立場をとるとして、具体的にはどのような実践をしたらよいだろうか。私は、建築家は現在のような縦割りの知識や技術の追求を主眼とせず、ジェネラル・プラクティシヨナーのような、広い知識と技術を持つことに努力すべきだと思う。もちろん、個人が持ちうる知識と技術には限度があるから、足りないものを互いに補う努力が必要である。

最後に、さらに具体的な提案として、次のようなことを考える。それは、これからの住宅をつくるのに必要な、すべての知識・技術・経験を、誰もがすぐに参照できるわかりやすい内容でまとめることである。そのためには、権威者を中心にしてつくった「何々学大系」や「事典」のようなものは、役に立たない。イエローページ（電話帳に似た網羅的形式）がよいであろう。

それは、「住まいづくりにかかわるジェネラル・プラクティシヨナーのための知のネットワーク」の性格を持つべきである。それには、どのような内容が含まれるだろうか。筆者は、大学等で教えられていることの他に、例えば基礎的なものとして、住まいと人体の関係についての知識、一方では、マンションの区分所有に関する法律上の知識も必要だと思う。

まず、このような「知のネットワーク」の内容を互いに論ずることから、今後のあるべき住宅の具体像が浮かび上がってくるのではなからうか。

（おおかわ・なおみ／千葉大学〈工学部建築学科〉名誉教授）

特集●戦後住宅史を読み直す―その関を探る

## 戦後住宅は歴史たりうるか

―戦後住宅における三つの波とそれぞれの関まへ

中谷 礼仁

## 歴史における「生々しさ」の所在

古典音楽と、今生まれつつある音楽との間に決定的な違いがあるとしたら、それは両者の記録方法の圧倒的なギャップに求められるのではないかと思う。現場で発された音をそのまま記録化することのできなかつた時代の音楽の共有方法と、現場の音をそのまま摺まえることのできる録音技術を前提にした現在の音楽の共有方法とは、そこに発生する価値が全く異なってくるからである。

たとえば古典音楽はスコア（譜面）に変換されることによってしか記録できず、作者はその過程に還元され、むしろ再現者である演奏者、指揮者の行為が評価の基準となっている。それに対して今生まれつつある音楽では楽曲は特定の歌い手、演奏者と切り離して考えることはなかなかできない。別人による再現にそれほどの価値はなく、特定の時期、場所、人、方法が発した有名性の「生々しさ」こそがその評価を支える前提なのである。

この関係はちょうど、「スコア」にあたる住宅史一般と、未だ歴史とするには生々しすぎる戦後住宅の展開を語ることとのギャップに当てはまるような気がする。つまり歴史は、よくも悪くも、「生」の音をスコア上の音符に変換した時に、初めてその価値が発生するような作業といつてよい。すると同時に、その対象が抱える状況的な「生々しさ」はその変換のプロセスを経ることによって、多くが失われてしまうことになるだろう。しかし歴史は単なる事後処理、「生々しさ」を葬る弔い人だけではない。その視座いかんによっては生き生きとしたスコアというのもまた描きうるからである。

これに関連して、最近の住宅史研究の成果を一つ挙げてみたい。

イギリス人建築史家のアンソニー・クワイニー氏による『ハウスの歴史・ホームの物語』<sup>＊</sup>は、イギリスの庶民住宅史を中世から近代まで通覧したものである。その特色は原著の題名「House and Home」に象徴されているが如く、社会的な器としての住宅（House）と、自らの拠点としての住まい

（Home）とをいかに統合しうるか、という問いかけを各時代を通じて一貫させている点である。その結果、古文書や古地図、あるいは統計記録という「スコア」を駆使した純粋に社会学的視点に立脚しながら、同時に実践的な生き生きとした住宅獲得史にもなっているのである。現在の住宅問題に直接つながりうる近代以降の状況については、資本体制下の投機的な住宅産業に代表される自由放任主義と、その行き過ぎに対立するものとして現われてくる田園計画に代表される調節者としての行政庁、建築計画家の試みが相前後して語られる仕組みになっている。

しかし本書がなお興味深いのは、その両者のどちらにも片寄ることなく、そこに住まおうとする人びとがいかにすればホーム（自らの住み拠であると思えること）を持つことができるのかという点を、独自に見極めようとした点にある。

スラムクリアランスに住民自身の力で対処しようとした最近のコーポラティブハウスの実例が挙げられ、熱心にその意義が語られる。なぜなら著者にしてみれば、このような行為こそが商品化された住宅生産という現実的前提と、それを調節してゆこうとする計画者の理想とが相互に参照された積極的な行為だからである。つまり新しさを無闇に求めているわけでもなく、ありきたりに住みよい住宅を手に入れたいと願うことは、態度としては保守的なことでもある。しかしその実現の過程に向かって当事者たちが、現代のシステムに突き当たる時、その行為自身は十分に積極的なものになっているといふのである。

著者は建築家によるモダン・デザインをあくまでも一様式としてしか見ていなかったり、また労働者階級のセンスは一昔前の上流階級のセコンドハンド（中古品）に過ぎないなどと、かなり辛辣な持論も展開しているが、そう言い切れてしまう理由は、このような議論は住まいを獲得しようとする地平においては、それほど本質的なことではないと考えているからであろう。現状肯定的な資本主義下の自由を謳歌するわけでもなく、また常に変革、調整することを強いられるようなアカデミー至上主義に陥ることもない。ここで

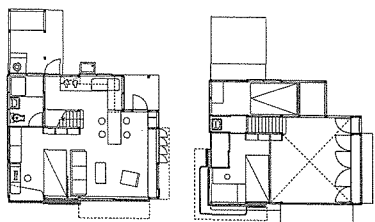


描かれているのは、それら双方ともを社会的前提として受け入れながら、最終的にはこの図式をするりとかわして自らの根拠地を獲得してしまうようなしたたかな住み手たちとその住宅像なのである。

## 戦後住宅史を語るための課題

このような住宅史の成熟したスコアを参考にして日本の戦後住宅史を見てゆこうとすると、とたんに困難に陥る。狭義な意味における「戦後住宅史」とは、戦後モダニズムにおける建築作家、計画家たちが住宅に託した「血と汗と涙の」奮闘絵巻のことだからである。これらは当然のように戦後住宅の本来の歴史化の作業過程においては冷静にその意味を再検討されることになる。すると実は日本における戦後住宅をめぐるこれまでの史的言説は、最終的には専門領域のための状況論に回収されざるを得なかったような気がする。

筆者自身も含め、まず何よりも建築専門家、特に史家と称される人びとにとって、市井の住宅産業の総体を実感として捉える機会ほとんどないといつてよい。一方で、よりアクチュアルに現場の住宅産業と向き合っている分野の人びとにとっては、問題の本質はあくまでも現前している課題のみに集



池邊陽「立体最小限住居」1950年  
新建築9512臨時増刊「現代建築の軌跡」より転載 写真／平山忠治

中し、それを史的スパンにおいて捉え直してみようというところまではなかなか近づけないのが実情であろう。町場の工務店までを含めた営利を前提とした住宅産業総体、啓蒙的立場の専門計画家、実際の住み手という組み

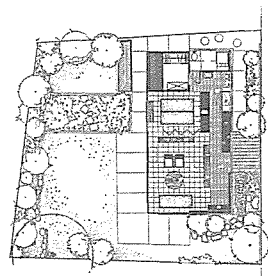
合せを、住宅を考える際の三位一体と考えてみる。すると専門計画分野の研究はその職業が蓄積されているとはいえず、その他の二つがそれに対抗しうるだけの政治力を持つていられるかどうか、はなはだ疑わしい。このようなアカデミーのみが突出した状況は、日本近代における「建築」の移植過程そのものに関わる根本的な問題になってくるであろうからその考察はここでの論点を大きく外れてしまうが、例えば「現代における民家」史（アノニマスな住宅史）といった枠組みが、その必要性が叫ばれ、かつ大河直躬氏らの研究によつてその萌芽は生まれているにせよ、未だに体系化が困難であるのもこれに関連していると思われる。続々と生産され続ける建て売り住宅もが現代の「民家」として語られるには、より広い社会的視点を含めた精緻なスコアづくり、ならびにアカデミー至上主義そのものの風化も含めてまだ多くの時間と検証とを必要としている。

このような問題点は、狭義の「戦後住宅史」を語る際においても大きなウイーク・ポイントになっている。なぜなら、相互的な参照物の乏しいスコアのみが存在する限り、従来の「戦後住宅史」の正当性をなかなか推し量ることができないからである。

## 戦後住宅史の闕をさぐる

しかしなお私たちは、これまでの「戦後住宅史」が名スコアの一フレーズであったことを熱望している。この乏しい史的状況を前にして、それはいったいどのような構えによつて獲得可能なのだろうか。

それはこれまでの狭義の「戦後住宅史」の中において、なおかつその枠組みを超えようとするような事例の持つ意味を再検討することであろうと思われる。住宅は生活のされ方を通して社会性をストレートに反映する鏡でもありながら、同時にまだ見ぬユートピアを映し出す個別的な鏡でもある。このような両義的な性格を持つ住宅のリアリティは、ただの現実の混沌のみによつても、あるいはプロフェッショナルの理想のみによつても、決して獲得す



広瀬録二「SH-1(広瀬自邸)」1953年  
出典：同右 写真／平山忠治

ることができない。両者を社会的前提としながら、なおかつその対立項の一コマには収まりきれない構想力の強さにかかっているのである。

このような視点から戦後の建築家を中心とした住宅における試み性をもち、私たちが前に現われるのではないだろうか。今、この態度を戦後住宅史の闘(しきみ)結界をさぐることに、と称しておきたい。

## 池辺陽のKITCHENLESS KITCHEN(キッチンでないキッチン)

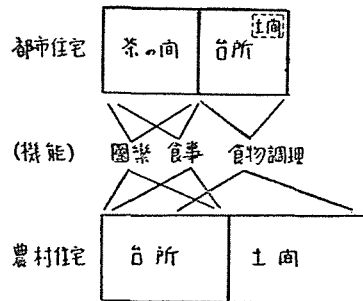
このような視点において、最初に思い浮かぶのは戦後住宅の初期の頂点と言われる立体最小限住居(一九五〇年)を提案した建築家・池辺陽によるキッチンユニットの試案、KITCHENLESS KITCHEN(キッチンでないキッチン)(一九五一年)<sup>2)</sup>のことである。

終戦後まもなく全国で不足していた住宅は四二〇万戸に及ぶといわれている。そのうえ住宅資材や建設資金の圧倒的な欠乏等の状況をふまえ、政府によって臨時建築等制限規則が施行された。一九四七年時点では一二坪以上の住宅が、同四八年の緩和策では一五坪以上の住宅の建設が禁止されたのである。また一九五〇年の制限解除後においても、新設された住宅金融公庫での融資対象面積は九〜一八坪に限られていた。小住宅設計は、戦争直後における住宅不足という課題を背景に、かつそれによって形成された住宅制限法をその枠組みとして、建築家の間で大変もてはやされたテーマだったのである。

このような視点から戦後の建築家を中心とした住宅における試み

以上のような社会的問題に真正面から取り組んだことにおいて、そこに戦前と戦後の建築家の態度の相違、「民主的ヒューマニスト」として戦後の建築家を捉えようとする見方が当時から存在していた。たとえば住宅を対象とした当時の指導的書物であった西山卯三による『これからのすまい』(一九四八年、相模書房)や浜口ミホによる『日本住宅の封建性』(一九五〇年、同右)においては、簡単に言えばこれまでの日本の住宅における歴史的残滓(玄関や床の間、ならびにそれが誘発するふるまい)を否定し、新しい社会に直結しうるような新しい住宅のあり方(公園制度、工業化、イス座、家事労働の軽減、居間中心主義等による生活様式の改善……)が提案されている。しかしこのような社会的問題に対処しようとする建築家の姿勢自体は何も戦後のみに限ったことではない。大正期におけるスラム・クリアランスへの言及を発端として、昭和初期の同潤会(一九二四年設立)、戦中期における住宅営団(一九四一年設立)など、むしろ国家経営を担う計画者のプロフェッションとして以前より当然のように自覚されてきたのである。たとえば住宅営団の設立に関わった佐野利器が大正九年に設立した住宅改善同盟会に、先のような新しい住宅像の骨子がすでに明瞭に獲得されていたこと、と同時に、彼自身が戦後の「ヒューマニスト」というよりは、戦前の国家翼賛体制と思想的にも実践的にも深く連動していたことは見過ごされやすいが事実である<sup>3)</sup>。つまりこのような、住宅を社会の一細胞として矛盾無く直結させようという前提を疑わない限りにおいては、戦前の「国家」は戦後の「民衆」にたやすく交換しうるものなのである。むしろ啓蒙的計画者としての建築家自身に対する省察は省かれていたように思える。

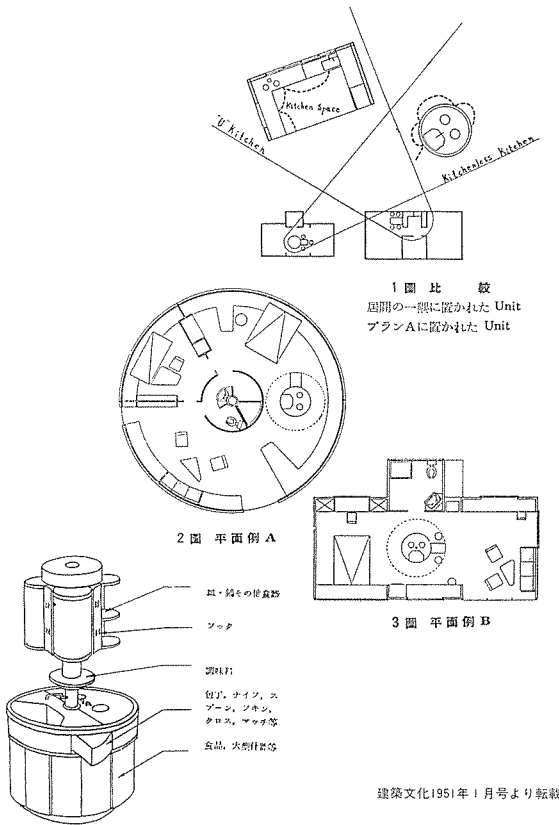
さてこのような背景を考慮しつつ彼のキッチン案を再見するとき、その追及の態度は当時においてかなり異質なものであったことが判明する。このキ



浜口ミホ著『日本住宅の封建性』より

キッチンでないキッチンは、筒状のモービル・ユニットのような形をしていて（配管の関係上実際は据置型ではあるが）、回転する戸棚やシンクやレンジやファンが一体となって設計されている。表面は余分な凸凹をなくし円滑に処理したフラッシュ・サーフェイスであり、実現を問わないほとんどSFめいた代物なのである。その名の通り浜口ミホ流の台所計画に対する気の利いたあてつけでもあるし、気鋭建築家のお遊びといえはそれでおしまいのだが、池邊におけるこのようなSF志向は、彼の晩年の宇宙関連施設への接近の予兆のようなのである。つまりこの試案は当時の住宅の主要テーマであった最小限化を推し進めながら、それがついにSFめいた別種の構想に転化されつつあったことがわかるのである。

このような彼の構想力の幅は、著名な立体最小限住居における空間処理の巧みさの源とも考えられる。つまり彼が最小限住居の中に、それを要求している社会的枠組みだけからは決して導きだされない立体性・空間性を導入したからこそ、この住宅は当時の単なる小住宅の中においてひととき光彩を放



池邊陽・嶺岸泰夫「キッチンレスキッチン」1951年  
台所スペースをもたず、居間でも寝室でもどこにでも置ける。

つ存在になりえたのである。このような意味において「立体」とは当時の社会的背景がそのまま住宅の姿に直結してしまっただような小住宅のあり方に対する批判的意味を担っていたといってもよいだろう。

この例から推測しうる戦後住宅の構想力の強度とは、社会的器としての住宅（資本体制下の住宅産業とそれを調節、管理しようとする住宅政策双方によつて導かれる住宅のあり方）を前提としながら同時にそこにはないものを獲得してしまおうとするような、つまり「キッチンでないキッチン」のように「住宅でない住宅」を実現しようとするような意識において成り立っていたのではないかと思う\*。ただし過去の住様式をいったん否定してしまっただ戦後住宅の前提においては、建築家・清家清の一連の作品に代表されるような伝統的住様式の新解釈もが、実は「住宅でない住宅」のテーマに入りうるという逆説も生まれているのだが。

それでは最小限住居から始まる戦後住宅の「ここにない」テーマは以降どのように展開していったのだろうか。

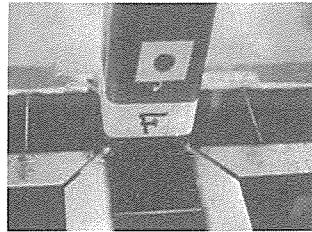
## 戦後住宅における二つの波とそれぞれの闘

戦後経済が復調するにつれ、小住宅設計に対する設計者の興味は次第に薄れていったといわれる。大規模な復興期を迎え、建築制限令も撤廃、小住宅を設計することの社会的枠組みが喪失してしまっただからである\*。つまり住宅が社会を映す鏡として説得力を持ち得るのは、住宅問題が全社会的テーマになりうることに同時にまた、経済状況の停滞や破綻によつて誘発される建設産業の低迷、ならびに以前の経済成長に準じた建築方法論の破綻等もが深く影響しているものと考えられる。以上のような連続した経済成長の過程を一区切りとして戦後住宅の変遷を考えると、これまでに大きく三つの波があったように感じられる。

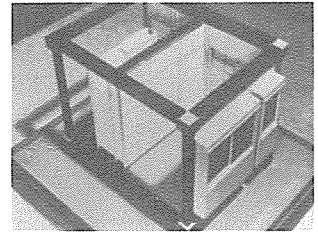
一つめは戦争直後から一九六〇年代までを通じた、戦後復興から高度経済成長までの連続したりニアな成長の過程である。

ここで住宅に期待された社会的テーマは、端的にいえば当時の経済成長に合致した建築生産の近代化に強く関係している。その発端となったのが、工業化、合理化、量産化等をめざした五〇年代の小規模量産化住宅であり、またその闕を探りうるような成果が前述の池邊や広瀬謙二に代表される少数の作家たちによって個別に達成された時期であったといえよう。また後半の六〇年代における主要なテーマは五〇年代に継続しかつ当時の経済的成長に特に合致する住宅の工業化（システム化、標準化）が突出して促された時代でもあった。

では六〇年代における「闕をさぐる」行為はどのようなかたちで現われたのだろうか。建築を都市の一細胞単位としてとらえたメタポリズム、あるいは高層集合住宅やプレファブ住宅の実現を代表として、高度経済成長とそれがもたらす進歩的技術史観に支えられた一九六〇年代の建築・住宅運動の成果はそれなりに華々しいものがあつた。それらのメガロマニアックな住宅像は、加速度的に社会と住宅とを直結しようとした点において、時代的かつ特異な表現にはなり得たであろう。しかし住宅に私たちが今見いだしたいのは、建築家、計画者にとつてのさまざまな外在的側面を含んだより精緻な「スコア」なのである。このような意味で六〇年代において特にとりあげたいのは東京大学・内田祥哉研究室によるGUP（a Group of University's Prefabrication system）シリーズ周辺である。これは当時の前提的テーマである住宅の工業化からさらに一歩進んでオープンなシステム化を標榜した流れであつた。例えばシリーズ中GUP6においては、構法とセットになった部分を「商品化」し、市場に解放すること（IIオープン化）で、住宅生産総体のシステム転換を誘導しようという試



東京大学内田祥哉研究室「GUP6」鉄骨の柱梁構造による住宅構法のオープン・システム化を目指したもの。



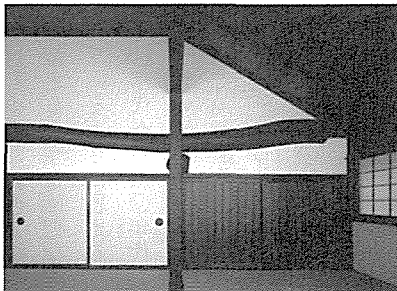
「建築の生産とシステム」（住まいの図書館出版局刊）より転載

みが企てられた。つまりこれは「工業化でない工業化」のようなもので、その試みは地道でまた研究の枠内からはみだすこともなかったにせよ、その極点には「住宅が素人にもつくれるようになるかもしれない」といったラディカリズムが確かに存在していたのである。

二つめは一九七〇年代初頭から八〇年代末までの、オイルショック、バブル経済の崩壊という二つの経済的破綻における端境期である。

住宅政策が一応の充足期を迎えた七〇年代初頭に発生したいわゆるオイルショックは、これまでの直線的な経済成長路線の矛盾を顕在化させるとともに、その過程に伴走してきた近代建築のイデオムにも根本的な再検討を促すことになったことは周知の事実であろう。このような条件の中で住宅は、新しい建築のあり方を試みる次世代の最初のゆりかごととして登場することになったのである。

では七〇年代的な住宅のイメージとは何によって代表されるのだろうか。都市住宅派に代表される白い箱、脱コンテクスト、脱領属化といったフォルマリズムの系譜、その一方ではセルフ・ビルド、地域主義、様式主義といったコンテクスチュアルな系譜そして戦後住宅の一つの結実とも言えるであろう低層集合住宅の着実な実践……。どうにも統一した像が結ばない当時の領域の拡散と手法の多様化の状況をあえてまとめるとするならば、それらが共通にめざしたのは、すなわち近代という物語の「闕（境界）」に立ち続けること、に他ならなかったように思われる。その後のポスト・モダン



降幡廣信による「民家の再生」写真/秋山実  
伝統木構法見直しと共に、民家再生も70年代以降に活発になった。



東孝光「塔の家」1967年  
意地でも都市に住み付こうという試みは数多い。

における多様な記号的建築言語を支えたのも、これら当時の試みの集積の成果と見てよい。また六〇年代から始まったデザイン・サーベイ/フィールド・ワークを発端として、まちづくり、保存運動、地場産業の見直し等の外在的な領域がクローズアップされ始めたのも七〇年代以降である。このような流れはその後地方と結びつくことで「産業」としても実践を重ね、住宅分野においては、たとえば伝統的木造住宅文化周辺の見直し作業として結実し、現在に至っている。つまり七〇年代における多様な方法論を土台として、それらの一般化の過程として捉えられるのが「ポスト・モダン」以降の八〇年代である。

そしてこの図式からいけば、アフター・バブル、アフター・ポストモダンとしての九〇年代以降が、その次の第三の波ということになるだろう。進行中の第三の波を除く約二〇年間ごとのそれぞれの波は、前半において獲得されたその方法論を出発点として、後半はその応用展開、あるいは通俗化の過程とまとめることができるかもしれない。また量産化といい、工業化といい、あるいは後の記号化といい、戦後の全過程を通じ、時代が下るにしたがって住宅をめぐる広い意味での商品化の波は、ますますその領域を拡大しつつあることがわかる。実は、というか、やはり「商品化」に対する方法論の構築こそが、戦後住宅に求められた第一の前提だったのではないだろうか。

## 商品化という関

商品化は、住宅のみならず建築にとつての最大の鬼門である。なぜならその直接的な介入は、政策的後盾うしろ盾もない建築家・計画者のちっぽけなユートピアなどストレートに突き崩しうるリアリティを持っているからである。しかし今となっては、この流れに代わりうるだけの壮大なビジョンもないし、その安易な否定は建築専従者の「啓蒙」的立場をさらに固定化するだけであろう。むしろ狭義の「戦後住宅」にとつて商品化というテーマは常に外在的な領域であったが故に、関をさぐるための一方の対象として積極的な意味をは

らむ領域なのではないか。「全世界の商品化」に対抗しうるだけの方法論を自らに持ちながら、なおかつその単純な対立を乗り越えるような強靱な構想力、つまり「商品化でない商品化住宅」が今求められているように思える。

これに関連して以前、建築家・伊東豊雄氏が七〇年代から八〇年代の境目に、実際に一般向け雑誌上でも宣伝した経緯を持つという「ドミノ」という商品化住宅プロジェクトを行なっていたこと、そして「商品化住宅研究会」なるゼミを所内で催していたことを聞いて、その真意を伺ってみたことがある。仕事がなかった以外の何物でもない産物、そのうえ実際に竣工した作品は一件のみ、と謙遜しながらも、自分にとつてつくる契機は同時代の社会的現象そのものと言いつける氏の姿勢には相応のしたたかさが感じられたのだ<sup>＊7</sup>。

このしたたかさには、クワイニー氏が力説していた、あの住み手たちとその住宅像に共通するものがあるようだ、とその時私には思えたのである。

(なかに・のりひと／早稲田大学理工学部建築学科助手、近世的日本近代建築史専攻)

### 〈註〉

- 1 アンソニー・クワイニー『ハウスの歴史・ホームの歴史』上下巻分冊、花里俊廣訳、一九九五年、住まいの図書館出版局。
- 2 「建築文化」一九五一年一月号、34〜35頁、みねぎしやすおと連名で掲載。
- 3 中谷礼仁『国学・明治・建築家』111〜120頁、一九九三年、蘭亭社。
- 4 このような態度は、多かれ少なかれ、あらゆる建築構想の局面に必ずかかわってくるものであるといえる。しかし住宅以外に仕事がないような当時の状況がそれを加速させたかのように、このような態度が極端に意識化されたことが、戦後住宅の第一の特徴なのではないだろうか。
- 5 八田利也「小住宅設計はんざい」（『建築文化』一九五八年四月号に掲載）は、一九五〇年代の終焉にあつて、当時の小住宅が担ってきた積極の意味を総括しながら、同時にその主題の不在が現われてきたことを指摘した的確な論文である。
- 6 下記の本を参照。内田祥哉『建築生産のオープンシステム』一九七七年、彰国社。
- 7 なお、伊東氏のドミノ・プロジェクトと商品化住宅研究会については、「at」一九九六年七月号「クッティケル七〇年代」（連載・ウラガエル七〇年代シンポジウム第五回）を参照のこと。



# 戦後低層集合住宅計画の歩みと課題

——地域性を核に、量から質へ

## 藤本 昌也

### ■はじめに

今回のテーマ〈低層集合住宅〉は都市集住の計画や設計を手掛ける私自身の歴史にとっても、出発点ともいえる重要な位置を占めている。したがって、本稿では、わが国の集合住宅の系譜の中で、低層集合住宅時代とも位置づけられる昭和五〇年代という時代の状況を、当時のわれわれがどう認識し、どう受けとめていたか、そして、そこから集合住宅の計画や設計課題をどう捉え直し、その課題解決のためにどのような設計手法を提案し、実現し得たのかを、問題の火中にいた建築家の一人として、まず体験的に跡づけてみたい。加えて、そこで提起された論点が二〇年を経た現在、われわれにとつてどういう意味をもっているかについても言及してみたい。

### ■昭和五〇年代の状況——量から質への転換

私が集合住宅の問題に本格的に取り組み始めたのは、ちょうど昭和四八年、いわゆるオイルショックの年であった。わが国の経済が高度成長から安定成長へと一八〇度の転換をせ



現代計画研究所 茨城県営水戸会神原団地  
写真/鈴木悠

ざるを得なくなった年であり、それを境に国の住宅政策課題も大きな転換を迫られていくことになる。

戦後、わが国の住宅政策は終戦直後の極限状況の中から構想され、しかも、その後続く都市化の波をまともに受け止めるかたちで進められてきた。当然、その政策課題は一貫して大量供給を至上命題とせざるを得ず、必然的に施策住宅の方向は全国一律・画一化の途を進まざるを得なかった。

しかし、先の経済の大転換は、大都市への人口集中を鈍化させながら、長期的経済不況による住宅市場全体の冷え込み状況を生み出すことになる。

一方、これまでほとんど無限に住宅需要圧があるかのように振る舞ってきた公共賃貸、分譲の両部門も、第一次ベビーブームの世代が住宅市場の中で賃貸から分譲へと走り抜けるに及んで、一定の飽和水準に達してしまふ。

この住宅市況を受けて、わが国の住宅供給は、地域別、階層別に薄く散在する小市場を的確に把握しつつ、魅力的な選択的供給を図らない限り、いわゆる「遠、高、狭」の問題として、建てても入らない、売れないという実態が大都市でも一般的となる。ことに地方都市では人口の高齢化に伴って、

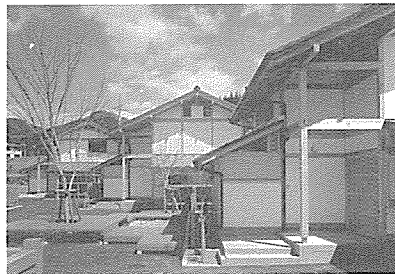
いつそう賃貸市場が狭まり、公共住宅のシェアすらも落とさざるを得なくなる。

住宅をめぐるこのような時代の変化を一言で言えば、それは一世帯一住宅を背景とした「量から質」への転換ということになる。そして、五〇年代の集合住宅計画、設計の歩みは、この「質」をどのように捉え、どう実現していくかの検討、模索の第一段階とみることができる。

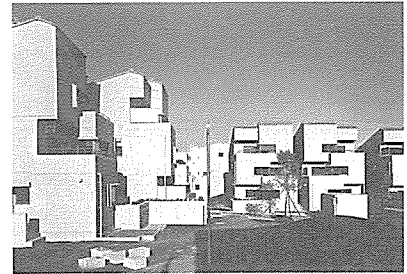
例えば、画一的な標準設計から多様な型別供給へ、無味乾燥な南面平行配置から変化に富む屋外空間づくりへ、あるいはアンヒューマンスケールの高層住宅からヒューマンスケールの低層住宅へといった転換、そして何よりもオールジャパンの発想から地域に根ざした個性豊かな住まいづくりの発想といった、問題意識での大きな転換が見られ、こうした質的転換を積極的に押し進める中で、五〇年代のわが国の集合住宅は公共、民間を問わず、見るべき多くの成果を挙げたのである。

五〇年代のこうした成果の総体を、空間イメージとして表わすキーワードとせば、やはり「低層集合」ということになる。しかし、ここで考えなければならないのは、むしろ、結果としての成果である「低層集合」ではなく、成果を生み出す原動力ともなった集合住宅設計の「基本テーマ」を当時のわれわれがどう捉え直し、どう発想の転換を図ろうとしていたかであろう。

当時の実践を通しての議論を振り返る時、われわれを絶えず突き動かしていた都市集住の基本テーマは間違いなく「地域性」であった。



現代計画研究所 足助町宮桑田和住宅  
写真/岩巻



現代計画研究所 茨城県宮水戸六番池団地  
写真/鈴木悠

## ■地域性——近代主義的発想の対極として

昭和五〇年当時、私は都市・建築行政の立場にある蓑原敬、建築評論家・小能林宏城(故)、彫刻家・関根伸夫らと共に「日本人会」という会をつくり、「新しい曲がり角を迎えている日本の住宅とか建築、都市のあり方をどう考えるべきか」といった議論を繰り返し行なっていた。日本の経済が安定成長期に入り、ある種の豊かさがでてきた中で、「今まで西欧型の近代主義的理念で物をつくってきたことに対するアンチテーゼとして、日本型の住まいづくり、街づくりの理念というものがあるのではないか」ということが議論の出発点であった。要するに「標準設計とか平行配置とかいった集合住宅の設計手法は、それまで進めてきた一種の西欧型の、あるいは発展途上国型の近代主義的発想である。その発想にわれわれのものづくり方が拘束されてきた。それからいかにして脱却するか」という思想的レベルでの理論武装をどうすればよいか最大の関心事であった。この「日本人会」での議論を通して、私は西欧型近代化路線に対抗していくための唯一の突破口として、「地域」を対置する以外にはないと結論づけたのである。

住宅や街が依って立つ「地域」が具有する固有の自然的、歴史的、社会的特性との緊密な応答の中から、一般解ではない、特殊解としてのより自由で多様な集住空間のありようを発見することこそ、われわれの計画・設計理念であるべきだと主張したのである(「大地性の復権」。幸いにもわれわれの主張は思いのほか早く、当時の社会に受け入れられることになる。

当時、茨城県の住宅課長に就任した蓑原敬は、市町村の首

長から「茨城という風土の中で、ああいう鳥小屋みたいなヨーカー型のコンクリート住宅はもうたくさんだ」という指摘を度々受けることになる。昭和五〇年代の低層集合住宅のトップバッターともいわれる茨城県営団地六番池シリーズも、まさにこうした地域社会の風圧を背にしたからこそ誕生したと言える。

茨城に見られるこうした「地域性」へのこだわりは、同時期、横浜市の田村明や香川県の山本忠司らが提唱していた新地域主義の主張にも相通するものがあり、安定成長型の都市づくりへの転期を迎えていた当時の地方都市の気分を代表していた。必然的に、この茨城県の動きは、その後いち早く、秋田、石川、群馬、佐賀などの各県に伝播し、「地域性」は五〇年代の地方の公営住宅づくりにおいても、先導的テーマとなった。

このような地方都市の動きを、国としても積極的に支援する意図から、昭和五八年には通称H O P E計画と呼ばれる、地域に根ざした新しい住宅政策を打ち出した。この制度の狙いは、①地域の特性を踏まえた質の高い居住空間の整備、②地域の発意と創意による住まいづくりの実施、③地域住宅文化、地域住宅生産等にわたった住宅政策の展開、と要約できるように、その特徴は住宅づくりを単にハードの問題として捉えるだけでなく、地域の文化育成、地域産業の振興といったソフトの問題も含めて、総合的視点から住宅づくりを目指していることである。ことに、歴史的街並みの保全や木造住宅づくりを目指した、小さな市町村でのH O P E計画の試みは注目に値する。

例えば、われわれも計画に関わった愛知県足助町や岩手県遠野市では、「木」の良さを見据えた伝統的木造技術の再評



住宅・都市整備公団 タウンハウス諏訪  
写真/宮本隆司



現代都市建築設計事務所 ライブタウン浜田山  
写真/宮本隆司

価、地域に根ざした木造住宅生産システムや住宅供給システムの再構築、さらには地域固有の街並み形成等の試みが実践され、その成果は六〇年代に入り、住宅供給を目的としたへほるくすやへりんやむ遠野と呼ばれる第三セクターの設立として結実したのである。

平成の時代に入った今日、わが国の住宅問題の特徴を改めて見直すと、地域ごとにその問題の本質がますます異なっていることに気づく。ことに、高齢化の問題などその地域の社会的特性に着目した住宅づくりの重要性は、成熟化社会に向けて、今後ますます高まっていくと見なければなるまい。H O P E計画制度はこうした事態をいち早く先取りしていた制度ともいえ、今こそこうした制度の精神を活かした新たな展開を図るべきであろう。そのためにも、地域ごとにより自由に独自の取り組みができる制度と体制の整備を図ること、一方、それに対応した集住空間づくりの作法を確立することが必要なのであり、この二点こそ、「地域性」をめぐる今日の課題なのである。

ところで、こうした「地域性」をめぐる現時点での議論をふり返る時、私としては更に、指摘してきたことがある。それは、近代化の議論を別の引き出しにしまつてしまう「地域」の議論は意味がないということである。日本のいずれの地域にしろ近代的枠組みから逃れることは不可能であり、問われているのはその枠組みの中の近代化のもたらす「負」の解消である。その解消の手だてとして「地域」を対置し、両者の平衡関係をつくり出すことにこそ本質的な解決があることはすでに述べた。近代化の枠組みの中から浮かび上がる「一般解」と地域の枠組みの中から浮かび上がる「特殊解」の交錯するところに集住のありようを発見する以外にないという

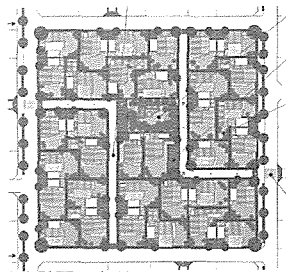
ことである。地域に安易に寄りかかった、内向きの閉じた地域主義を避け、「近代」をからめとるふところの大きな「開かれた地域主義」の立場に立つことが、これからの集住計画・設計作法を考えるうえでの大前提だと私は考えている。

### ■集合の戸建て化——集合住居から住居集合へ

基本テーマ「地域性」を根拠に、五〇年代の集合住宅はどのような新しい設計手法を開示し得たのであろうか。

戸建住宅が圧倒的多数を占める地方都市において、集合住宅設計が先ず取り組まなければならなかった問題は、集住を図りながらも戸建住宅に近い空間の「質」を実現すること、言い換えれば、「集合の戸建て化」を図ることであった。われわれは「接地性」「多様性」「識別性」の三点を、その具体的設計目標に掲げ、画一的なマッチ箱スタイルから変化に富んだ多様な住棟形態、フラットな屋根から周辺の街並みと調和する瓦の勾配屋根、バルコニーから開放的なセットバックテラスなど、戸建て化へ向けてのさまざまな設計手法を開発、準接地形低層集合住宅と呼ばれる新しい集住形式、先の六番池シリーズ（一九七六―八一）を誕生させたのである。

一方、こうした集合の戸建て化は、なにも地方都市ばかりの要請ではなかった。大都市の市街地や郊外地域においても、各々の「地域」固有の問題の解決のために同じように求められることになる。前者においては、昭和四〇年代のたれ流し的な高層マンション乱立に対する市民の強い拒否反応に因應するために、後者においては、無節操な自然山林破壊への社会的批判や、緑豊かな居住環境に対する市民の根強い期待に因應するために、「集合の戸建て化」に向けてのさまざまな手法開



現代計画研究所  
滝呂居住環境ブロック計画



現代計画研究所 ウッディタウン  
写真/現代計画研究所



宮脇植建築研究室 高須ニュータウン  
写真/宮脇植建築研究室

発が押し進められ、結果として優れた低層集合住宅の事例が、地域を問わず少なからず登場することになる。例えば、市街地型の低層高密度住宅として、坂倉建築研究所のピラシリーズ（一九八一）や現代都市建築設計事務所のライプタウン浜田山（一九七七）、早川邦彦のアトリウム（一九八五）など、また、郊外型低層集合住宅としては、住宅・都市整備公団による多摩ニュータウンのタウンハウス諏訪（一九七八）や、神戸市住宅供給公社の名谷二八団地（一九八一）などが注目したい事例である。

五〇年代においてこのように、「低層集合」が時代のキーワードとしてリアリティを持ち得たひとつの理由は、当時の地域固有の問題を背景とした「集合の戸建て化」への強い社会的要請に、「低層集合」が最も効果的に応えうる集住空間形式であったということであろう。

### ■共同空間の領域化——住まいづくりから街づくりへ

昭和三〇年代から四〇年代にかけて、圧倒的に支配しつつあった、標準住棟、南面平行配置の設計手法が、どれほどわが国の集合住宅の質を貧しくしていたことか。この団地的手法の強固な呪縛からいかに脱出するか、そして、それに代わる新しい設計手法をどう提示するのか。当時、取り組まなければならなかったもうひとつの重い課題であった。

地域コミュニティづくりの大切さを論拠に、集住空間における「共同空間の領域化」を図ることがわれわれのとった設計戦略であった。先の茨城県宮六番池シリーズの会神原団地や、多摩ニュータウンの諏訪団地などの低層集合住宅は、高

層化の四〇年代が無視しつづけたきめ細かな共同空間づくりの重要性を、具体的に提起した先導的プロジェクトといつてよい。

会神原団地の特徴は、屋外共同空間を生活領域にに応じてきめ細かく分節化し、有機的なヒエラルキー構成に仕立て上げていることにある。

一方、諏訪団地は住宅・都市整備公団が「都市型低層住宅」と名づけ、五〇年代のエースとして登場させた新型集合住宅であった。この種の住宅形式は一般には「タウンハウス」と呼ばれ、当時すでに北米で開発されていた郊外型集住形式を導入したものであった。その特徴は、コモンスペースコミュニティづくりを狙いとした、いわゆる「ランドプランニング」手法にある。

共同空間が生き生きとした生活の場として機能するには、集住の生活行動領域に応じたきめ細かい共同空間の領域化、構造化が必要だと認識から、単に住戸、住棟といった建築空間のデザインのみならず、共同庭を中心としたコミュニティ生活空間総体のデザインに最大の留意を払う手法である。

「タウンハウス」の空間形式が、ミニ乱開発による当時の戸建住宅地環境の劣悪化傾向に、歯止めをかける有効な手法との判断から、住宅金融公庫は昭和五〇年、「モデル団地建築資金融資制度」を創設し、優良なタウンハウス建設を積極的に支援し始める。以後、この新しい低層住宅形式の全国的普及に一定の役割を果たすことになる。

低層集合住宅による地域コミュニティづくり、そして、共同空間の領域化へと進むわれわれの関心は、更に戸建住宅地環境のありようにも向けられた。車優先の格子状街路による画一的な背割宅地方式をひたすら踏襲するその環境は、日照、



横総合計画事務所 ヒルサイドテラス

プライバシー、街並み、いずれをとっても問題は少なくない。なによりも豊かなコミュニティ生活を支え、育む共同空間を全く欠いた宅地構成といわざるを得ない。こうした欠陥を少しでも克服しようとする新しい試みがようやく五〇年代の後半あたりから始まる。ちょうど戸建住宅とタウンハウスの中間ともいえる、当時「戸建集合」と呼ばれた共同空間内包型の新しい宅地構成手法が、宮脇檀による民間の高須ニュータウン（一九八二）やわれわれが手がけた住宅・都市整備公団の滝呂団地（一九八四）や兵庫ウッドイタウン（一九八六）などにおいて新たに開拓され、以後、わが国の戸建住宅地も集合の視点から徐々にではあるが見直され始めるのである。

ところで、地域コミュニティづくりの立場から、周辺環境とも調和する地域融合型の住宅地開発の重要性を主張したのも低層集合住宅であった。

四〇年代の団地開発を特徴づける高層高密度開発が、日照公害等で周辺環境の阻害要因となっていたことを考えれば、積極的に周辺環境にも目を向けた低層集合の設計作法の意義は少なくない。

建築の街路への積極的な働きかけによって、場所性を踏まえた街の新しい界隈をつくり出そうとした代官山の「ヒルサイドテラス」（一九六九）は集合住宅を街の風景と捉えた先駆的プロジェクトとなった。

このように、住まいづくりを街づくりとの関係で解くということは、つまるところ、「公、共、私」の合理的な空間配分とその構成手法のありようを解くことである。なかんずく、共同性の本質をどう捉え、「共同空間」をどう解くかが鍵となる。言ってみれば、その狙いは集住空間の総体を共同空間の領域化を通して、「公、共、私」の空間的一体化を図り、周辺



も含めて、「団地を「街」に仕立て上げることにあり、それは結果として、「団地」の解体を意味する。

しかし、団地的手法がなお、主流を占める当時では、その解体にも、自ずと限界があった。殊に、街路や街区構成にまで踏み込んだ公空間も含めた集住の総合的演出は、現在、ようやく手がつけられるようになったばかりである。

ヨーロッパの伝統的クローズドサイトプランニングの再評価を前提に、新しい沿道型集住空間の創出を実践している幕張ベイタウンプロジェクトは、その意味で時代の先鞭をつける、注目すべき試みといつてよい。

われわれもようやく「公、共、私」をめぐるより本質的な集住空間構成論を展開できる地点に立ち至ったのである。

## ■おわりに

冒頭で私は昭和五〇年代を、集合住宅の「質」の問題に取り組む第一段階と規定した。そして、バブル崩壊によるポスト五五年体制の時代といわれるまさに現時点を、その第二段階の入口と位置づけたい。第二段階で問われている課題は何か。集住空間づくりにおいて、生活者のニーズをよりの確に把握し、反映し得る、新たな「仕組み」と「設計手法」の開発こそ、最優先課題ではないかと私は考えている。

考えてみれば、「生活者」は、本来「地域性」の議論の中心に据えるべき問題のはずなのである。しかし、五〇年代当時は、「生活者」を「地域性」の議論の過程に地域の主役として巻き込むには、生活者もわれわれも有効な社会的な仕組み（制度）を持たなかったのである。

確かに、住宅は生活者の自立と協同を原則につくられるべ



幕張ベイタウン・パティオス

きだとする立場から、昭和五〇年代半ばを過ぎると、コーポラティブ方式による意欲的な試みがいくつか登場し始める。しかし、健全な地域コミュニティ形成に資するといったこの方式の社会的意義にもかかわらず、制度としての裏付けを欠いているために、未だに市民権を獲得できないでいる。わが国の集合住宅は、これまで一貫して、不特定多数の見えない生活者を相手に「供給の論理」のみが優先するかたちでつくられ続けてきたのである。

地域別にも、世代別にも、これほど生活者のニーズが多様化している今日の状況を考えるならば、生活者の個別的なニーズを直接的に反映できる新しい効果的な住宅供給の仕組み、いつてみれば先の「居住者参加型の住宅供給方式」を制度の裏付けとともに考える。そして、同時にこのソフトな仕組みに見合った集住の計画・設計手法をわれわれが用意する以外にないと考ええる。

この点について詳述する余裕はないが、結論的にいえば、その手法とは、躯体、住戸分離を原理とする集住空間システム——スケルトン・インフィル方式で、例えば、ハプラーキンの長年提唱しているオープンハウジングシステム、あるいはわが国の二段階供給方式やスケルトン賃貸方式が提起している集住空間システムと同種のものと考えてよい。

地域の「生活づくり」としてのコーポラティブ方式と、地域の「空間づくり」としてのスケルトン・インフィル方式が制度的にも整備され、両者が相互に組み合わされる時、はじめて、第二段階の集合住宅が求める「質」がわれわれのものになるものと私は考えている。

(ふじもと・まさや／現代計画研究所代表)

すまいのテクノロジー

# 住まいのつくり方を

# 人間中心の

# テクノロジーへ

戦後住宅が棄ててきたもの

増田 一眞



先の阪神・淡路大震災で無惨にも倒壊してしまった住宅。

## 1 テクノロジーとサイエンス

科学技術の発展、などと一口にいうけれど、科学と技術とはいったいどのような関係にあるのだろうか。

構造力学や材料力学などは構造体に関する科学理論の体系であるのに対して、構造躯体を構築するための諸手段の体系は構造技術と呼ばれている。科学は自然法則を追究して得た成果の集積であ

る。したがって科学を無視した技術は成立しえない。住宅は人間生活を容れる器であるから、衣服

に次ぐ第三の皮膚と呼ぶ人もいるくらいである。住宅をとりまく科学は、人間の生理学と心理学を含む生活関連諸科学を中心として、材料学、力学、形態学、経済学などの諸科学や室内気候を扱う計画原論などの他に、衣と食をめぐる栄養学、医学の系統とも密接につながる。あらゆる学問体系は建築に関連するといえるくらい、さまざまな理論

にとり囲まれているのが建築である。

一方、技術は何よりもまず、生産に関する概念である。生産に際して科学的法則を適用すること自体を技術の本質とする考え方もあるが、生産手段の主要構成部分としての労働手段を技術の実体ととらえないと、科学理論と技術の区別はつかなくなる。

技術の担い手である技術者は、現場技術者と設計技術者、管理技術者などに分かれるが、とりわけ設計技術は、一方で理論を意識し、他方で手段を想定して設計するものだから、手段も理論も両方とも技術である、という考えに陥りやすい。だが、生産関係における労働手段の所有関係をみると、技術問題の本質がまるで不明確になってしまっているのである。

技術を手段と規定すると、技術者の主体的能动性を技術発展の契機とする事実が否定される、というのが手段を否定する人たちの主な理由であるが、それは次元を異にする二つの問題の混同であり、技術者の情熱否定にはつながらない。

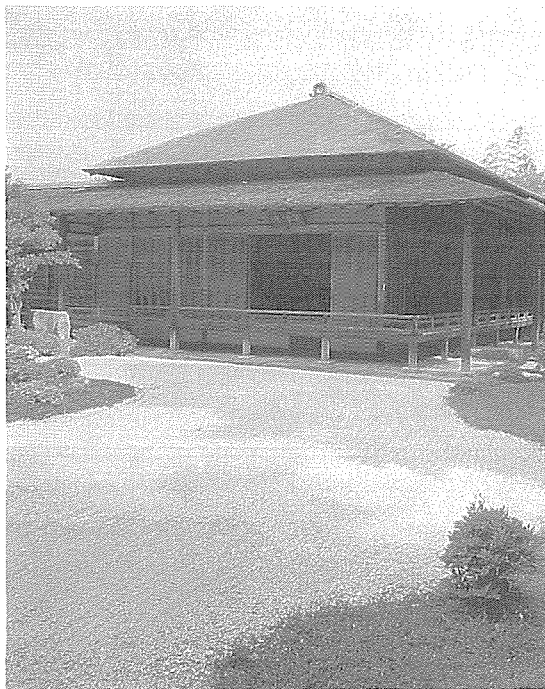
科学においては、その成果は社会的に共有される。たとえば、数学者がある大定理を発見したとしても、特許申請をする人はいない。科学法則そのものは、人類共有の財産として扱われるのである。

ところが、共有財産である科学法則の一つの応用にすぎないのに、技術上の発明、工夫には特許権が認められ、私有財産として保護される。従来

の方法より格段に生産性が向上する、あるいは精度・品質が高まると判断されると、特許申請は許可される。一定期間を経ると特許権は効力を失い、その時点で初めてそれは社会的共有財産に加えられる。

建築構法の場合、特許申請や実用新案登録のほかに、画期的新構法に関する提案とその根拠は、建築センターが認定すると実施権が与えられる。それを審査するのは、その道での権威と目される二五名の専門委員会である。超高層、免震構法、インテリジェントビル、プレファブ構法などの新しい分野で、企業間競争において優位に立とうと各社競って申請攻勢をかけている。こうした形での技術独占が、大手建設業者、プレファブメーカーを中心に進められている。

現代科学は極微の世界での認識が進み、材料諸科学や電子工学は日進月歩の状況である。また一方、生命体の機構も解明されてきて、分子生物学や遺伝子工学が発達してきた。バイオテクノロジーは農業および食物生産を革命するだろうといわれている。このような、科学および科学を背景とした新しい諸技術をひっくるめて科学技術と呼んでいる。新理論の矢継ぎ早の誕生と生産方法の革新のために、



壁がなく柱だけでも強いつくり……曼殊院小書院  
日本の美術38「住居」(至文堂発行)より転載

現代は科学技術の革命の時代という特徴をもっている。

科学技術の進歩自体は人類にとって望ましいことである。しかしその利用のされ方はさまざまな利害を伴い、社会的問題を引き起こしている。わが国は官僚主導の産業育成と富国強兵策という後進性から今なお脱してはいない。官・学・財の癒着は甚だしく特権階級が形成されている。そこに加われない中小零細企業は資本力の劣勢も手伝って、技術向上と体質改善がされにくい。一次産業においては自然が相手であるから、大幅な生産性向上は望むべくもなく、二次産業との所得格差が広がって、農・林・漁業は衰退し、自然が荒廃する。

伝統的木構法などは過去のものとされて、歴史的な素晴らしい文化は捨て去られ、見かけはよいが実質は安普請の使い捨て住宅だけが氾濫する。

技術上の諸手段が身近なところから姿を消して、大工場や集約的なプラントにいったために、技術者の主体的力量が奪われて、形骸化や疎外化が生じている。素材の性質もよく知らない設計者が増えていくという驚くべき状況が生まれているのである。これは行き過ぎた分業化の帰結でもあるが、制度や教育の面では正されることなく、無政府状態である。

現代的な社会問題の大部分は、科学技術の利用のされ方と社会制度との関わりに端を発しているといえよう。

## 2 技術の社会性と独占化

現代的な科学技術に対して、経験の伝承に基づく近代以前の技術を伝承技術と仮に呼んでおこう。戦前まで住宅は伝承技術が支配的であった。伝承技術は、棟梁と職人衆という担い手たちと道具とによって、社会的に共有され、再生産されていた。怪我と弁当は自分持ちの自立職人の存在と市販道具は、社会的な共有技術の基本条件であった。

伝承技術がその社会性を保ったまま、発達した科学理論を取り入れて、現代的な科学技術に変貌していった、というわけのものではない。現代技術は近代化の過程で、職人層を大企業に採用する

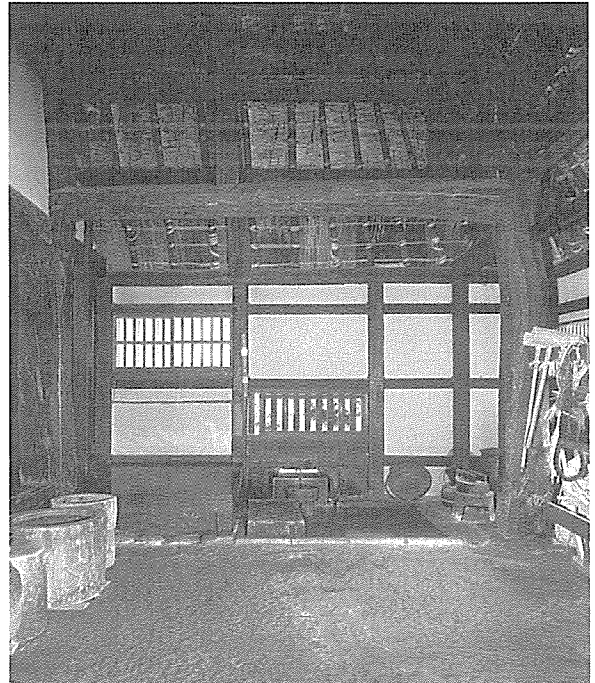
ことと、下請組織として資本系列に組み込む、という二つの道をとった。

伝承技術は経験に依存している故に科学的ではなかった、という見方は、人間の持つ鋭い感性こそが科学的把握の基礎であるという事実を見落としている。簡単な器具を用いて人間の精緻な感覚器官がなす計測は、総合性という強みにも支えられてさまざまな機械や装置に頼らなくても、素晴らしい作品を数多くつくり出してきた。

紙数がないので詳述は避けるが、古建築群、近世の土木技術や造船技術による作品、家具・民具などを眺めると、技術作品の質はむしろ時代をさかのぼるほど高い、といえる。経験の蓄積で合理化し進歩する反面、省力化も著しくなって質が低下するという相反する傾向がそこにはみられる。

日本が西欧化をめざして急速に近代化をすすめた過程で、伝承技術と職人たちが果たした貢献度は極めて大きなものがある。西欧の数学を吸収するうえで和算が到達していた高い水準が短期間に国際水準化を成し遂げさせたのと同様に、手工業が発達していたおかげで、わが国の大工業化は容易に達成できた。

だが、大工業化の過程は同時に技術の独占化の



枝分かれた木を梁受けの柱としてそのまま使った叉柱という伝承技術が生み出した民家……福井県坂井郡の「坪川家住宅」。写真/岡本茂男

過程でもあった。住宅の技術においては工程が多岐にわたり、工業化の対象とするには効率が悪いため、工業化が遅れた。

技術は人間生活に必要な諸資料の生産に不可欠な手段の体系であるから、生産そのものもつ社会的性格は技術にも反映する。生産というものは現実に社会的な形態で行なわれるものであり、全歴史を通じて、技術は過去の全労働の蓄積が物化した手段という特質を備えている。

技術に関する法規制は、したがって、公共的性格を強く持った客観的なものでなければならぬのに、私企業の利益が最優先で保護されるのが慣行となっている。

センターの認定内容は企業秘密として非公開であるし、国民の税金で成り立っているはずの国立大学での研究成果が私企業に持ち込まれるなどという不都合がまかり通っている。

鉄骨鉄筋コンクリートを、柱や梁などの部材別に分割して平打ち製作とし、現場で組み立てる、H型鋼入りプレキャスト構法は、略称してHPCと呼ばれているが、その方法で建てようとする鹿島建設に躯体工事費の5%を支払わなければならないという。

現在、建設に必要な主要資材は、その動くところ必ず大手商社が介在していて、そこを経ないと入手できない仕組みになっている。

先の大震災で、最高の技術水準を誇る大手建設会社がセンターの認定を得た構法が、軒並み多くの被害を受けた。これまでわが国の誰も経験しえなかった直下型の上下動とか、素材の未知の挙動として、幾多の「説明」がなされているが、センターの権威と、技術上の思想が問われている。免震機構は原理的には一つといえるのに、各社の方法がそれぞれセンター認定を受けている。免震機構の普及や耐震的柔構造の推進などはぜひとも早期に実現すべき課題であろう。

大手建設業や住宅産業の技術独占を民主的に規制して、技術の公有化と職人の自立化を促進しなければならぬ。次々に現われる新製品を買い替えさせられて、借金奴隷を強いられる現状も、大きな問題の一つであり、その根は同じところにある。

### 3 現代建築構法批判

技術が職人の手から大企業の独占に移行するとともに、さまざまな欠陥住宅と問題構法が多量に発生した。

社会的かつ客観的に建築構法に期待される条件を考えてみると、左記のようになるだろう。

- 1 耐力性|| 十分な耐震性、耐風性、耐雪性
- 2 耐久性|| 一〇〇年以上、三〇〇年程度の耐用命数

- 3 美観性|| 我が国の伝統建築のもつ繊細にしてシンプルな美

- 4 衛生性|| 健康的で衛生的、生理への適合
- 5 経済性|| 収入とバランスする適正負担額

- 6 環境性|| 環境と調和し、自然破壊をしないこと
- 7 資源性|| 有限資源の有効活用と省エネルギー化

- 8 移築性|| 解体、運搬、移築可能で建設廃材小
- 9 混用性|| 異種材料を適切に混用する合理性
- 10 保守性|| 維持管理が容易かつ小修理で永持ち

1 から5は主として建主の側からの要求とみる  
ことができ、6から10は社会的な必要条件と考えることもできる。以下この10項目に照らして、現代建築構法の問題点を探ってみる。

#### 1 耐力性

十分な耐力を確保しようとする単価は上がるが、損害の確率が減るため、全体としての損失の期待値の低下を招き、結果として、丈夫すぎる家

をつくっても損にはならず、逆に低耐力ほど損失の期待値は大であることが、確率的に証明されている。

終局耐力1Gの確保は最低目標としてめざす必要がある。構造材料の如何を問わず、材料特性を生かし、形態を工夫し、それらに適合する構法を考えれば、わずかのコストアップで著しい高耐力化は実現するのに、使い捨ての低耐力、低寿命があたりまえのようになっていく。

#### 2 耐久性

木造住宅二五年、鉄筋コンクリート造六〇年の耐用命数は低すぎる。伝統木構法の民家は一〇〇年から二〇〇年、中には五〇〇年を経たものもある。少なくとも一〇〇年以上の寿命を確保しないと、樹が成長する時間がなくなり、森林は荒廃する。

木造建築の耐久技術は、千数百年の昔からわが国では確立していたのに、ここ数十年の間に捨て去ったのである。ツーバイフォーや各種パネル構法は一五年くらいで老朽化する。

コンクリート造は型枠に使うベニアの大量消費と軟練りコンクリートの低寿命の故に、現行の一体式現場打ち込み方式を改めなければならない。柱、梁などのパーツに分解して、固練りコンクリートを平打ちするプレキャスト構法に転換することにより、石造のもつ半永久性と木造のもつ移築性を同時に獲得できる上に、繊細にして合理的な造形の自由も拡大する。加水量とセメント量の割

合を現行の六〇%から四〇%に引き下げるだけで、コンクリートの寿命は数千年の間、風化しない。サイト・プレキャスト構法への切り替えは、どの工務店でも取り組める課題であって、決して難しいことではない。

建築の寿命は短いほうが経済を活性化すると、という考えは皮相すぎるだけでなく、地球を破壊に導く。

#### 3 美観性

構造即意匠であるのが伝統木構法の特徴であるが、これはコンクリート造でも組積造でも、本来的に妥当する。軀体+仕上という方式の木造であるツーバイフォーや各種のパネル構法は木の良さが生かされただけでなく、耐久的ではない。コンクリート造でも、平打ち方式にして木造のように組み立てる構法にすると、これがコンクリートかと疑いたくなるほど美しい軀体ができ上がるのに、そのような方向は無視されている。

#### 4 衛生性

諸外国に比べて、科学物質の規制が甘すぎるため、人体に有害なガスを放出する多くの工業材料、新建材が野放し状態で生産され、気密性の高い住宅内で長時間過ごす人びとの健康を阻害している。さまざまな防虫剤、防蟻剤、防かび剤によって、床下から、壁や床から、有害物質が人体に入り込む。毎日農薬を吸い込む状況が生まれている。ビニールクロスので可塑剤と接着剤から発ガン物質が日夜放出されている。



合板の接着剤からはホルムアルデヒドが出て、室内空気を汚染し、皮膚や肺を犯している。木材の防腐処理剤も有害である。CCA系の防腐剤はクロムやヒ素などの猛毒物質を含んでいる。重化学工業が毒をもまき散らしているのである。

阪神大震災で廃材を焼却した場所から、高濃度のダイオキシンが検出されている。ダイオキシンは米軍がベトナムで撒布した枯葉剤に含まれ、大量の奇形児を生んだ恐ろしい物質である。

乳幼児や老人などの弱い人たちが真っ先にこうした化学物質の被害を受ける。アレルギー性や原因不明の難病が多発し、アトピー性皮膚炎などが後を絶たないのは、これらが原因である。

## 5 経済性

単位性能当たり、および単位耐用命数当たりで比較しないと、単純な平米価格は無意味である。現状は各エレメントの性能と耐用年が確立しておらず、非科学的なコストだけが通用している。

耐久性を高めることが経済性の向上でもあるのに、一般にそうした評価はない。

エレメント性能は、防災力、耐久力も加味して、厳密な実験と計測のもとに定量化される必要がある。

## 6 環境性

東南アジアや南米で進行している大規模の森林破壊は、浪費性の強いわが国の建築構法と、木材輸入に狂奔する大手商社の活動が、最大の原因である。コンパネの大量消費と養殖エビの輸入は地

球規模での環境破壊を招き、建設廃材の増加がエネルギーの大量消費と環境汚染を引き起こしている。

## 7 資源性

コンクリートの原料である石灰石も、また、鉄鉱石も、地球創成期の生命活動がもたらした貴重で有限な資源であるから、大切に扱うべきで、再利用不可能な使い捨ては許されるべきではない。唯一再生可能な木材も一〇〇年を経ないと建築用材とはならない。

すぐに大量のゴミと化するような建築構法は、材料資源と同時に有限なエネルギー資源の浪費をも伴う。

## 8 移築性

わが国の伝統木構法は、解体して他の土地へ移築されるのが普通であった。これは組立て式のもつ合理的な側面であるが、現代木構法にはそれすら失われている。コンクリート造でも、部材製作とその組立て方式に切り替えると、解体移築可能となり、全部をゴミにする不合理は解消する。

## 9 混用性

適材適所の言葉どおり、異種材料の組み合わせはそれ自体合理的であり、資源保護の上からも大切である。難しい論議の不要な種類の混構造ですら機械的に否定する建築指導課の無理解がまず正されるべきである。

## 10 保守性

維持管理と保守の容易さ、とりわけ外装の手入

れと設備配管の取り換えを重視した設計デザインが大切である。

## 4 人間中心のテクノロジーへの変換

技術は本来の性格からして極めてヒューマンなものである。手づくりの伝承技術の中には濃厚にあった、丈夫で永持ちして美しいという性格は、ものづくりにとって生き甲斐でもあるのだ。工業技術はその未成熟の故に、手づくりのもつ温かさと親しみと美的感覚に欠けるのではない。工業製品の冷たさは不特定多数の利用者を前提にした量産商品としての利潤追求を根本の動機にもつところからきている。

住宅の質を人間の生活と肌合いに適合するものに変えてゆくには、本物の住宅を求める需要者と自立職人層の直結という形態に頼るほかに方法はない。人間の労働を人間の生活に役立つ方向に切り替えることによってしか、真の文化は確立しえないのである。

経済至上主義は文化を減らす。生産性向上を唯一至上とするとき、必然的に質の低下を招来する。あらゆる「手段」は「目的」に奉仕するときのみ有用でありうるという自明のことが、いま、忘れ去られている。

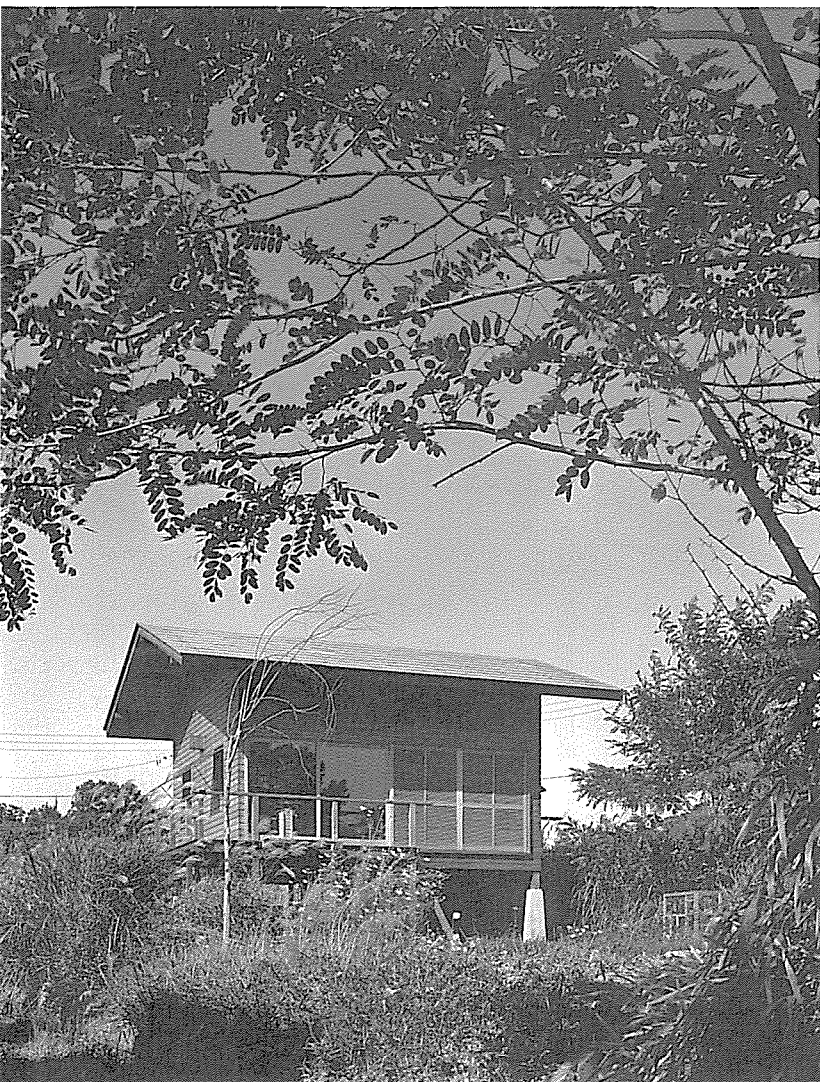
（ますだ・かずま／建築構造家  
榎増田建築構造事務所代表取締役）

特集●戦後住宅史を読み直す——その間を探る

## 根拠地への道のり

東京を離れて、生活と仕事の拠点をつくった写真家のすまいろん

岡本 茂男



1973年に「半手づくり」で建てた埼玉県吉見町の小屋の外観。当時はまだ一面のすすき野原だった。(写真/畑亮、左も)

### はじめに

東京から五〇キロ圏、埼玉県比企丘陵の東端に位置する、ここ吉見町に工房兼住宅を再構築してから満五年が経過した。

はじめてこの地に「半手づくり」の週末住宅をつくったのが、一九七三年の夏だったから、私と吉見町との関わりは、殆ど四半世紀ほど経つ計算になる。

最初に家を建てた経緯と、今ここが我が根拠地という考えに至った、私の「すまいの軌跡」が、とても「論」などといえるものだとは些かも思わないが、求められるままに振り返ってお話することにした。

そのような意味で、この小文は全く個人的な体験で、一般概念ではないことを、はじめに読者諸賢のご了解を得ておきたいと思う。

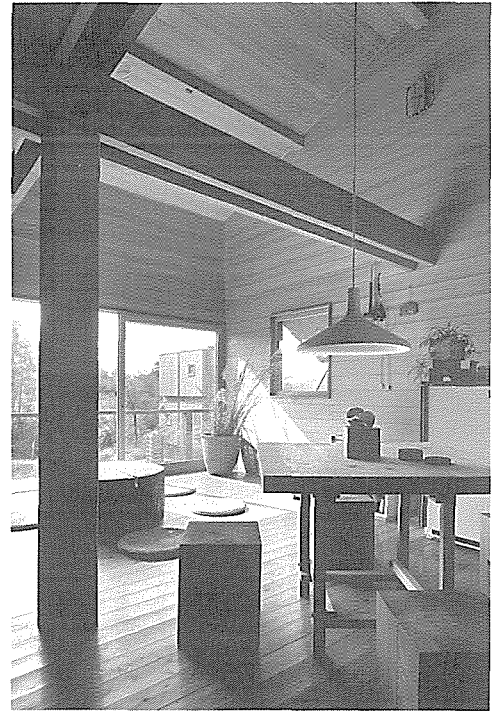
### 吉見町との出会い

一九七二年初秋、初めてこの土地を訪れたとき、そこは一面銀色に輝くすすき野原で、南下がりの緩やかな斜面だった。南西に展開する秩父山系越しに、はるか富士山頂が望みできるその光景は、東京下町育ちの人間には実に衝撃的な眺めで、決定的ともいえる感銘を受けた。目指した土地は面積が僅かに五〇坪であること、変化するであろう先行きの景観のことなど、一瞬のうちに念頭から

抜け落ち、なんとしてもここに家と思いつき、その翌年の初秋にはさっそく小さな木造小屋を直営工事で建ち上げた。それがこの雑文の始まりである。

当時は東京の出版社に勤務していた関係から、当然仕事と生活の基盤は東京にあった。その後間もなく独立したが、仕事も暮らしもしばらくの間は相変わらず東京中心で、がむしやら風に完成した吉見町の家も、搬送可能な小物の撮影スタジオと、週末の息抜き程度の使用頻度であった。そもその発端が、いくつかの偶然が同時に重なった結果、ほとんど衝動的につくることになった家である。

そうした中で強いて起因を探すならば、日常の商売に関わりの深い、住宅づくりの実体験が主な目的であり、またその実行に当たっての唯一の拠り所は、圧縮された東京の団地生活では到底望み得なかった要素だけを形にしたら面白かろうとい



「半手づくり」小屋の室内。延床面積10坪のワンルームである。

うことだったように今思う。

その結果については、当時「自我の小屋」を訪れてくれた知己・友人たちからは、素人は恐いねなどと、かなり手厳しい評価を頂戴した記憶がある。

しかし使い出してみれば、結構楽しくて、重宝で、利用の度ごとに東京からあれを移し、これも移して、吉見町の家滞滞時間は徐々に増幅してゆき、それと並行して当初意図しなかった、東京住まいの物置的性格も確実に深まっていた。

### 写真家と仕事場

建築に携わる写真家の実態を、皆様はどれくらいご承知か判らないのだが、どの写真家にも共通していえるであろうことがある。

大方の場合、撮影するべき建物の存在する現場に行かなければ、まずは仕事にならないというこ

とである。

撮影現場は近場ばかりとは限らぬ訳で、地方の町村にも出かける、また場合によっては海外の取材も珍しいことではない。遠隔の地であっても、単一の対象を数日という短い期間で取材を終えることができるときには、ホテル・旅館住まいでも一向苦にならないわけだが、長期にわたる取材では、どうしても前進基地が必要になってくる。

私の場合には、たまたま京都に撮影対象があり、取材の性格上長い年月が必要になったために、ブランドはあるものの一九八〇年頃より七年間ほど京都に前進基地を置き、腰を落ちつけて仕事をすることになった。

今にして思えば、この頃から東京の家に対する依存度が段々と薄くなってきたような気がする。つまり東京に帰り、埼玉に出かけるということが、仕事と生活をより煩雑にするような状況になってきたのである。

言い替えれば、当時仕事の中核となっていた京都でなければ、本拠地は東京であろうが、埼玉であろうが、大した違いはないと思うようになってきた。

実際、その当時いくつか並行して抱えていた仕事の受注先である出版社との交渉も、電話・ファクシミリなどで大方は間に合うようになった。また雑誌の連載記事なども、京都から直接出版社に写真原稿を送るといったケースも再々あるという仕事の流れができて、浮き草的状況でも当面する



「半手づくり」小屋をつくってから17年、「根城」としての吉見写真工房が竣工。(写真/岡本茂男、左も)

仕事の処理には一応の結果が出せることも分かってきた。

## もう一つの仕事場

そのようなことが可能になってきたのには、私の個人的な事情もあるが、もう少し大きな出版界の流れと決して無縁ではない。

二〇年かそれ以前は、出版物における写真の使用われ方は、白黒写真が主流で、カラー写真は口絵程度の使用れ方が通常であった。したがって撮影されたフィルムを処理、またプリントをするために、もう一つの仕事場である暗室の確保は不可欠で、そこでは写真家が、長い時間を作業に費やしていた。

カラー写真と白黒写真では伝え得る情報の内容は当然違うわけであるが、現在の一般的な出版事情は、雑誌・書籍はもちろん百科辞(事)典ですらオール・カラー化への軌道を辿りつつあるように思う。

出版の話はさておき、写真家と色質の関係については、現在でもカラーフィルムの現像、またはプリントを自家処理している写真家はごく希である。したがって写真家が利用者からカラー写真を求められれば、撮影はするが処理はプロラボに依頼する結果となる。

誤解を招くと具合が悪いのであえて言うが、依頼した結果のチェックが撮影者の納得範囲であれ

ば良い訳で、処理をプロラボ任せにすることは是非をここで論じるつもりはない。しかし白黒写真さえプロラボが実作業を補完するという流れの現在の現況に即していえば、考え方は足枷でもあった暗室作業から写真家が解放された結果、暗室というバックスペースの存在理由が、現代写真家にとって希薄になりつつあることを意味しているだろう。

## 浮き草生活との決別へ

長かった京都半住生活に一応の区切りをつけて、東京に戻ったのが一九八六年頃だった。しかし、それからなかなか期間依然として関西通いは尾を引いて、じっくり東京に腰が落ちつく気配のなまま更に数年が過ぎた。

やがて、ふだんから気になりながら、果たせなかった対象に取り組む余裕ができてきた頃ようやく、京都時代に感じていた不安定な生活と仕事の根城を単純化することに踏み切った。

とはいえ、前に述べたような時代背景の中で、いまさら暗室に拠り所を求めたような根城を考えると、時代逆行するが如き想いもあったが、職人としての自分の生き方に素直に徹底することにした。

実際面で最大の課題は場所の問題であったが、職・住をより良い形で一本化するために、私に許された条件の中で考え、結局埼玉を選ぶことにな



吉見写真工房のアトリエ室内。  
設計はDON工房・大野正博による。

った。

しかし、ここで気になったのは、生まれて以来住み続けた東京を離れた場合、仕事などの情報の確保や、公私両面の人づきあい等がどうなるかということだった。

情報の問題は、今までむしろ多すぎる不要情報の方が煩わしかったと思う。また収集の点では、電話・ファクシミリに加えてパソコンのネットワークの利用により、充分問題はないと予測はしていた。

また人的交流のケースは、機会あるごとに東京に出かけ、知り合いの人びとのお顔を拝見、お話をしよう心がければよいと、とりあえず問題留保のままスタートを切ることにした。

### 「根城」づくり

今まで、日常の仕事を無難にこなしていくことに特別に問題があった訳ではないが、新たな拠点建設に当たって何が重要かという点で、いくつかの条件が考えられた。

その第一は、小型軽量化していく時流に逆らい年々大型化してきた、自分の撮影機材を完全にカバーする大型の暗室機器の設置。

第二は、フィルム、印刷物などの色彩評価が正しく判断できる照明設備の設置。

第三には、どんな時間帯でも、家人に影響を与えず、自由に作業に入れる暗室、作業室。

その他、再撮影不可能なフィルム類の保管庫、情報機器の整備等々がそれである。

その時期、私のそんな思惑とは別に、世の中の流れも激動の時代で、日本中に途方もない建築ラッシュを引き起こしたバブル景気に世間は浮き足立っていた。辺鄙だった吉見町もご多分に洩れず、にわかに活況を呈し、続々と新築の家々が建ち始めた。

二、三年の間に、私の小屋の周辺の空き地は建物で埋め尽くされ、完成したまじめ住宅の建ち並ぶ中、わが思いつき建築は、全く環境にそぐわぬ異端建築になり果て、利用するのにも何となしに人目を憚ぶが如き気遣いが必要になりだした。

それは建設から一六年ほど経った頃の出来事であり、結局先の見通しのない曖昧思考の付けを払う結果になった訳である。しかし折よく根城の建設を考えていた私にとっては、むしろ禍福陽転の好機と受けとめた。

二度と同じ過ちはこりごとと、専門家に依頼した工房の竣工が一九九〇年の年末のこと。建物こそ完成はしたものの、永年続いた東京との掛け持ち生活に終止符を打つまでには、さらに五年の得心期間を必要とした。

ようやく昨年末から、遅すぎた根拠地での活動を始めだが、確実な手応えを感じ取るには今一つというのが現状である。

(おかもと・しげお/建築写真家)



〈論文〉——3

# 住居設計論

光・スケール・場所性

室伏 次郎

この論文は、シンポジウムへ向けての他の三編の論文と併せて、『研究年報』22号(一九九六年四月刊)にも掲載いたします。



## はじめに

住宅を設計するとはどういうことか。本来個人の日常性に基づいた機能的な要請に始まる住宅の必要に対して、設計するということと、表現することとは、その本質において無関係なことである。もし住宅を題材にその表現を設計することに意味があるとするなら、それはいかに小さな存在といえども、特殊な場合を除いて、建築として建ち上った瞬間にそれは社会的な存在とならざるを得ない、場所に固定されるという建築の宿命のために、環境に対するその存在の意味と、そのものとしての存在の仕方と問われるということにおいてのみであろう。しかしこれとても、クライアアント自身の住宅を必要とする機能的要請と、その充足にあっては無関係といつてよい。

にもかかわらず住宅の設計を通じて表現を試みようとする。それは何を指すのか？

住宅の設計の評価は常に上述のような、住宅性と建築性(表現)とのせめぎ合いの中で捉えられてきた。

その評価基準にその住宅性の性能機能的充足度が問われてきた。住宅を人間の営みの総合的な歴史的時間の容れものと捉えた時に、その長い時間に耐える、生きられた空間として在るための、場の設計、それをここでは住居——時間に耐える住むための場——の設計と呼ぶとすれば、一方、日常性の要請するさまざまな機能に対応する空間の設計を住宅の設計と呼ぶこととする。そのような場の設計とは、機能を充足しながらそこから自律する空間、機能の変化に対しても自律的に在り続ける場として構想され、それらの二重写しの関係に生活が在るといふ、生活と空間の自律的関係の設

定ということが出来る。

## 1 機能と空間の自律的關係

機能的要請からのものの自律ということとは、同時にものと人の自律的関係と呼び醒ます。生活者にものから解放された自由な関係を感じさせるものとするものである。それは、住居の在り方とは住宅が生きるための根源的な場であれば、そこに呼び込まれる時代状況、環境変化、住まう人自身の変化に応じてさまざまな変化を求める機能的な要請があるが、それは解決すべき問題の一つではあっても、効率や利便性を第一義とするのではなく、空間は精神の在り方に関わる条件と場をつくることを第一義とする場、であると考える。かつまた具体的にそれは、空間の純粹性を保証するため

に、機能Ⅱ道具、設えを規制する場のつくり方ではなく、むしろそれらは互いに自由に併存し、併存することによって互いの存在を許容され、結果それぞれが純粹に見えてくるという関係である。そのような場において人との、空間と機能は、自律した関係性と、互いの解放された自由を感じるものとなると考える。

## 2 壁のもたらずもの

——個感覚の覚醒と自由ということ

住居の空間を構成するものとして、私の場合、壁というモチーフを多用してつくることを続けているが、自由と表裏一体をなす個の意識について、壁という形式が不可欠と考える。壁は空間の構成上、制約に満ちた都市の住まいを形成することに好都合であるが（構造的でかつ、空間分節の機能を果し、安全、防音等と有効である）、そのことを超えて、壁であること自体が、その様相のもたらずものとして、意識を内に向かわせるものがある。都市居住に不可欠とも考える個感覚の覚醒を壁そのものが促すと考える。それは全てが水平な連続として展開する自然と一体となる空間を根源とする我が国の文化の在り方に対して、壁の空間のもたらずものは、自然と対立するという概念に基づいた個の文化、彼我的対峙の感覚の基幹となるものであると思うからである。都市——多様な個の自由な存在を許す空間——の生活に個感覚が不可欠とするならば、我々はこの壁の空間がもたらず意味を、生活の内、それと対立する文化の側に在ってなお、理解し、意識化を可能にする能力を要するのではないか。それは優劣の問題ではなく、理解ということであり、同化、吸収とも異なる。そのような意識から、個の自由を表現

するモチーフとして、壁を扱うこととなる。

## 3 幻想を捨てて、新たな幻想性を目指す

——日常性を透かしてその向こうにどれだけの幻想性を打ち立てられるか

前記のように、それ自身日常性そのものであり、表現を目指す何ものとも無関係な住宅に、それを設計することの意味があるとすれば、それは日常性にみられるさまざまな幻想といえる事柄、例えば、利便性・機能性の価値、表層によって差異感を感じる価値観等を超えて、ものとしての事実、つまり光と陰、面・線のスケールと、それらを構成する材質を含めた、相互の関係性という事実、それをいかに構成するか、という一点によってつくられる新たな幻想性にしか私はその価値を見いだすことができない。それは人・社会は変わるということを経底としており、にもかかわらず、その変わってゆく時間に耐える、空間の事実とは、そのようなものの関係性の内にしかないと考えるからである。

私はかつてあるアンケート『あなたにとって住宅とは何か?』との問いに対して、住宅とは、光の入る地下、囲われた外部を持つ地上、浮遊感に満ちた空中、天とのみ結ぶ天上の、それら四つの空間を積み重ねた塔のようなもので、その中を季節によって移動する裸の生活をするような場でありたい。つまりそれは住居であり、空間の森のようなものだ。ということを書いた。住居という場とは先にも書いたように、住まいという人生の総合的な容れものとして長い時間に耐える、機能変化から自律し、限らない生の営みを受け入れる時間の容器であるとすれば、それは当然宇宙的空間の

ミクロコスモスのモザイクでなければならぬ。その意味にとって、前記四種類の空間の原型は、住宅という機能を超えた全空間のモデルとしてある。

## 4 場所性

建築は当然のことながらクライアントの要請により全てが始まる。そして建てられるべき建築を取り巻く大きな意味での環境、そして依頼を受けた作家により構想された空間、という、三つの要素の関係の内に建築を捉えてきた。この機能・環境・空間の三つの関係は、それらが完全に一致する予定調和というべきものは在り得ないものとして考えてきた。つまり三つの要素は互いにズレた関係にあり、それぞれの一部が重なり合ったものと考えている。そして先に記した建てられるべき建築、空間とは、一度構想された空間は、その在り得べき望ましい姿があり、それは一人の構想するものにとつては、その場所に固有のものであつて、独立した人格のように、自律的に在らしめるものと考えてきた。要請の根拠たるクライアントの存在も、空間にとつて、先の環境の内にある。このような意味において、建てられるべきと言いかつまたその場所に固有の、という意味を見いだすことが、場所性に根差す建築ということである。

このようにして、住宅の設計は、住居という場の設計であり、自律的な関係、幻想性、場所性、そして空間の原型というテーマが私には考えられる。そしてそれら四つの主題の基に、住宅はその建てるべき人、敷地の固有の条件を通じて場を形成するための限りなく多様なテーマを発見される。

## 5 自律的に構成されたコンクリート壁の箱と生活の関係

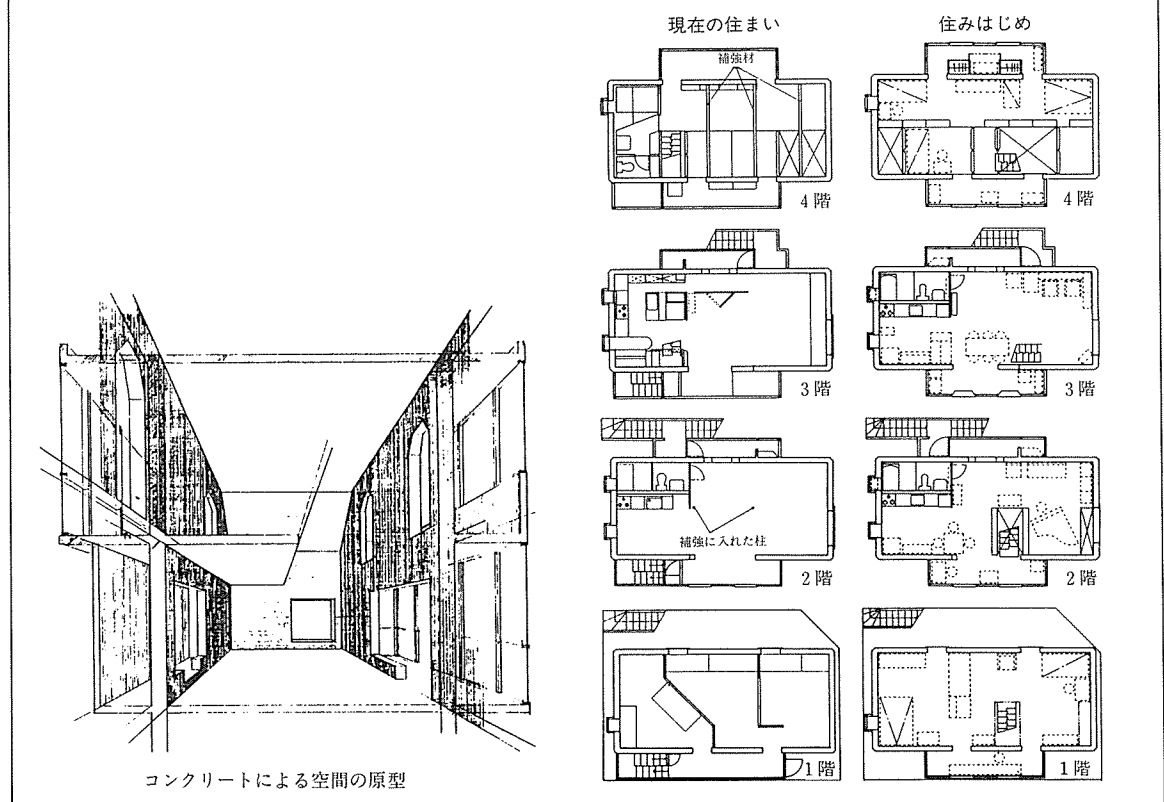
——都市の独立住宅のプロトタイプを目指す（北嶺町の家）

一九七〇年に完成した自邸である。当初は四階建ての上下二層ずつを二家族で使い分けるミニ共同住宅として構想された。極めて限定された敷地面積、超低予算、超短期設計という中で、若い設計者が条件はともかく、作品としていかなる意味を持ったものとするこゝとができるかを問われる仕事であった。それは住まいの設えをほとんど全て割愛し、躯体のみともいえる、目指す空間の原型のままに在るといふものであった。空間の骨格のみが構想され選ばれ決定されたもので、それ以外の住むための設えの全ては、最少限の許される範囲で、実現することのみが目指され、いわゆるデザイン的考慮の対象としては、限りなくアノニマスな表現で安価で普通であることのみであった。具体的には一九七〇年当時の都市に対する個の空間の確保という強い意識と、前述の壁の空間のもたらす個感覚の覚醒という目的から、厚いコンクリート壁構造の空間を軸に、その内部空間の感覚を明確にする意味で、壁の断面をできるだけそのままに表わすこととしている。そのように断面を自由にされた壁の空間に、二重に囲われた場と感じられるための方法として、その外部に単純なガラスの箱が取り付けられている。つまり極めて限定されたスペースであるだけに（壁一枚で街路に接する）、安心感、保護感の確かな場として、壁の意識その断面を見せる開口、それらを自由にする外皮という関係がつけられた。プランニングは、動かし難い設備が配置された場所が固定されて、それ以外の機能的

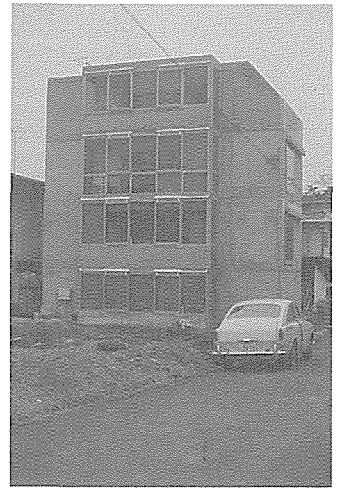
対応は、場としての空間に家族が適宜道具を工夫して対応しているというものであった。したがって当然のことながら全ては一室の連続した空間で機能分化された部屋というものは、扉の付いた浴室、便所のスペースのみである。つまり場の在り方のみが決定され、それ以外はルーズで決めないことが意図されている。

そのようにして設定された四層の空間が、偶然の機会に四層を一体に単独家族が使用することになった。階の違いと設備の配置によってのみ空間を分節されたコンクリートの箱は、その決められない設えを好都合に、都市の独立住宅の典型を示すこととなった。それは子のスペースの確保と同時に子のスペースの外への開かれ方の選択の自由を持つこと、独立した外との接点のスペースの設定とそこから内に確保されて在る家族のスペー

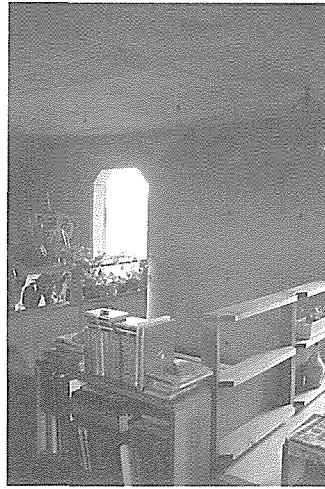
図一 北嶺町の家：東京都大田区、敷地面積71.92㎡、延床面積162㎡、竣工1970



写真：北嶺町の家



外観



内部空間

ス。そして親のスペースの存在という四つの場がその設えをルーズなままに在るといふものである。このような場に対するそれぞれの機能の想定及び外との結び付き方は、立体的な構成を前提とした都市に住まう一つのシステムとなり得ると考える。つまり長い時間に耐えて、家族の変化、生活の内容の変化にその時々柔軟に対応し続ける場の在り方となるのではないか。事実、子供を育て、その独立を見て、一時は一部を第三者用住居とした時期を過し、今度は家族の一員が再びそのユニットに独立した生活を営むというような、人の営みの極めて多様な局面に、対応し続けて、二五年を過してきた。そしてそれは場をつくる空間とルーズな設えという関係は建設当初のままであり、二世帯の

共同住宅を前記のような一種の普遍的都市の独立住宅の構造に変えたものは図示の一本の階段と一枚のドアの設置によって決められている。

建物の奥に付け加えられた階段は四層を結ぶと共に、外部へのもう一つの出入口（一階）とも通じている。結果、建物は四階以外の各階三か所に出入口を持つこととなった。二階は建物の主入口として使われると同時に、そこは奥の階段とドア一枚で切り離されること

で、設備を完備した独立のユニットとなることから、何時でも建物を二世帯に分割し得る要素となり、建物の外に対する接点のホールであると共に開かれた場として二重の性格を持つこととなった。また一階の子のスペースは二階の家族共通の主入口を使い、奥の階段で全体のスペースと結ばれているが、同時に直接外部とも結ばれる出入口を持ち、外との関係に選択性がある。このように二つのスペースは選択的に外部との関係を持つことができること、つまり前記のように都市の小さな住戸ユニットであると同時に、独立して外に開かれるスペースユニットを入れ子の状態に備え、子のスペースは家族との結び付きを独立か附属かの選択性を持つこと、そして小さな土地での立体的構成にならざるを得ないことに對して、バリアフリーな機能を備えることで建物は単純な四層構成でありながら、各層の複雑な組み合わせを可能とし、生活という長い時間の変化の状況に柔軟に対応し続ける一種の普遍的住戸ユニットとなり得ると考える。

そして、このような形式を持つ住戸ユニットは、単に独立住宅としてだけではなく、集合住宅を構成するユニットとなり得ることを、ミニマムながら共同住宅を出発点としてこの住居が成立してきた過程が証明しているように思う。nLDKの効率的集合という常套

化した住戸集合形式から逃れる契機となるのが、入れ子状に組み込まれた住戸内住戸ユニットの存在ではないかと考える。

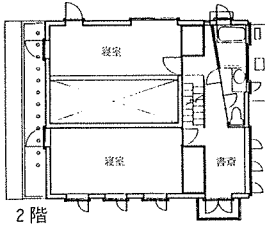
### 6 日常性をこえてその向こうに新たな幻想性を見いだす

——遺構の如き原型の空間を示す住居（北鳥山の家）

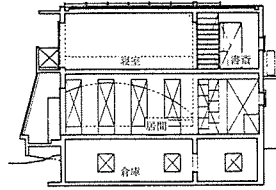
東京郊外のかつてほとんど畑に占められていた地域の内に、切り売りされた小型の住宅地群が散在している。それらは同様に郊外の大型開発された新興住宅地とも違い、敷地規模が平均的単位であることによる均一性を感じるものの、そこに建築される住宅の雑然とした構えの中に、独特の自由さ、明るさともいえるものを感じる。この計画はそのような風景の中にある独立住宅である。都市の住宅はほとんど常に、敷地の法規上の制約をクリアーし周囲の環境に対する配慮を重ねれば、それだけで建築の外部が決まってしまうような状況にある。この計画もその例にもれず、三つのエレベーションは、もっぱら住宅の必要に応じた結果となっており、道路に面するファサードが唯一残された建築的伝達のための対象となっている。

内部空間は基本的に三層構成である。中心に全天井をガラスに覆われた光の部屋を置き、一階は生活の主階であるが、そこは光の部屋に面する壁に、いくつかの開口を設けて、壁の断面を表わし、その存在感を明らかにしている。開口の形式は長方形と大きな円弧の一部といった単純図形であって、作者固有の独自性を意図されていない。ただし同一形式の繰り返しや大きな意図的な操作、図形の一部の切り取りにより全体への暗示、連想の示唆により、実体としての光の部屋

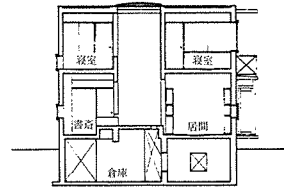
図一2 北鳥山の家：東京都世田谷区、敷地面積162.52㎡、延床面積178.32㎡、竣工1980



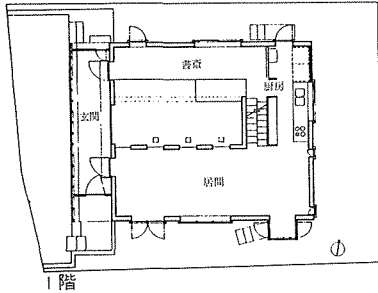
2階



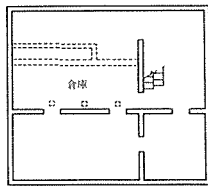
断面1



断面2



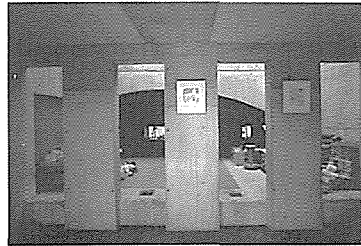
1階



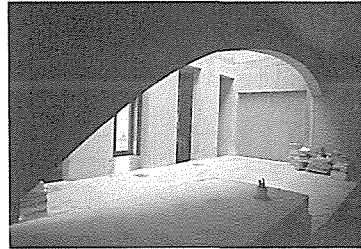
平面図

地階

写真：光の部屋に面する単純な開口、長方形のくりかえし



写真：同上円弧の一部



のスケール感は錯綜したものとすることが意図されている。二階は全天の光の中に全く単純な一枚の壁を感じる空間として在る。これらに対して半地下階は、上階の光に満ちた空間を主軸とするものに対して、全くの微光によって壁の断面として開くのみが照らし出されている。それは空間のスケールの実体を全く表わさない空間としている。つまり上階とは別のもう一つの世界をつくり出している。明確な三層構成の光の様態をつくり出すことによって、この住宅のスケール感を、個々において単一なものでありながら全体として複合的なものに感じられることが意図されている。ファサードを形成する傾いた壁は、薄暗がりの中で、入口ホールの空間が、この建物自身の外部を含めた周囲の雑然とした日常性の中から建築内部の独自の世界に至る導入部を

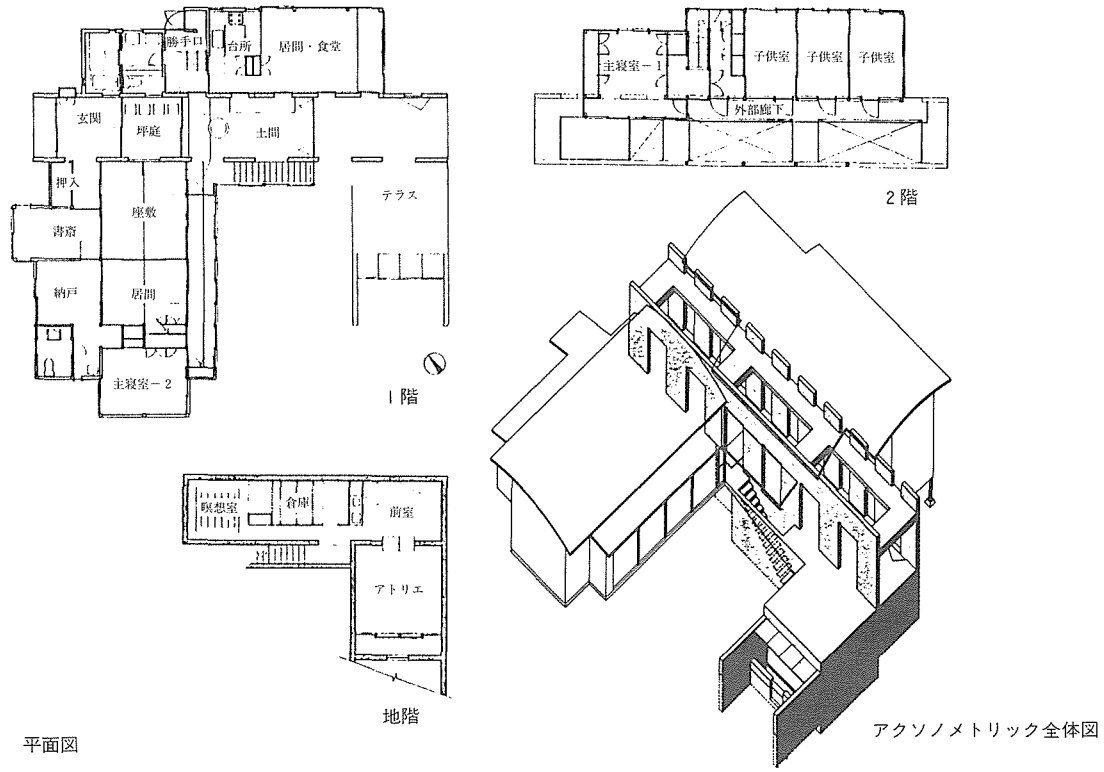
形成するための手段となっている。光の中で壁の断面をそのまま生活の中心に表わした空間は、建築の遺構のように、住まう人たちはあたたかも昔からそこに在った何かの構築物に気儘な工夫をして住まわっているようで、その住まいぶりの自由でこだわりのない表情と、建築の原型ともいえるべき空間とのコントラストは、あざやかに相互を際立たせて、そこでは建築も人も極めて自律している。

7 記憶の再構築という幻想性（東船橋の家）

かつて住み慣れた我が物としていた空間を、そのまま再現することではない、空間の継承ということがありと考える。その生きられた空間の意味の継続する空間、あるいはかつての空間の曖昧な連想による既視感に根ざす再構築された記憶の空間。それは当たり前に受け止められていた日常的で、かつ新しく出会った空間に、突然に浮かび上がる時間の意識であり、生の営みの視覚化、生きられた家の歴史の視覚化といえる幻想の空間をもたらすものとなる。

この計画は船橋市郊外の砂丘の中につくられた小集団の住宅地にある。三世代にわたる七人家族という、今では大家族というべき一家である。親世代と子世代の独立した生活領域を持つと同時に大家族が一堂に会する時間を楽しめるプランニングが求められた。また子世代の当主の画家でありイラストレーターである職業に対応するアトリエが要望されており、住まいと一体でありながら、かつ独立した領域を確保することが求められた。依頼者の一家は、計画地から少し離れた所に、三〇年以上にわたって居住し、そのかつての住まいも三〇年来の古い姿を残して、一見普通の家に見

図-3 東船橋の家：千葉県船橋市、敷地面積471.55㎡、延床面積256.11㎡、竣工1989



えながらこの地に独特なものと思わせるエレメントにあふれていた。周囲は海に近い（今は埋立によって海ははるか遠のいてしまった）かつての東京からの別荘地の風景を偲ばせる家がわずかながら残っていた。高い天井の木造家屋、広い土間に置かれた大テーブルの食事室と台所の連続した空間、手すりの付いた腰掛け窓、広い屋根付きの見晴台のような物干し台、深い軒の下にある縁側に面した二間続きの座敷、倉と井戸、砂地と松の木などが、いずれも海に近いその辺りの空気とよく似合った空間をつくっていた。

計画はそのような長い年月慣れ親しんだものを構成のエレメントとして、それらの構成の新しい関係性だけが設計されたものとして組み立てられている。だがその記憶の家のエレメントは、形の再現ではなく、その存在だけが引き継がれて、実体は全てが新しい空間であり、既視感によって構成された新たな家というべきものである。そしてそれらの記憶の家と全く無関係に地下のアトリエがあり、両者に共通する要素は、海の気配を感じることに、風・光・土・水の自然の要素が取り上げられて、各々の空間において、それを意識する共通の空間感覚によって結ばれている。つまり、旧世代と新世代が共通の記憶の要素を持ちながら、新しい空間に対して各々独自のイメージの空間を読み取って、自分の居場所と見いだしていけるようなものとしたと考えていた。いずれの世代にとっても、日常性のなかに埋没した記憶の要素を、それと意識して見た瞬間に突然に立ち現われる、幻想の家として構想され、そのことによって時間を内包する空間として現わしたいと考えた。

**8 禁欲的なヘビーデューティの追求と、愉快的な空間の受容を同時に満足させる<sup>注1)</sup>**

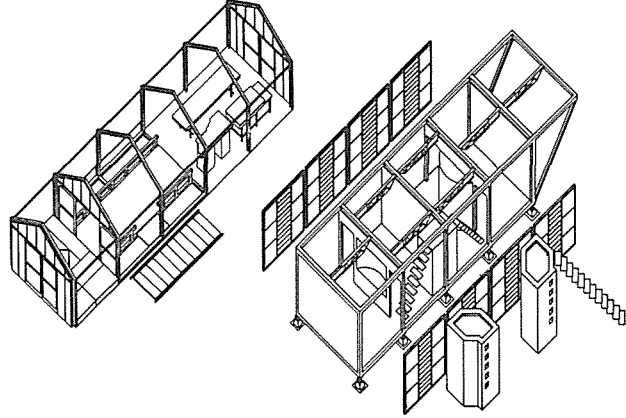
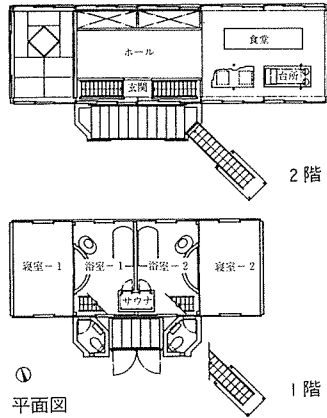
ウィークエンドハウスの可能な限り既成品の構成部材の集積によってつくる（御殿場のガラス小屋）

作家の固有の造形を創り出すこと、材料の表層の差異を求めること、機能的要請の利便性を求めること等一切の幻想を捨てて、新たな幻想性をつくることを目指して、構成する空間の関係性にのみ着目する。それがこの計画の全てである。

極く当たり前の農業用既成品温室を用いること、その他は全て建築用仮設資材の組み合わせによって構成された空間である。独立基礎上の仮設支保工用ジャッキ、床を構成するエキスパンドメタル足場床、同様の組み立て階段、安全ネットを張ったソファア、厨房機



図一4 御殿場のガラス小屋：静岡県御殿場市、敷地面積701.20㎡、延床面積96.62㎡、竣工1989



写真：2階温室部分

写真/新建築写真部



写真：同左カーテンを引いたところ

写真/新建築写真部

器は全て業務用既成品の組み合わせ、戸棚を支える足場パイプ、というように安価で普通の変哲もない製品の組み合わせとしようように、その構成方法にのみ作意があり、それをつくり出すものは作者の造形とは無縁なものとなっている。それら構成部材には全て装飾的要素はあるべくもない、目の悦楽としての美しさとは一切無関係な工業製品のひとつであり、全ては金属またはガラスといった不燃物でもある。そのような全く透明化された物としての事実のみが明らかにされた空間で、プランニングとしては、一対の男女の部屋が左右にあり、浴室も全くシンメトリーに各々のために一対のものとしてある。あとは厨房と一体となった食事室、ホールのような空間とそれに続く酔っぱらいのためのこたつ部屋があるという明解で単純なものである。透明なガラ

ス小屋の内部は全て白い布一枚によって外からの視点をコントロールされているにすぎない。つまり従来の計画において壁とされていたものほとんど全てが透明化され、外部との関係も明らかに対峙の関係となっている。ここでは関わる人は、人そのものとして自然を前にしてあり、人と人の関係もまた、家族・夫婦・グループ等という関係を離れて、個人として対峙している。自然の中に解放された、男女の明らかに対峙、明るく透明な遊び場の華やかな気分、かろうじて視覚的プライバシーを守られ、音、気配の自由な伝達と、そこに裸の男女が居るという意識の艶やかさ、それらのものが前述の極めて無機的なものの中に在って、自然の色濃い緑の中に浮遊する様は、自由と共に人間の本来的な意味でのエロティシズム（生命感ともいべきもの）を感じさせると考える。そのような空間、つまり現実の空間の変哲もない日常の中に突然に意識される特異な空間意識、それをつくり出す幻想（思い込み）を排した関係性のみによって組み立てられる空間を、既成品という解り易い構成材によって表わすことを考えた。

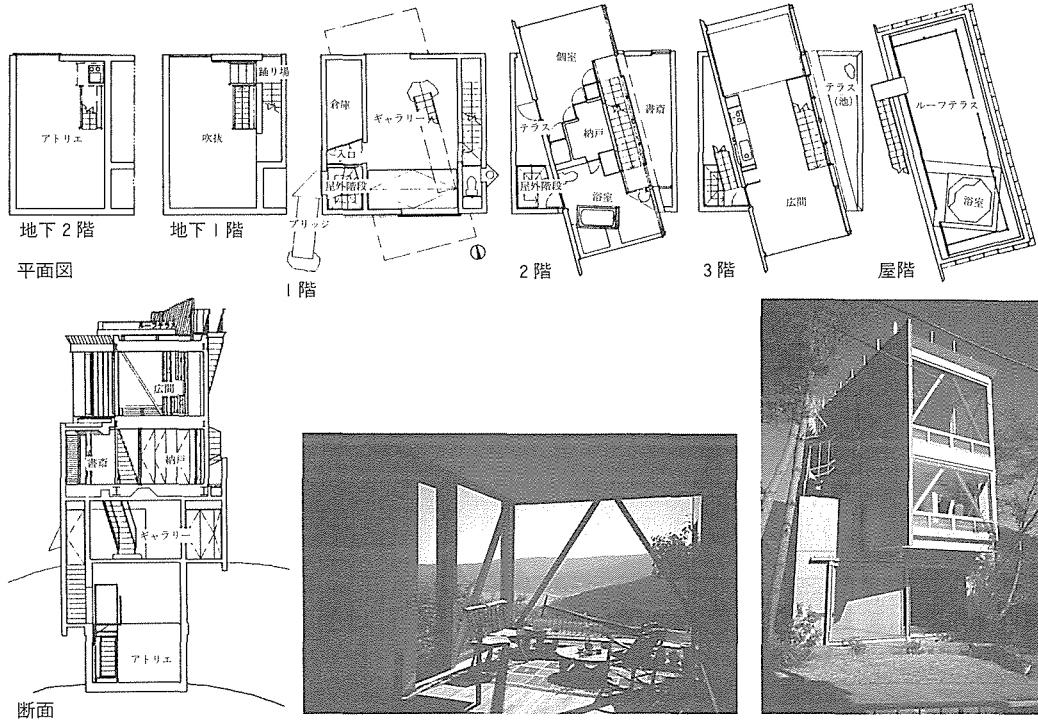
## 9 場所性の建築——熱海のアトリエ住居

場所性の建築とは、既にそこに在る文脈をそこに建てられるべき建築の発見によって目に見えるものとすることだ。

この計画は、熱海市郊外の分譲別荘地内にある、厳しい北斜面の一角に建てられたある造形作家と美術研究家のためのアトリエ付住宅である。

そこは明らかに、一本の塔を建てるために、クライアントによって選ばれた場所であると感じられた。宅地として著しくそれにふさわしい要件を欠いていたが、

図-5 熱海のアトリエ住居：静岡県熱海市、敷地面積627.98㎡、延床面積172.35㎡、竣工1993



周辺の風景のスケール感のダイナミズムと、展開する景観の要素の豊かさは、四季を通じて、あるいは一日の時間の経過の中で、極めて変化に富んだ素晴らしいものであると思われた。ここには場所的な自然の様相に関わる極めて多様な展開と、宇宙的スケールの時間の流れを体感するに相応しい光の変化の様相の全てが見て取れる場を感じるものがあつた。それは、作家の生の営みの全時間を受け止める場をつくるに最適な場所であり、自らの場を定めることによつてこの場所のそうした意味を顕現するものとしたと思われた。

敷地へのアプローチ道は、勾配の上側にあり、そこからはほとんど土地の様子をうかがうことができないほどの北下りの急勾配地である。正面の北側は、谷を隔てて美しい緑に覆われた斜面に對している。その斜面に連続する北西側は無数の別荘がこちらをうかがうように建てられた巨大な急斜面となつている。一方南側は、アプローチ道路を境に、やはり急斜面が下つて、遠く熱海湾、大島の島影、網代湾などを望み、穏やかな伊豆の山々の風景へと続くパノラマが展開している。このように周辺の極めて恵まれた景観にもかかわらず、あまりの急斜面であるために、利用し難い状況で、長年にわたつて見捨てられた宅地としてあつたものである。このようなバランスを欠いた負の条件を、一本の塔を建てることで、この土地のもつ正のダイナミズムを一気に、そして最大限に現前させるものとする事ができると考えた。

そしてこの一本の塔には三つの主題を表わすことが目論まれていた。

第一は、クライアントである造形作家の石と金属の複合された作品への連想から導かれた、その変態態としての塔であること。建物はさまざまな部分に作家自らの手によつてつくられた部分があり、それは作家独自の想像力によつて建築の一部として付け加えられたものとなつている。建物自体の空間への作家の関与の仕方が作家の作品と混成的な関係にあり、その実体もまた同様な関係を持つという、入れ子状況をつくり出している。今後建物は住まわれることによつてさらなる変貌を加えられて、「建築」「造形」「生活」のせめぎ合いがそのまま空間をつくり出してゆくものとなり、三者の自律的併存が、相対的に各々の見え方の純粹化を保証し、その時、塔は、ランドスケープというスケールの中で、一本の巨大な彫刻のごとき在り方をすることができるとはなかつたかと考えた。

第二は、作家の日常生活と、アトリエ作業、つまり日常と非日常の時間が、ここでは一体でありながら

つ際立って対比的なものとして在ることを感じ表現するものとするを考えた。斜面に根を下ろすように据えられた基礎としてのコンクリート壁の空間は、強い内部への指向性を持って、切り取られた間近の自然の姿をより鮮明に感じさせる。その上に積み重ねられた鉄骨フレームとガラスの空間は、浮遊感に溢れ、開放的で明るさに満ちている。ここでの光は下階のその強いコントラストをもった明暗ではなく、紙を透過して柔らかに空間に満ちていくようなものとなっている。

第三には、私が常に住まいの空間に「場」として備えたいと思う「光を導かれた地下」「囲われた外をもつ地上」「浮遊する空中」「天と結ぶ空間」という四つの空間的要素の原型を体現する塔として考えられた。塔の中間部にあつて、開口部によって前庭と一体的につなげられ、水平に外部と連続する地上のギャラリ―、その開口部のディテールは壁の断面がそのまま露出する納まりとなり、ガラス板だけがあたかも外側に貼り付けられたかのような内観となつて、外部に直接連続しているかのような空間感覚である。地下の奈落に下りながら、実際は斜面の下部に至り、間近に迫る樹木、土と相對するアトリエの空間。これらの二層の空間は、コンクリート壁の空間として、意識を内に向かわせるものとなつている。一方、地上のギャラリ―から書齋を経て入る寝室およびその上の三階に至ると、そこは鉄骨とガラスによつて構成された空中の空間であり、斜面の上に大きく張り出して、浮遊感に満ちている。また、透明化によつてもたらされる内部空間とスケールのある外部空間との一体感は、この浮遊感によつて際立つたものとなる。そしてこの解放感に満ちた空間の屋上は、完全に空に解放された頂上の空間で、

ダイナミックに変化する丘の稜線と、海の広がり、深い谷の緑と対面する場である。ここは塔の側面に付けられた一枚の金属の壁による背と、作家自らの手による流木のオブジェによつて、背後の別荘群からの視線を避けた、完全に個人的な空間であることで、より自然との対峙が実感される場となると考える。

このように、四つの空間要素の積層として考えられた塔は、さまざまに変化する光の受容体である。逆光による南の風景と明るく照らされた北の風景が、地上の空間を水平に貫き、高い南からの光が垂直に空間を降りて、谷へ下つていく地下の空間。南のガラスを透過した風景は、北のガラス面に広がる数百メートル前方の風景の中に映り込み、明暗の推移と共に虚実の重層の様子も入れ替わりつつ幻想の風景を生み出し続ける空中のガラス箱のような空間。満天の星の下に、シルエットとなった夜のパノラマ風景が時々刻々と色を変えて、宇宙の運行を目の当たりにする空間がここにはある。それは光の変化、つまり時間を空間化し目に明らかにすることでであると考える。クライアントの選んだこの地に、彼との協働によつて混成的な一本の塔を建て、この地のランドスケープの意味を顕在化することは、小さな建築たるこの住まいを、宇宙的なものに向かつて拡大していくことであり、それは作家の生きる全時間のための容器としてふさわしいものとなるのではないかと考えた。

## 10 住居の場の拡大

さまざまに機能分化を限りなく続けてきた近代の空間にあつて、住宅とはそのスケールの小ささ故に、そこでの限りなく多岐にわたる営みの質からも、

最も始源的で機能分化され難くある空間として考えられるべきものと思う。現代の生活は、一言に集約するならば、全ては幻想といふべき状況にあり、実体、本質というコンセプトに最も遠い都市生活に支配されているという認識は、電子メディアのもたらすものによつて最大限に加速されて、いまや日常化されている。あらゆるメディアの五感を通じての電子的なるものの浸透は、全てをヴァーチャルなもの、あるいはその錯覚ともいふべき感覚、とする状況がつくり出されている。

そうであれば、住まいの空間は、先にも述べたように、限りなく機能分化を避けた、多義的な場の形成と、その多様な場の相互の関係性という事実こそが実体であり、それらの構成員の持続とテーマの発見——光の変容体として表わされ、生きられる全ての時間を引き受ける空間、スケールに代表される事実としてのものの関係性のみ着目する空間、その場所性の性格、意味を顕現するものとして発見されるその場所にしかない空間、そして四つの空間の原型を備えること——こそが住宅の場の拡大——住居の設計——となると考える。

(むろふし・じろう／建築家、神奈川大学工学部教授)

### 〈註〉

1 植田実「室伏次郎の仕事プレイバック」建築文化、一九九二年三月号。

2 クリスチャン・ノベルグ・シュルツ「ゲニウス・ロキ」加藤邦男他訳、住まいの図書館出版局。

### 〈参考文献〉

1 クリスチャン・ノベルグ・シュルツ『実存・空間・建築』加藤邦男訳、鹿島出版。

2 クリスチャン・ノベルグ・シュルツ『住まいのコンセプト』川向正人訳、鹿島出版。

3 ホットー・フリードリッヒ・ホルノウ『人間と空間』大塚恵一、池川健司、中村治平訳、せりか書房。

〈論文〉 4

# 住まいを巡るつなぎのデザイン

——時をつなぎ、暮らしをつなぎ、空間と空間をつなぎ

## 平倉 直子

この論文は、シンポジウムへ向けての他の三編の論文と併せて、『研究年報』22号(一九九六年四月刊)にも掲載いたします。



### 1はじめに

設計した住宅のタイトルに「住まい」とつけるようになって七、八年になる。それは建築というモノを設計しているというより、そこで営まれる人の行為、コトの方をデザインしているという意識がより強くなってきたからである。季節や天候・時間によって建築が無限に変化するのと同じように、人の暮らしや考え方も興味を含む家族の関係は定かではなく、空間に働きかけてくる。何かと何かの間をつないでいくという関係性を考えることがデザインであり、動かないけれど生きている空間をつくることである。

### 建築家の住環境における役割

専用住宅を建築家が設計することは、不特定多数を対象とした不変的なテーマを追求しようということから出発してはならない。個人やそこに住む家族のため、あるいは与えられた敷地環境に対する特殊な

解答を探索するものである。そうして、特殊な解答を求めて十数年、三十数件を手掛けるうちに、それらは個人の閉ざされた嗜好の中にあるばかりではないと思いはじめた。例えば東京近郊に土地を持ち住宅を計画できることは、それ自体大変恵まれているのだが、敷地の条件はなかなか厳しい。例えば六〇〜一〇〇㎡の狭小地では住宅金融公庫の対象から外され(土地が細分化されて低層高密度化するのを防ぐ意味で一〇〇㎡以上)商品化住宅も対応する商品を持たない。そうした集合住宅並みの密度に対して、個性のみならず質を求めて選択肢を広げる意味で設計を依頼されるのである。敷地に多少のゆとりがあっても隣接地が上記のような条件であったり、簡易なワンルームマンションに囲まれ、接道条件もよくなければ同じことである。

### 設計のスタンス

都市にあっても日本の気候風土において内と外を緩やかにつなぎ四季折々の楽しみを取り入れ、工夫をこ

らして対処するつくり方に興味を持ち、建築と外部の空間をポジとネガの関係のように一対のものとして考えていくことが、結果として内部の空間を豊かにすることと同時に街並み・景観へ魅力的な提案をすることにもなると考える。あるいは個と家族の関係やさまざまなゾーニングをどのように配置し、空間化するか。異質なものが出会う時、少しスピードを緩め、用心深く観察し少しずつ確かめていく手順があると同時に、そこには未知のモノへの興味や思いがけない出来事による刺激もある。そして、そのような行動や気持ちを表現する面白さがある。

一方、日常の生活の場として住まいをどう位置づけるかは一元的でなく、家族のあり方も多様化してきている。一生懸命利潤を生むために働いて、気がついてみると働けば働くほど我が家は職場から遠ざかり、職場や通勤電車で過ごすウェイトが大きくなっている。働くことが日常であって、日常生活の場と思われてい

た住居の中身はがらんど。それは塾通いの子供や女性の社会進出などそれぞれの理由で家族全体に広がり、更に都市施設の充実によって機能が都市へ拡散しているともいえる。このように原因は政治や経済・教育など社会や都市の構造と深く関わっているため、住宅の形式によらず共通する問題といえる。ライフサイクルやライフスタイルによる変化に対して、個々の住宅がどこまで対応できるように考えておくのだろうか。モノとしての寿命から考えれば、できるだけ長く対応するように計画しておきたいと思うが、初めからさまざまな状態を想定すればするほど重装備となる。子供が独立した後、残った両親は結局多くの物と空室の中で、それらを生かすわけでもなく生活することも多い。特にバブルを経て街を見つめると、モノの耐久年数より土地価格の変動による影響や、相続による土地の分割が住み替えを進行させ、それにしても早く建て替えが行なわれているように感じる。こうした状況判断は、はなはだ感覚的な物の見方に偏るかもしれない。が、そういったことを調べてデーターを示したりある方向を模索することよりも、実際の設計を通して美しさや気持ちよさといった非常に感覚的なこともふまえてそのバランスの中で一つの決断に至った結果を、経験を思い起こしながら表現してみようという作業が設計者の立場としてより大切なことと考え、分析することにした。

テーマは家族や暮らしについて一〇項目、環境について一八項目をあげ、異質なモノやコトをどのようにつなぐかを考えることにした。そこから生き続け、使いつづける個から全体へ連続する視点に注目し、今後検討を要するべき点に焦点をあてて、第3章ではそれらを総合して一つのケーススタディを示し、今後の住宅設計の課題について考察することにした。

## 2 実例を検証する

### 2.1 PCパネル構造による五・四m×九mの空間 ：三〇畳——NH92ウベハウス城山台の戸建て集合

わずか二〇mmの厚さのPCパネルで三〇畳もの一室空間をつくれることは大変魅力的である。

商品化住宅ウベハウスへの都市型住宅の提案をしたのが一九八二年。その時は敷地の形状やレベルへ対応する方法としてPCパネルのブロックをいくつかに分け、その間を木や鉄骨造でつないだり、道路や隣地北側の斜線制限に対して、二階のPCパネルの臥梁を鉄骨でつなぎ勾配屋根をかけて空間のボリュームをとりながら軒高をおさえ、敷地に対する建物の配置の可能性を広げた。そして内と外をつなぐ縁側やテラスなどを積極的にプランに取り入れ、居住性や暮らし方に対する提案もした。

その後、何LDKといった間取りや仕上げなど内部に向けていた目を外部に転じ、美しい街並みにつながるような計画をすることが内部の暮らしを豊かにする計画になるという論を展開し、量産化を目標に一階をPCパネル造二階を木または鉄骨造で組み合わせさせた計画を提案し、数棟実現に至っている。二階を異種構造とすることで一階への荷重負担が軽減され、五・四m(6P)×九m(10P)を無柱の一室空間にすることができ、これだけのスペースを構造に制限されることがなく手に入れられることは、ライ

フサイクルやライフスタイルの変化に対応して容易に改造を可能にすることにつながる。このような混構造は要素を単純化して生産性をあげる工業化住宅の方向とは矛盾するが、それでも内装など地場の工務店との共同体制が組み立てられて生産されているので、比重を少し変えて対応することで、メンテナンスや増改築への備えにもなりメリットはあると考える。そして、低コストながら一階を堅牢に対湿・防虫に優れた構造で固め、二階は軽く屋根形状と共に自由につくるといった耐久性・居住性にも優れた構造をもつ住宅は、PCパネルをオープン部材として誰でも扱えることができるようになるればその可能性は広がる。敷地に対して住棟配置の可能性が広がると、厳しい条件の中でも使える魅力的な戸外の計画につながる。このことは三〇畳の一室空間の改築に加えて、増築の余地も考えて計画をしておくことができることにもなる。実際に行なわれるかどうかは別にして、日々の暮らしの中でそういった可能性があるといることが、住宅というモノに束縛されずに安心して気ままに過ごすことにつながる。初めから万全の準備を整えて過剰設計になるのではなく、小さく簡潔なものから、あるいは住み手の個性を加えながら徐々に上上げていく楽しみがあればよいと考える。この他にPCパネルの可能性を挙げると、比較的基礎が簡単なので地盤を荒らさずに撤去できること、PCパネルの建て込みから解体のヒントがみえ、廃材を別の用途に再利用もできるのではと思う。

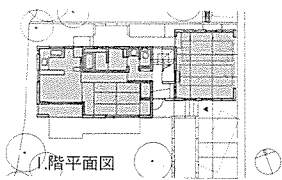


図-2.1 住居(6P×10P)と駐車場のブロックを分割する



写真-2.1-1 廊下・和室・食堂・内に引き込んだ縁側



写真-2.1-2 1階PC造+2階木造

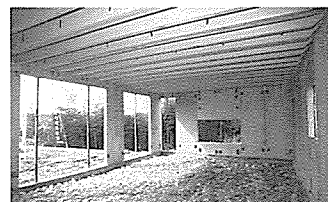


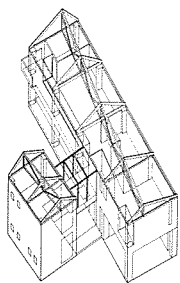
写真-2.1-3 6P×10P・30畳のPCパネル造の空間

## 2・2 振れる棟——羽沢の住まい

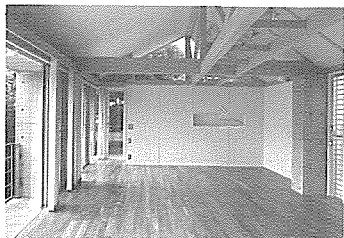
住まいとは、元気に忙しく有意義に過ごす場なのだろうか？ 何もしたくない、いや何もすることがないというように、体調が悪かったりただボンヤリとただらだらしていることができることが最も大切なものかもしれない。日だまりやちょっとした物陰でホッと心を許したり、台所から聞こえてくるまな板の上できざむ軽快な音に包まれて、まどろんでいる光景は安らかである。だらしなさと違っておおらかさ、包容力のある空間をイメージする。

ここでは、プライベートスペース・水回り・ホール・ブリックススペースと順に北から南へ配列し、棟を斜めに振って木架構をかけ、次第に小屋のボリュームを増していく。梁から上は開放し視覚的につないで小屋組のしくみを明らかにしており、登り梁がみえない側は順勾配、もう一方は梁をみせてねじれを調整する。棟に沿わせた空調ダクトとその下の水平架構、トラスはどれも振れる方向を強調するものであるが、重く強くみえぬよう白いステインをかけ、木の素材感を和らげた。ルーズにつながる空間は、改まる・ジャストフィットといった窮屈さより、くつろげるラフなスタイルを表現している。

書斎や子供の部屋がある別棟は南北に増築できるように計画しており、ライフサイクルやライフスタイルの変化に対応する布石と考えている。



図—2.2 振れる棟の架構がつなぐ空間

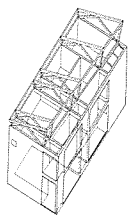


写真—2.2 居間・食堂・厨房をつなぐ架構  
写真/大橋富夫

## 2・3 空との交信——蒲田の住まい

容赦なく迫る周辺環境や、さまざまな要求を盛り込んだプランという、いつもながらに現実的な問題を抱えながら計画を進める。壁で囲まれたフロアは物や人の軌跡でうまっっていく。そこは、生活の場としての機能が凝縮され日常が繰り返して展開する。そんな中にも埋め尽くされることのない隙間、無造作でおおらかに広がる空間をどのように計画するか。日常的な風景を特別な景色に変え、よどみ、偏りがちな興味や嗜好を刺激し、不安定な中に緊張感をもたらす。住まいは、人や暮らしを優しく包んでくれるものであると同時に、絶えず成長し、変化することへの準備を求められる。

ここでは、壁と屋根の間（フロアからほんの2mほど上部にあるにすぎないが）を現実と非現実の間を繋ぎ、離す空間となると考えた。その隙間から見上げる空は限りなく遠くへと広がる。光や風を呼び込み、時々刻々と変化する光景は、いつも空と交信しているかのようである。周囲の建物や人の視線といった都市環境の無言の圧力から解放されて、せめて豊かな気持ちを手に入れたい。この欄間が夜の訪れを告げ、空模様を描き出す様子は、有元利夫の「夜のカーテン」『雲のカーテン』という題名の絵を思い出させてくれる。



図—2.3 壁と縁を切り、浮かした屋根架構

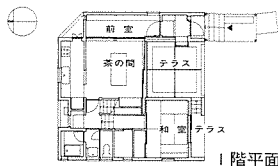


写真—2.3 欄間ごしに空と交信  
写真/秋山実

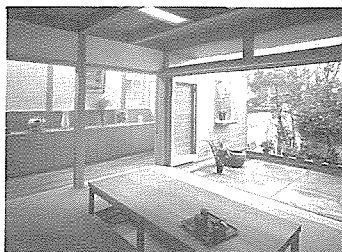
## 2・4 多様性——桑原邸

スペースが限られている中で、季節や時間によって装いを変え、孫や子供たちを迎えて大勢が時には集い、そして家事・接客・食事・団らんと沢山の用途に使い分ける。そんな暮らしかたは格別変わったものではなく、ちょっと前（それでも五〇年くらい前になるだろうか）にはよくある光景ではなかったか。床座の暮らしは機能別に分けた多くの家具を必要とせず、茶ぶ台や座ぶとなど手で動かせる道具でさまざまな使い分けをしていたし、障子やふすまを開閉することで縁側や続きの部屋とつながって広さも変えていた。音が聞こえてプライベートが、寝ている傍らでお膳を広げなければならぬといった事情はさておいて、重複しないような機能をまとめたり、つなげる空間とその役割を想定しておくことで、有効に、また、多様に暮らしを展開できると考える。

ここでは道路際に沿うように玄関、前室と続き、茶の間を囲う。茶の間には大きめの掘りごたつと壁のへこみにTVが置かれているのみで、障子を開放すると前室の収納がサイドボードとなり、床の間のように壺や絵を飾るスペースとなる。テラスへも折り戸のガラス戸と引き込み障子で視覚的にあるいは空間として伸縮させることができる。発想を転換し、限定した道具を使って住宅を自由に気軽に使いこなすことができれば、また新たな視点が見えてくる。



図—2.4 茶の間を中心に展開する



写真—2.4 茶の間の建具を開放す  
写真/藤塚光政



## 2・5 あいまいな空間——東が丘の住まい

住まいとは、機能を整理して能率よく合理的に配分していくというよりは、日の当たる縁側で虫干ししながら犬とたわむれ、子供が泣き叫んだりぐずったりしている傍らで暫しあやしながら新聞を読むなど、いくつかの行為やそれに伴う状況が重なり合うことが日常の暮らしであり、住まいの光景である。家事が断片的にはあってもとりとめもなく続き、それでいてあまり深刻にならないでいられるのは、そんな家庭の、住まいのもつ曖昧さによるのだろうか。つくる、たべる、身づくろいする、眠る、整理する、などといった機能を満たす場をつくり分けていく一方で、それらをどのように分けないかがテーマとなる。階段や廊下など移動の空間はそうしたスペースの分化によって生まれるもので、人や物を運ぶと同時に光や風も運び、分断しがちな空間を音を緩衝させながら視覚的につないで再編するものでもある。移動しながら、モノや仕事を片づけ外の景色をふと目にして気持ちを切り替える。雲行きによっては洗濯物をとりに行き、日だまりのなかでうすくまる。

ここでは、厨房と食堂の間にホールをはさみ、簡単な食事ができるテーブルを張り出す。家族の行動を掌握しながら家事をし、家族も通りすがりにちよつと立ち寄って会話をし、流れるばかりでなく、少しスピードを落とすとしてよどむような空間がそこにある。

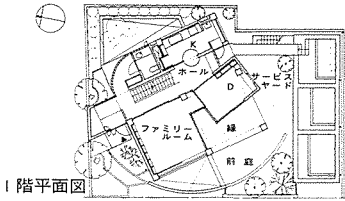


図-2.5 人の流れを止めよどみをつくるホール



写真-2.5 厨房と食堂の間のホールにはみ出すテーブル

## 2・6 空間をイメージする一言——東が丘の住まい

「朝食は朝日の当たる所で」という一言から設計が始まることもある。一日を太陽に祝福されて始めたいという願望はともわかりやすい。鈴木博之の「夢のすむ家」の中で、都市は西に向かって延びてゆくものだ」という説を読んだことがある。「人は植物と同じように太陽に向かって生きたい」という本能から、朝は朝日に向かって仕事に出掛け、夜は夕日の沈む方向に帰宅したい」のだそうだ。

このことは先に述べたことと共通して面白い。太陽のエネルギーを受けて、家族が忙しい一時顔を合わせ、言葉を交わす。和やかな情景が目に見えてくるし、一日一日、季節や天候による違いを感じる中で食事の支度は、毎日新鮮にし、そして身支度への情報を与えてくれる。食堂の位置が方位と敷地環境によりおおよそ決まると、それに関連して厨房や出入口、動線などを組み立ててゆき、案外このことが全体の構成を左右するポイントとなる。

ここでは家事をする主婦の位置(厨房になるのだが)を家の中心に置きたいということから始まった。接客空間と家族のスペース、プライベートな個室という三つのゾーンを地下、地上階、二階と重ね、厨房をその中心の地上階に置く。食堂はここでも朝日を受ける位置となる(もつとも住宅の場合、西日を受けて東南に開くことになるので庭との続きでこのような配置になることが多いのだが)。



写真-2.6-1 食堂を南に向けて回転する

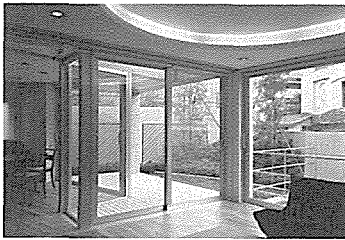


写真-2.6-2 食堂と家族室の間に深く貫入するテラス

## 2・7 家族と私——赤松公園の住まい

住まいが家族のアイデンティティを意識し、多様な個としての生き方を映し、独自の時をつくる場として捉えられ始めているとの想いがある。仕事場や生産性のある空間を併用するという機能的な面より、個としての意志や表現を模索する場が暮らしの中につくられ始めている。

ここでは、定年を期に老後へ備えて娘夫婦と一つ屋根の下に住むことを考えて計画は始まった。といっても厨房も玄関も別の隣居である。父と娘とお嬢さんは英仏独の文学者という立場上、独立した書斎を求め、可能な限りの空間を得るためトリトリの配分を模索する。その結果一、二階を親のゾーン、地下と三階を子のゾーンとし、四つの個室を四層重ね、それぞれの個室へ直接アクセスできるように出入口を設けて繋ぎを持つ。

近年、岐阜県萩原町の「益田造り」に触れる機会があった。暗くプライバシーがない、起居様式が合わないとの理由から次第に減少しているようだが、よくみると現在都市住居が抱える問題解決のヒントがあつて面白い。例えば狭さを補うために座式スタイルが見直され、空間の性質を特定せずに合わせられるよう引戸で仕切り、家族が孤立しないようルーズに繋げる。厳格なヒエラルキーの元に空間が配列されている一方、各室から庭や土間などを通じて直接外部とアクセスし、情報を仕入れ、コミュニケーションしている、と勝手に解釈し想像する。

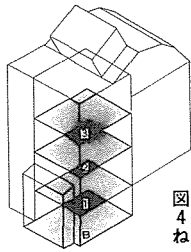


図-2.7-1 4つの室を4層に重ねる

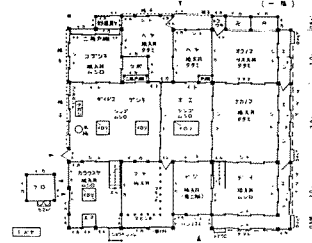


図-2.7-2 益田の村方の平面図 青木正次家

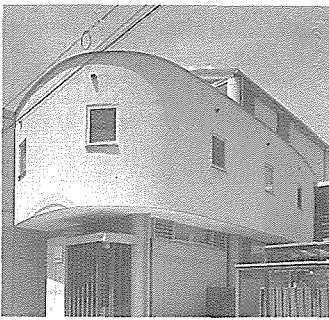
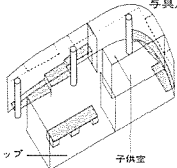


写真 / 新建築写真部



ワークショップ 子供室

図-2.8、写真-2.8 Rの壁の内側に包んだワークショップと子供室

計画をしていて、御主人がカルテを整理し奥さんが帳簿をつけるといったワークショップが、家族室に近いものであるということを理解するのに少々時間がかかった。食堂は若い世代のテリトリーであっても、同居している両親と夕食を共にする共有の空間であり、茶室は接客の場、遊びの空間である。アールの壁でふっくらと包み、やや光を抑えた空間の中に、ワークショップと続けて子供室を提案すると大変喜ばれたのは、そんな家族関係にもより、親子の距離が自然にうまくとれるような計画と感じたのであろう。

図-2.9 アトリエと屋外階段が桜並木へせり出している

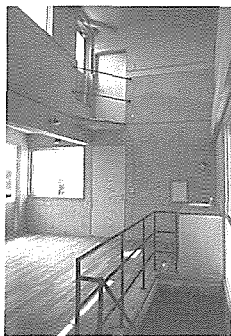
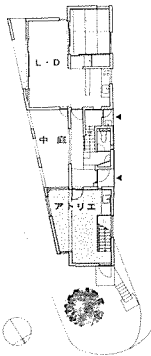
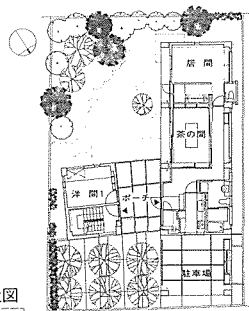


写真-2.9 茫洋と広がるアトリエ内観



住まいに併設した仕事場の良い点は、仕事と日常の暮らしがスムーズに繋がり、人生観や生活のリズムを相互に調整しながら創作していくことができることである。だが一方で、仕事場としては生活感を排除し、気持を切り替えて緊張感のある場をつくることも必要である。特に外から訪れた人にとって、暮らしの臭いや気配は、仕事のイメージにギャップを与え違和感となることもある。見えなくても聞こえなくても空気で伝わってしまうものである。そこでこの計画では、真ん中のブロックに玄関と水廻りを配置し、左右にアトリエと住まいのゾーンを振り分けて距離をとる。アトリエのゾーンはアプローチの方へ突き出し、更に直接外に通じる屋外階段を用意する。この階段は外部から直接アクセスできるという機能よりも、都市へ、社会へ、仕事場としての意志を示すための象徴的な記号としてより有用である。住まいをタイトに機能的に納めているのと対照的に、アトリエ内部の空間は、二層に吹き抜け、地下の書庫にも繋いで、遊びのある茫洋とした空間とする。

旧配置図



断面図

図-2.10.A 親の位置は変えず、子世帯の住居を2階に

次に、茶の間を通らない裏の動線が重要であると考えたのは、具合が悪くなつた時に一人寝室から来客に気付かれずに行動できるようにという配慮からである。ふだんは引き込み式の襖を開いて広々と使い、季節や気分に合わせてしつらえる。引戸を多用しているのは、こうした使い方に対応できるばかりでなく、開いている時におさまりよく美しいからで、縁側から庭への流れをさりげなくつくつてもくれる。空間を細かく仕切らない、床のレベル差を無くす、足元を明るくするといったことは、歩行が困難にならないための予防であり、また困難になつた時に人手に頼らず自分で行動できるよう計画しておきたいと考えたからである。

2・8 ワークショップ——押木田の診療所十住まい

診療所のある住宅に両親と同居する主婦のスケジュールを聞いたところ、朝五時に起床して、夜一時まで予定がいっぱいであった。朝は家族の起床時間に合わせ、昼は診療の合間に御主人と、夕食は両親も一緒に子供たちと先におすすめ、診療の終わる時間に合わせて再び食事の支度をすすませ、家事に加え診療所の事務や雑事もこなしている。職住近接ゆえに両立でき、それゆえに過密さを増すそんな暮らしの中で家事をしながら家族を見守り、子供たちがテレビを見たり、勉強する傍らで事務をとる。また夜遅く御主人が整理をしている時が唯一夫婦の語らいの時間にもなる。明確に時間や空間を分けて行なうというより、未分化のまま並行して幾つもの行為が繰り返される。それが家庭の情景であるようだ。

2・9 隠れ家としてのアトリエ——鎌倉山のアトリエ

イラストレーターの施主が小説に興味をもち、東京の自宅やアトリエから離れ、閑かに執筆活動に打ち込みたいと、この地を求めた。

住まいに併設した仕事場の良い点は、仕事と日常の暮らしがスムーズに繋がり、人生観や生活のリズムを相互に調整しながら創作していくことができることである。だが一方で、仕事場としては生活感を排除し、気持を切り替えて緊張感のある場をつくることも必要である。特に外から訪れた人にとって、暮らしの臭いや気配は、仕事のイメージにギャップを与え違和感となることもある。見えなくても聞こえなくても空気で伝わってしまうものである。そこでこの計画では、真ん中のブロックに玄関と水廻りを配置し、左右にアトリエと住まいのゾーンを振り分けて距離をとる。アトリエのゾーンはアプローチの方へ突き出し、更に直接外に通じる屋外階段を用意する。この階段は外部から直接アクセスできるという機能よりも、都市へ、社会へ、仕事場としての意志を示すための象徴的な記号としてより有用である。住まいをタイトに機能的に納めているのと対照的に、アトリエ内部の空間は、二層に吹き抜け、地下の書庫にも繋いで、遊びのある茫洋とした空間とする。

2・10・A 八四歳にして建て替える——羽沢の住まい

高齢化に備え起居様式を含めて住まいを見直すことになった。住棟配置は旧家屋を継承し、日の入り具合や風の抜け方、庭の眺めなど、身体で感じ記憶している環境を変えないようにする。厨房から表通りの様子が窺えるような配置は、近隣から家の中に一人孤立してしまわないように、というおばあさんの希望であった。

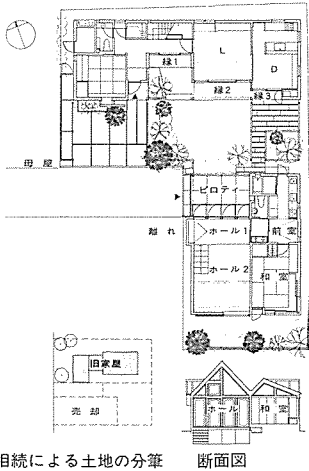
夫婦二人が四六時中同じ空間にいるのはしんどい。互いに束縛されずに人を招いたり、自由に過ごせるようにしたいということから、おじいさんの書斎を別棟へ設ける。靴を履き替え雨には濡れずに離れへ出掛けるのは、気持ちを切り替えるのにほど好い距離である。

## 2・10・B 終の住処——小金井の住まい

長年住み慣れた土地を分け、母と息子家族の住まいを同時に計画することになった。独り住まいの母の暮らしの場と、母屋の厨房・食堂をサービスマスタードを挟んで繋げ、双方から人の気配や賑いを感じ、行き来しやすい配置をとる。大谷石を敷き、小さな植え込みには食材や薬味となる樹を植える。洗濯物を干したり、庭の手入れの道具を広げたり、縁側のどかな光景が広がるであろう。

母の暮らしの場は、三・三m×九・六m、約一〇坪に小さく納めることにより、声楽家の主人とピアノ奏者の娘夫婦の稽古場をできるだけ大きく計画する。それぞれのスペースを二つに分けた小屋組に納めることで遮音し、独立させて異なった雰囲気をつくる。

物を整理し気持を切り替えることによって得られたこの空間は方丈記を思い出させる。物への執着を絶つことよって身も心も軽くし、そのかわりに細やかな環境の変化を受け止めていつも新鮮なまなざしを失わないでいられる。それまでに生きてきた道ので得たものを大切にしながら、なお、未来をどう生きるか。狭まりがちな行動範囲を、コンサートホールに訪れる人びとが新風を吹き込み補っていく。そんな仕掛けが気持ちを豊かにしてくれるであろう（昨年九月、最後の一時をこの空間で過ごせることを喜びながら療養生活を送り、施主は亡くなった。そしてホールに賛美歌が流れる中でお通夜は行なわれた）



相続による土地の分筆 断面図

図一 2.10.B 母の暮らしの場と音楽ホールとの空間の違い

## 2・11 インテリア・イコール建築・イコール街並み

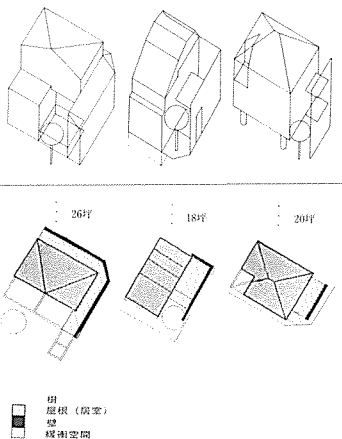
室内の空間をつくるために建築を計画することは同時に周辺の余白を計画することでもあり、内と外は一对のポジションとの関係でとらえたい。都市的な環境形成というマクロからの視点によって決められた容積や建ぺい率そして斜線制限などの形態規制に対して、どのような独自性のある提案をすることができるか。高層高密度化していく都市において唯一変わることなくオープンスペースとして残される道路の空間と、どのように関わることで住空間を豊かにすることができるのか、そうして建築やその余白のデザインは道空間のインテリアとなって街並みをつくれるか。二〇坪前後の小さな敷地でも一つ一つの建築が道空間との関係において自立し、魅力的な解決策を興じていくために四つの要素を提示してみる。

○屋根・居室を軽く包んで空へと結ぶ。スペースを限定され周囲をタイトにおさえられた時、中の力は残された自由な形を求めて夢を含んで空へふくらんでいく。

○壁・道から厚くガードする、あるいは光や風を取り入れながら視線はカットするなど、しつらえ方はさまざまにある。○緩衝空間・動線や水廻り、テラスや縁側などサブ的なゾーンを間に挟んでゆつくりとつなぐ。

○オープンスペース・樹陰が潤いをつくり視線を和らげる。ピロティはアイレベルを街並みへ開放し、床のレベル差が内部のプライバシーをつくる。

染原邸 梅里の住まい 東村山の住まい



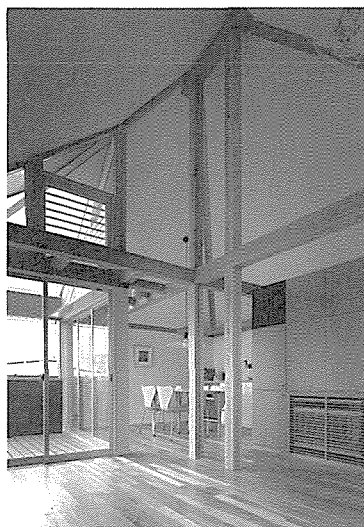
図一 2.11 インテリアと街をつなぐ建築の4要素

## 2・12 はらむ空間——東村山の住まい

一階を四本のコンクリートの丸柱で支えるピロティにして開放する。この二台の車を停めるためのスペースはもはや居間や寝室と同じように必要不可欠な生活のスペースである。光と風と視線をとおすよう、空間は開かず、車を移動させれば屋外の作業のための土間空間となる。なるべく使い方が制約されないような構造と表現を選ぶ。

このピロティが街並みから生活のスペースを持ち上げて切り放す。プライベートルームを二階に凝縮し、パブリックゾーンは三階にのびのびとつくる。軒高が抑えられても斜線制限にそった勾配で架けた屋根は、二本の大黒柱で支えられ上方へいっぱいにはらむ。空間とはスペースとボリュームによって表現されるものである。東南の一角をテラスにあてて欠き込み、ここへ光や眺めを集束させることにより、全体には落ち着いた空間をつくる。収納壁の裏側には厨房が隠されていて、家族皆が気軽に立ち働き、手伝えるように計画した。

これらをまとめて殻に閉じ込めて、上下を繋ぐ動線ゾーンと分ける。動線ゾーンはトップライトや大きな開口で透けるようにつくり、緩衝空間ゆえに身構えることなくのびやかな表現とする。



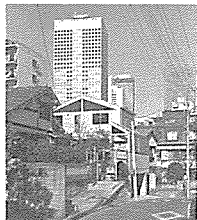
写真一 2.12 3階をいっぱいにはらむ空間  
写真/秋山実

2・13・A 都市のランドスケープ——桑原邸

敷地は新宿副都心の超高層群の膝元であり、曲がりくねった道沿いに中小マンションや商業ビル、戸建て住宅が混在している。景観としてみると圧倒的なボリュームでビル群が迫り押し寄せてくる感じがする。このような環境にありながら、なお庭付きの木造住宅にこだわることができたのは、パブルの少し前に計画したのが幸いした。

老夫婦は昔からの近隣関係や今も残る地元の商店街の中で暮らしを育み、盆栽や庭の手入れを楽しみつつ、アクティビティに富んだ都市景観のもとで、交通の便を生かしてフットワークも軽く行動している。パブル時代のビルラッシュに誘われて気が速くなるほどの借金を元必要以上の収入を得るよりも、自分たちの日常の暮らしにとって大切なことを再認識して残していくことである。また、都心部を高層化していく都市計画の方針は分からないではないが、どこも均質につくっていく必要はない。住み慣れた街を住みやすい街にしていきたいのは、住んでいる人びとの魅力とゆっくりとした時間である。

南東に張り出した地形を利用してアプローチをとり、玄関・前室と動線を伸ばして居室へ至る経路は、近さを補い気持ちよさを切り替える。続いて水廻りを巡らせ、主空間を取り囲むように二つの道路側に配置する。この緩衝空間は周辺からの視線をさけて採光し、風を抜く。そしてトップライトから漏れる明かりが角地としての表情をつくる。



写真／新建築写真部

写真-2.13.A-1 高層ビルが溢る背景

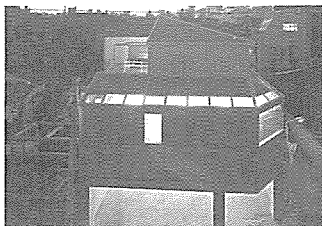


写真-2.13.A-2 トップライトの灯が角地の表情をつくる

2・13・B 都市に眠る小さな宇宙へ坪庭——梅里の住まい

敷地は幹線道路から五〇mほど入った古くからの住宅街の一隅にある。幅四m未満の狭い道路と幅二mほどの人道とに面し、境界を後退したり、元のままの塀が残ったり、でこぼこしている上に曲がりくねってなんとも猥雑な印象を与える。しかしその分、通り抜けの車は少なく最寄りの駅への道筋として人通りは賑やかである。一八坪の敷地の中で北側隣地と東側道路に対しては、境界ギリギリまで建物を寄せて厚いコンクリートのL字の壁で囲いガードする。壁の内側には緩衝空間として動線のための空間を配置する。大通りから歩いてくるとコーナーにあけたスリット越しに内部を垣間見、そして東に回って厚い壁にうがたれた穴をくぐり、一転して光を抑え落ち着いた閑かなポーチへと踏み入る。界限性を拒絶し一瞬にして気持ち切り替えるために壁は硬く、重たく、また無機質なコンクリートを選び、ポーチは軒下に落す影と目深に降ろした格子で視界を遮り、静かなイメージをつくる。少し目が慣れるころ、足元の植込みが明るく目に入り、穏やかな坪庭の光景にほっと心が緩む。建て込んだ家並みの間でこの坪庭は、往來の人と家人を結ぶのに十分なオープンスペースである。

階段ホールからスリット越しに通りを眺める視点は、元の住まいから引き継いでいるもので、猥雑な道筋ゆえに意外な景観を見せてくれる。



写真-2.13.B 大きな壁に穿たれた入口の穴

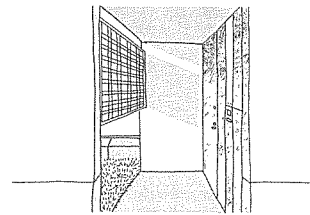


図-2.13.B 静謐なポーチ

2・14 一本の樹をめぐって——梅里の住まい

一本の樹と坪庭をめぐって、内部からの視線が交差することなくさまざまな楽しみよう計画した。

- 表通りからR.Cの壁をくぐりポーチに踏み込むと目深に降ろした格子の下より日を受けた植込みが目に映る。
- 玄関ホールから振り返ると正面の格子越しにほんやりと樹形を眺め、格子の下から再び見える緑。
- 茶の間に回るとポーチの格子とR.Cの壁を背景に、灯籠と共に全容を認め、また通りへと続く視線。
- 茶の間の床はG.L十八〇と少し高く、座っていて通りの人から見下ろされる心配はない。ポーチに訪れた人との視線を避けるため格子の高さや厚みを計画する。
- 地下ホールより天窗の光越しに梢を眺め樹影を楽しむ。○階段を登ると正面のテラス越しに空と共に広がりのある梢を見る。
- 洋間からは触るほど身近に感じる樹。

この東南の角に仕組んだ坪庭は、見えてはいても掘割や用水のように近付くことを許さない低くて分厚い混壇と、日除けや目隠しとなり四季を楽しむための一本の落葉の高木とで構成した。目が合えば軽く会釈をし、見ず知らずでも、良く咲きましたね、などと一声掛け合うようなふれあいのある街、一八坪の敷地という割には近隣の協力があって、スムーズに仕事が運んだのもこういう背景があったからであろう。

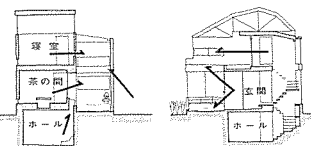


図-2.14 一本の樹をめぐる視点、内から外から

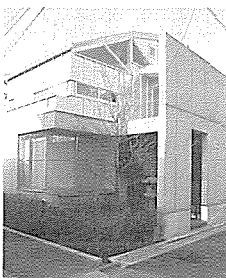


写真-2.14 東南の坪庭・高木と低く厚い混壇



写真-2.15  
ブリッジで屋上テラスをつなぐ

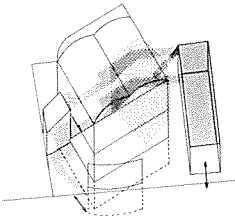


図-2.15 循環する動線

2・15 循環する経路——東が丘の住まい  
 ○家からの眺め——周囲を隣家に囲まれてみると、それらとまともに向き合うことを避け、視線をかわして、道や家々の間を渡る風や光を捉えたいと思う。都市や自然の環境を読み取り、手掛かりを求め、それとの関係において個を成り立たせると同時に、内からの要求により空間化する。

○回転——9m立方キューブを敷地の中で回転させて、光や風を巻き込むように引き入れる。建物周囲四面に四つの戶外空間（アプローチ、前庭、サービリアクセス、閑かな庭）を配置。隣地との間にそれぞれ距離を保つ、この「間」が内部空間を豊かにするための戶外空間として働くことを前提にする。

○循環する経路——アプローチから玄関を通ってホールへ、そして厨房からサービシアードへと抜ける。そのまま大小屋の脇から勝手口へ至り車庫から通りへ、もう一方は屋外階段で車庫の上の屋上庭園へと登り、Uターンして物干し場を兼ねたブリッジを渡ると二階ホールへ至る。右に洗濯などの水廻り、左に建物の芯となる吹抜けを見下ろし、突き当たりから玄関を覗いて階下へ、そして地下へと降りていく。人の動きは光や風を伴って建物の中へと導く。敷地を縦横無尽に駆け巡り回遊する動線は意外な視点を発見し、都市の隙間や余白に気付かせてもくれる。

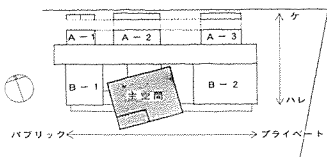


図-2.16.A-1  
6つの層と振れるブロック

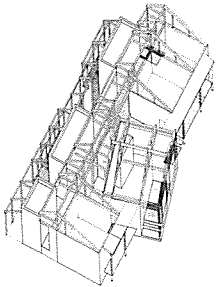


図-2.16.A-2  
構造のしくみを表すアクソメ

2・16・A 層を重ねる1——NH63ウベハウス宇部の住まい  
 自然や時の流れを写し出し、いつしか内から外へ溶け出す暮らし。薄く、軽く、透けて重なるエレメント。北から南へ、納戸や下屋（内玄関への土間・物干し場）、Aゾーン（内玄関・水廻り・納戸）、広い廊下（ユーティリティ・押し入れ）、Bゾーン（仏間・厨房と茶の間・寝室）、広縁やぬれ縁と、六層の「ケ」から「ハレ」の秩序をつくりながら重ねる。同時に西から東へ、パブリックからプライベートへ移行しながら配列する。

AゾーンはPCパネル造、BゾーンはPCパネルの臥梁を鉄骨造でつなぎ廊下と共に木造の小屋を架ける。PCパネルのブロック六つを独立させて、その間に内庭や坪庭を挿入し、光や風を引き込んで南北に視線を透し、内と外とを緩衝させながら交差し融合する。整然とした配列に投じた茶の間のわずかな振れは、さらに変化のある様相を醸し出す。分節した空間を渡るとき、それぞれが貫入し合う結びの場はPCブロックの打ち放しの外周面が向き合って内壁となり、外部空間に包まれたかのように感じる。下屋やぬれ縁は木造でつくり、軽やかに多様な表情を外観に加える。内と外を一線を引いて分けるのではなく、温度や湿度のゆるやかな変化が空気を換え、土間やスノコ貼りなどテクスチャの違いによってできるラフな雰囲気、暮らしを触発していくものとする。

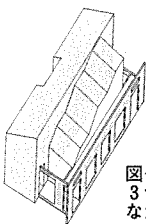


図-2.16.B  
3つの層と躍動的な波型屋根



写真-2.16.B パブリックゾーンより緑側、バックヤードを望む

2・16・B 層を重ねる2——小倉台の住まい  
 三つの波型の金属屋根——食堂、居間、客間、予備室といったパブリックゾーンを、三つの波状の屋根でダイナミックにつなぎ障子で軽く仕切る。

厚い左官の壁——閉ざされがちなプライベート、サブゾーンは動線とからめて小窓やスリット状の開口でつなぎ、熱気や涼風の通り道としてルートをつくる。

板貼りの壁柱——無防備なほど開放した主空間をガードし調整するのは、ぬれ縁を挟んだ壁柱であり、少し引き込んだ戸外の空間である。建物際に塀の役割を引き寄せることにより、庭を街へ開放し植栽のバックとして寡黙な背景をつくる。

建具を移動させることによってその場をしつらえ、断熱と通気を仕組んだ壁で囲い、天候や季節、時間の変化に対処して環境をつくる。人が体温を調節するために衣服はおるように、住まいもエレメントを薄く重ね、日の光を入れ、風を封じ、思いのまま使いこなすことができれば、実際の温度の変化のみならず、しつらうことにより得られる雰囲気やイメージが涼感やぬくもりを伝える。住み手の感性や能力が生かされるようエレメントを仕掛けておきたいと考える。

三つの層をシンメトリーに配置するが、躍動感のある波型の屋根がこの均衡を破り、安定した中にアクティヴィティを引き起す。

## 2・17 しまう 再び巡る——押木田の住まい

省エネルギーのための方策や産業廃棄物による公害を抑えてリサイクルを図るなど、限りある資源を大切に使い、自然との共存を考えて暮らしていく知恵が求められてきている。パッシブソーラーや高気密高断熱が広まる一方で、つくられた環境に満足するばかりでなく、環境の変化を楽しむ視点と楽しめるようなコンディションを自ら備えておきたいとも思う。便利なモノに慣らされそれらに埋もれて暮らすより、身軽になりたい。そんなことから機械化を抑えて、わずかな温度差によって起こる空気の対流や太陽のエネルギー、風などを利用しながら、四季折々、住む人が僅かな道具立てですつらえを変えて対応する計画をした。

そんな折、雨水利用を計画する機会を得た。都市部では清流を直接引き込むわけにはいかないので、水を生き物として扱っては手間がかかり、なかなか踏み切れないでいた。ここでは何かできる手立ては講じておきたいという気持ちと、非常時への備えに対する期待と少し余剰分を楽しもうという遊び心から出発した。採算や効率優先よりも、貯水槽などの設備機器を日常目にし意識することのないよう計画する。その結果、地中梁の二重ピットに水を溜め、ポンプアップしてトイレと水路に利用する。躊躇からスロープに沿って七段の水路に水を落し、潤いのあるアプローチをつくることになった。



写真—2.17 緩やかなアプローチ沿いの水路、樋より躊躇に流れ落ちる

写真/新建築写真部

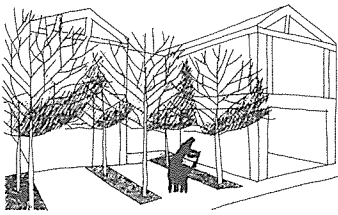
## 2・18 しまう——羽沢の住まい・東が丘の住まい

街並みを乱している原因に車庫と空調の室外機、各種メーターやゴミなどがある。生活のための機材が増え、敷地にゆとりがなく接道する長さも限られるため、表と裏の仕分けがなされず、すべて唯一の開放空間である道へ溢れ出てくるわけである。そうしたところは塀で囲うわけにもいかず、建物と建物の間は狭まってあまり意味がないまま残る。これらの原因を収めて、何事もなかったように表の顔をつくり、わずかに残る余白は繋いで光や風が通り、いざという時に住民同士助け合うことができる裏の道としてのネットワークが組めればと思う。

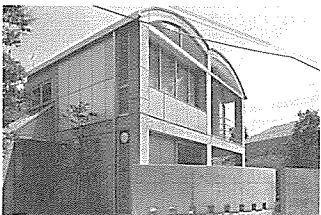
代田の住まいでは車庫用のピロティを庭へ続けておいたところ、奥のアパートで火災が起きた際、消防士さんがホースを担いで慌てて駆け抜けていったそうだ。

羽沢の住まいの道に続く前庭は、来客用の駐車場でありアプローチのためのオープンスペースである(周辺環境から考えて建設中の資材置場や駐車場を確保することも必要であった)。緑のポリウムを大きくとりたく六本の花みずきを植える。やがて成長して上空を梢が覆い木陰をつかって、眺めるためでも車を止めるためだけでもない実用的な楽しみも加わった間として息づいてほしい。

東が丘の住まいの玄関アプローチには植え込みをつくり開口部に合わせて照明とメーターを埋めこんだパネルをデザインする。



図—2.18 6本の花みずきが緑のスペースをつくる・羽沢



写真—2.18 ポーチに集まる表と裏・東が丘

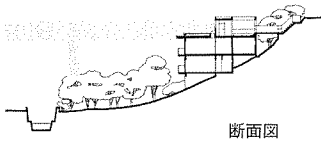
写真/N.P.A

## 2・19・A ランドスケープ——井上邸

敷地は南西に多摩川を望む斜面にある。用水路沿いの道から緩やかに登りはじめ、上の道路近くで四〇度の急傾斜となる。西側は多摩川を渡る第三京浜道路と接し、橋脚とのジョイント部からさしむ音が響いてくる。

建物の位置は施工の難しさを超え、眺望を求めて崖地を選ぶ。アクセスも用水路沿いの猥雑な街並みをさきけて、上の道からとることにする。急傾斜地にあえて居を構えることにしたのは以上の理由ばかりではない。下部の平坦な土地を菜園として利用し、その他は庭園として楽しむというよりも雑木林のまま、宅地に必要な分だけ木を切り開き、建物をコンパクトにまとめて埋め、できるだけ景観を乱さずにおくためである。

上の道から建物が緑に埋まる斜面を見てステップを下りブリッジを渡ると、コンクリートの飛梁で囲まれたテラスに降りる。正面の額縁として切り取られた開口に多摩川を、そして夜には第三京浜道路のインターチェンジのイルミネーションを望み、消えていく彼方を見据えて玄関へと至る。この固有のシーンを手に入れドラマティックに演出したアプローチを通して間に、都市から己の空間へ、社会から私生活へと緩やかに心を切り替えていく。第三京浜道路の騒音を避けるべく防音仕様としたが、後に室内楽の演奏会を企画するようになった時、むしろ中から発せられる音を心配せず楽しめることに気がつく。



図—2.19.A 40度の斜面上にさし込まれた箱



写真—2.19.A ブリッジの先に広がる眺望



## 2.19・B 桜並木がプロムナード——鎌倉山のアトリエ

鎌倉山の奥深く尾根に沿った桜並木を抜けると、施主が「一握りの海」を求めて手にいれた敷地が日射しを浴びて現われる。道はそこでふた手に分かれ、そのY字路に挟まれた敷地は不整形の傾斜地で、後ろに手付かずの裏山を背負い、前面は切り立った崖の下に新興住宅地を見据え、昔ながらの山あいに住宅が点在する所にある。

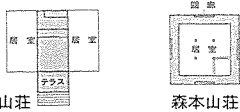
桜並木に対峙する建物と、自然の時の流れを映しだす一本の高木を植えたマウンドによって開放的に周辺に繋げるイメージは、桜のトンネルを抜けたときに決まった。それは、おそらく施主が幼いときを過ごした海辺の心象風景や、私の心に残る風景などと相通じるほど強いインパクトがある。周辺環境と敷地と建物からなる風景である。

敷地に立って周辺を眺め、今来た道を振り返ってみたいとその考えを再確認した。桜並木を計画地へのプロムナードとして据え、急な法面ゆえに残された緑地を前庭として取り込み、遠方に望む一握りの海を借景とする。

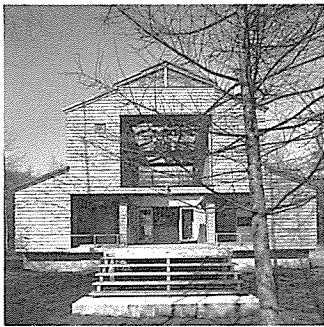
きわめて厳しい敷地条件も、少し遠くに視点を置いてみると壮大な構想が生まれる。一刻として同じ姿ではありえず、一方で規則正しく繰り返しもする自然の営みは、人と建築の間に生じる関係や日常の生活に似ている。自然を捉える手立てを樹としてあるいは水として考え、時々刻々と変化する様相を建築に映すこと。それは建築に無限の様相を与え可能性を引き起こす。



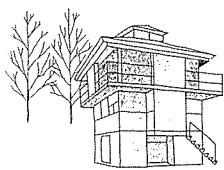
写真—2.19.B  
桜並木が敷地へのプロムナード



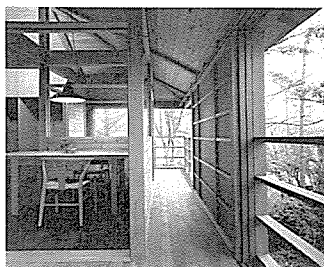
図—2.20-1  
深く引込み抜ける・周囲に巡らす内と外



写真—2.20-1  
写真／新建築写真部  
南北へ建物を抜けるテラス(山本山荘)



図—2.20-2 自然と対峙するフォルム



写真—2.20-2  
写真／秋山美  
回廊より梢を望む(森本山荘)

## 2.20 フォルム——山本山荘・森本山荘

セカンドハウスでの過ごし方や求めるものは住む人によって違いがある。しかし都市環境と比べると、二つのプロジェクトは地域は異なるがどこまでも続く森の中の一隅にあることで共通している。眺望が格別よいわけではなく、特に強い方向性を示すようなインパクトのある敷地環境でもない。方位の違いはあるがあまり意味を持たない。ただ圧倒されるばかりの広大な自然の中で人の存在は小さく、人が支配できるものに限界を感じさせられ、敷地を敷地境界線で仕切って所有するというより自然の一部をある時期借りて家を建て、やがて自然に帰るといった長いスパンが見えてくる。

そんな中で建築は裏も表もなく自然と対峙するようせめて凛としたフォルムをつくりたい。バランスのよいシンメトリーでしかも一筆書きで表現できるほど単純なフォルムは、自然の中で真近にみる大地のどこほこや樹形などの有機的なエレメントや、景観としてみた時の木々の規則的な繰り返し、そのどちらとも距離を置いて人工物であることを示す。強い風雨などの厳しい自然に対し、昆虫や鳥などが羽を畳んで小さくなるように、やり過ぎするためのフォルムでもある。このような気候風土に備え、利用しない間を考えて閉じ方が次のテーマとなり、同時に自然を満喫するためにどのよう開いていくか、これらは相反するが実は共通する要素の中にある。

山本山荘は両側の壁から雨戸をくり出し、上部はシャッターを降ろす。そうして階段と一部のテラスを残して建物を突き抜けるように内部に引き込んだ外部の空間を囲い閉じる。このテラスに向かって両側の室から視線が集まり、上空や前後の林へと抜けて戸外と連続する。こうしたつくり方は、グラントレベルにあつてどこからでもアクセスできるとき、外来者や外からの視線を掌握し、また、避けながら、安心して開放する方法である。そして用途が固定されないこの空間は、縁側やサンルームとなるほか、時には舞台稽古の場となり、大きなボリュームが、ブリッジやガラスの渡り廊下、そして各室とのつながりによって生かされる。

森本山荘は湖から立ち上る霧をよけ、人や車の通りを避けて少しでも日照や眺望を得ようと、一階の床を二・二mほど上げて高床とする。したがって入口へは外の階段で登りアクセスするので、玄関ドアの戸締まりさえ確認すれば安心していられる構造である。地上四・八m、二階のパブリックスペースは周囲に回廊を巡らし床面まで開放して樹上に浮かぶように計画する。深い軒の出を利用して回廊の外側に戸障子を入れ、閉じると外気を柔らげる断熱層とする。どちらも平面は方形をモチーフとして出発し、立面は安定感のある山形と、過半数であるがRC造の基礎で重心を下げて安定したフォルムからなる。

## 2・21 エレメント——富士の裾野の山荘

駅前や高層ビル街の中に小さな交番を設計していて、マクロな視点でみた時に、その規模からいって建築というよりもランドスケープの中のオブジェか照明器具のようなスケールであることに気がついた。特に交番は昼夜をとおして活動しており、街が眠りにつく夜間に投げかける暖かな明りは、人びとを安心させてくれる意味で重要な役割を果たしている。それは単に照度を満たすばかりではなく、明りの質や室内を反射板としてつくる明りの形をデザインすることでもある。

次に建築の中に入ってみると、その空間のイメージを表現するのにふさわしい素材の選択や納めかた、といったたくさんのエレメントの集積によって方向が示される。一つのエレメントをとってみても全体のイメージが見えてくるようでありたいと思う。

一つの建物の明りの計画について取り上げてみる。この山荘のコンセプトは人を迎える形を探そうとしたものである。都会では戸締まりに気をつけ、まず玄関で訪問者を選別しなくてはならないが、山荘では訪れる人といえは見知った人が立ち寄るくらいである。そんな時、日常の喧騒を避けてくつろぐ中で待つことを楽しみ、ヤアヤアと視線を合わせて手を振ってあいさつをかわす情景や、無人の建物に家族が到着した時にどのようなようでありたいかなどをイメージしながら設計を進めた。

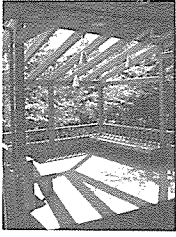


写真-2.21-1  
階段ホール(左)と食堂(右)の明り



写真-2.21-2  
階段ホール(左)と食堂(右)の明り

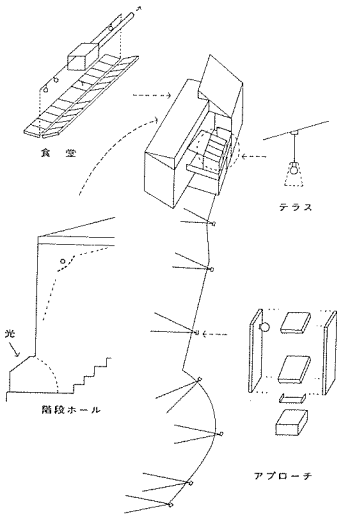


図-2.21 山荘の明りの計画

○道路から長いアプローチをとって建物を配置する。その間、小路に沿って向きを変える外灯から細く長い光のラインが低く流れる。コンクリートの土台の上に板を組み合わせた照明は、単純な仕組みで素朴に周辺環境に馴染む。○建物に囲まれていながら明るく日が差し込むテラスには人影が見え、迎えてくれる。夜間はパーゴラに吊るした小さな明りがいくつも集まり、ぼんやりと全体を照らす。外部用になるとヘビーデューティに構え、ごつくりがちなものをシンプルに軽くつくって散らす。○縦長のプロポーションの階段踊り場には、昼間は足元を明るく照らすよう出窓から採光を取り入れ、夜は上部に二つに折った障子を掛け渡して折り鶴のような明りをつくる。

○食堂の机の脚部や照明も同じような格子で展開する。ここでは照明の一部に換気扇を組み込みダクトを隠す。縦格子をY字に組んだ脚部もすべて建具屋の手による。空間に合わせて外光の取りかたを考え、光をデザインするのも夜間の照明を計画するのと同じこと。特別な技術やノウハウを駆使するというよりも、簡単に手に入る材料や身近な職人さんの技術を利用して考えてみる。プロダクトデザインとして一般化し、不特定多数を対象とするのとは違って、特殊ではあるがローテクな分、安価に計画し手に入れることもできる。

## 3 ケーススタディ

都市に住まう——個人の特殊解であっていいはずの住宅に對して、いつしか同時に同じパターンで繰り返されても成り立つ計画であって欲しいと考えるようになっていた(図3-1)。それは、周辺環境に依存することなく厳しい条件の中で自立した空間をつくることのできる、それと同じものが並んでも成り立つことであり、初めから集合住宅を計画するのは違うルートを取りながら結果として高密度な住宅地をつくることになり、目的は同じではないかと考えたからである。

羽沢の住まい(2・22、2・10、2・18参照)——このプロジェクトは、私有地でありながら街並みに開放するような形で、アプローチと駐車スペースを緑地として複合させながら計画した。交通量の多い環七際の曲がりくねった狭あい道路という環境の中で、建築と余白のつくり方はその敷地の中で完結するのではなく、開くことによって自立できるのではないかと考えたからである。建築をつくる工事手順、奥の庭の手入やメンテナンス、あるいは改造・増築

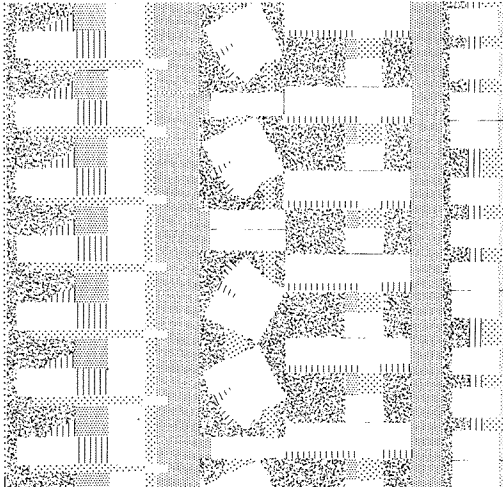


図-3-1  
個(実施作品)を細いだ戸建集合

への可能性などへの検討の結果でもある。

工事以前は、羽沢の住まいは数軒がセットバックする以外はせり出したままでこぼこした通りであった。同時期にもう一軒竣工したこともあって、その後一斉に境界を後退し、4mの道幅に整備されることになる。しかし、この一帯は、幹線道路や駅近くで便利なことから、土地の細分化が進み、高密度と共に道路はますます狭稚化している。

街並み再編——一九六八年(図3-3)の住宅地図と現況調査図(一九九五年)を比較してみることにする。変化の内容は環七が開通し、用水が埋められて道となり、地下鉄の計画に伴って教会が移動して公園となる。交差点付近の建物は高層化し、その他、住宅も建て替わると規模や階数が増えて中層化や集合住宅化している様子がわかる。また、地価高騰による相続対策か、宅地が小さな公園に変わったところもある。総合的にみれば、これらは交通の便が良くなる一方で住むための土地を手に入れることの困難さから起こる現象であって、その流れに対して新しい提案があるわけではない。しかし、一つ一つの建築の計画に際して住民が共有するコンセプトを持つとすると安全で魅力的な街並みとなって、やがて個の空間を豊かにするものとなって返ってくると思う。

そこで、これまで設計した住宅を道路付や方位などをなるべく尊重しながら既存の住宅地の中に置き換え、硬直化したところある街並みに刺激を与えてみる。さらに一四〇〇㎡ほどのエリアを対象として、場当たりのでできてしまった街並みの再編を検討することにした(図3-2、4、5、6)。対象として選んだエリアはもとは一敷地であったが一棟ずつ建築を重ねていくうちに接道されていない敷地や建物ができ、その一方で道に囲まれた離れ小島の落ち着かない宅地もある、という場所である。

公園住宅——計画案は隣接した公園を取り込んで計画する。現在、この公園は通り抜けできず囲まれているが、住宅地の塀を除くことによって、庭などの余白をつないで裏の動線をつくる。更に公園として小さく完結するのではな



図3-4 羽沢地区のケーススタディ

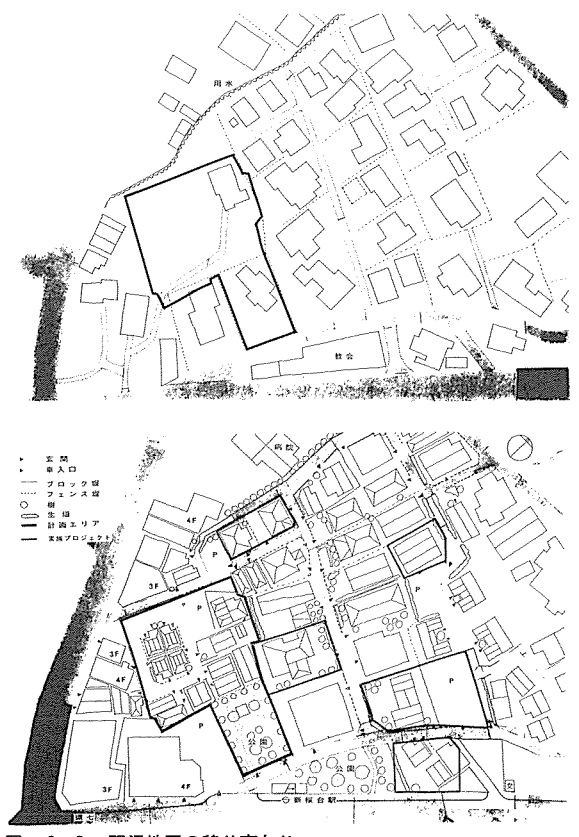
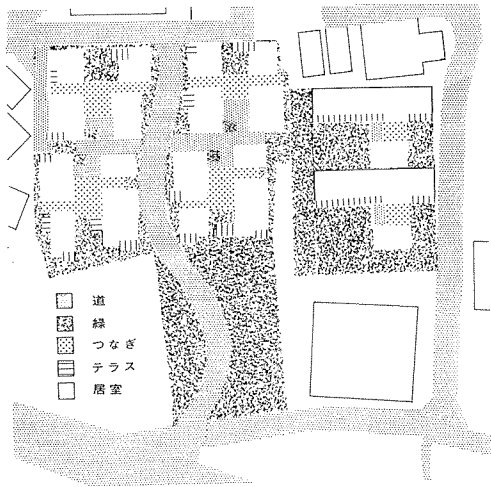


図3-3 羽沢地区の移り変わり (上:1968年住宅地図・下:1995年住宅地図に現状調査を加える)



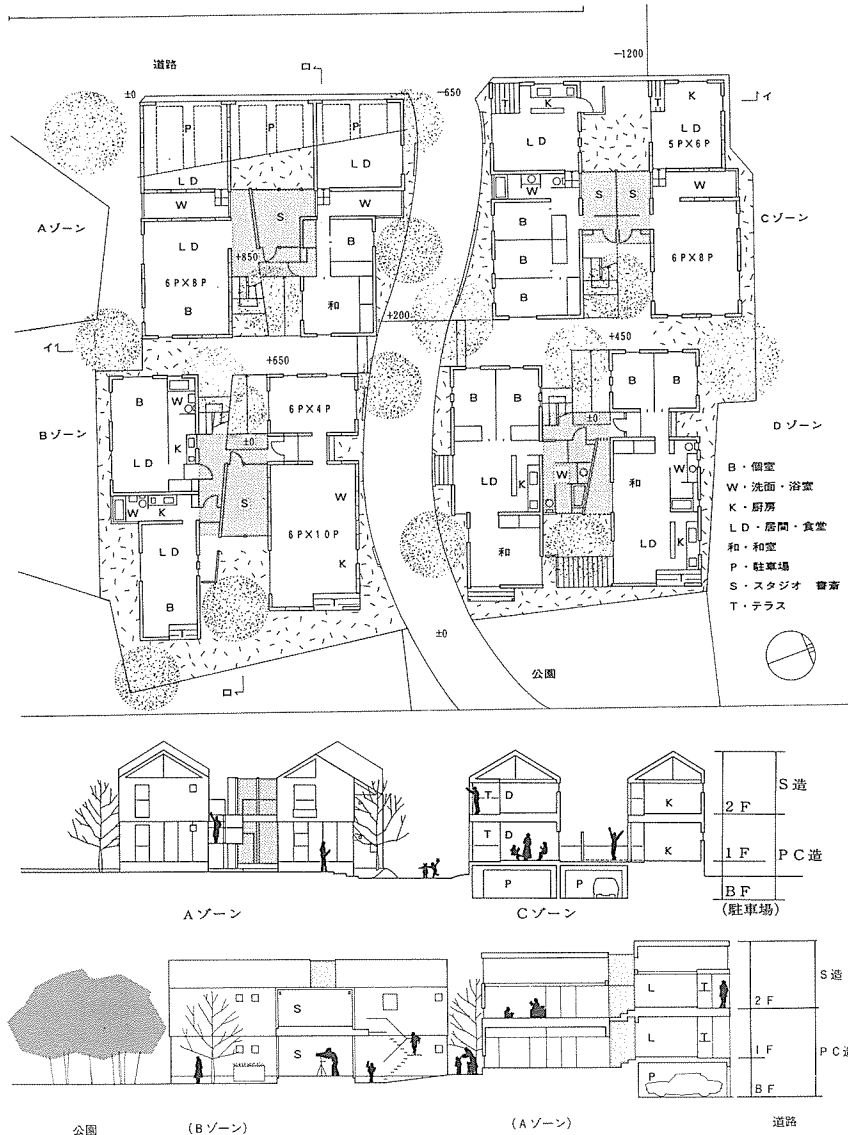
図3-5 羽沢地区のケーススタディ・PC(1F、BF)+S(2F)の混構造による集合住宅



図一 3-2 個から街並みへ・羽沢地区のケーススタディ

く、公園のような住宅地をつくるために自らを開放し、家並みをつくる。つまり、計画地を南北二つのブロックに分け、間の道を公園の中まで通し、通り抜けできる道とする。ただしスピードが上らないよう樹木を植えてカーブをもたせ、ゆったりとした景観をつくる。

再生への布石——集合住宅はウベ城山台で試みた工業化住宅と在来工法（今回はS造とする）を組み合わせ（2・1 PCパネル56頁参照）、軒高を抑えて配置計画の可能性を広げ、また、PC版構造の三〇畳一室空間を利用して将来の改造や手入れの可能性によって、生き続けられる建築を提案することにした。現状は二一世帯五人でこの密度は維持しつつ、車庫を半分くらいは確保するよう目標を立てた。



図一 3-6 羽沢地区のケーススタディ・PC(1F、BF)+S(2F)の混構造による集合住宅

#### 4 まとめ

小公園の可能性——小公園は現在のところきれいに植樹されているものの、囲われているため、案内通りすがりに人が訪れる風でもなくあまり人影がない。むしろ街並みに開くことによって、人の目が行き届いて賑やかになり、安心していられる場所として気軽に利用する機会を増やせると考えた。子供や老人、そしてペットをつれて憩い、通勤や通学、買い物への行き帰りと、さまざまな人びとが時間を問わず、それぞれの楽しみかたで日常的に親しめるような公園。それには囲いを開いて計画エリアの道とつなげ、住宅地の塀を除いた計画の延長線上にとらえる。公園がパブリックなものであればこそ、そういったことができるようになるかと思ふ。

概要——住宅は、隣接地が近隣商業で中層化する傾向にあるAとBゾーン南側ブロックに約四〇〇㎡のシングル用を一・二階合わせて八戸計画する。その他は約八〇㎡のファミリータイプで一・二階に分かれたフラットを計一二戸、総居住者数は六〇人を想定する。敷地西側の狭い道路を広げ、敷地とのレベル差一・二mを利用して車庫をとるようAとCゾーンの西側ブロックを半階あげて計画する。各ゾーンの南北住棟の間は共有スペースで動線や入口、そして各住居とは独立したプラスチックの空間を設け、アトリエやスタジオなど多目的に使える場所をつくる。各ゾーンは真中を抜けるカーブの道に合わせて軸をかえて連続し、整然とした一体感の中に細かなひだを織り込み、変化のある景観をつくる。思いがけないところで視線が抜けたり、出会ったり、人の気配を感じるようでありたい。

暮らした住宅のストック——戸外の空間へ生活がこぼれ出し、暮らしているエネルギーが感じられるような街並みに魅力を感じるのにはなぜなのか。そこには住む人が空間と関わることで積み重ねた時間や暮らしがあるからである。関わる人びとの個性やスタイルはその時代によってつくられる。そうして伝えられる何かがあつて空間にリアリティが出てくる。それにはまず建築が生き続ける状況をつくらなければならない。集合住宅であつても、住む人に合わせてつくり続けていけるような要素を盛り込み、一方で住み手がその時々スタイルに合った空間を求めて移り住むことができるような住宅のストックと、モノではなくスタイルにこだわる思想を持つことが望まれる。

環境への責任意識——自と他、内と外、私と公共(社会)の境をいかに仕切り、繋げ、つくるかの提案は、周辺環境に期待せず、せめて自立できる空間を計画していこうといういわば自衛のための手段であり、個からの出発であつた。しかし「環境への責任意識」という表現にはもう一步踏み込んで、住民同士の働きかけで何かの方向を示すことができる可能性がある。それは必ずしも法律で定めるのでも、すでにそこにあつたというだけの既得権を尊重しなくてはならないのでもない。一つ一つの住宅は、それぞれ思い思いに个性的であり、カオスであつていいのだが、少し遠くに視点を移したときに街並みとしてポジティブな形が見えてくるような計画をさしている。つまり個々の提案の中にそういった方向を示す芽を意識的に仕組んでいくには、自分の自由を守ることは他の自由を尊重することであるといった考えと、美意識と気持ちのゆとりを持つことで、時間をかけて形に育てていくものと考えられる。

個から街並みへ——そして今回公園を開放することから始まったこの計画のように、公園のための公園ではなく、公園のような住環境をつくるために、私有地からどのような提案を引き出すことができるか、公私の垣根をはずすことから始めなければならない。さまざまな視点から共有できる何かを築くこと、機能主義を邁進したモダニズムでも、表層や遊び、歴史回帰としてのポストモダンでもない。黙示録として埋め込んだ断片的な余白(緑影がつくりだす環境も含めて)がこだましながらゆつくりと返ってくるようでありたいと考える。

(ひらくら・なおこ/平倉直子建築設計事務所代表)

#### 〈参考文献〉

- 1 在塚礼子『老人・家族・住まい』 住まいの図書館出版局、一九九二年八月一〇日。
- 2 鈴木博之『夢のすむ家 20世紀をひらいた住宅』 平凡社、一九八九年八月一〇日。
- 3 はぎわら文庫編集委員会・編『秋原の着物と住まい』 岐阜県益田郡萩原町教育委員会、一九八二年一月三日。
- 4 有元利夫『日経ポケット・ギャラリ』 日本経済新聞社、一九九一年二月二二日。



物言わぬ学校——高山建築学校の二三年  
趙海光

貧乏がまぶしくくらいに輝いた一時期が確かにあって、それは一九六〇年代の末から七〇年代にかけてのことだったろうと思う。

黒人暴動があり、学生運動があった。千石イエスをはじめ、得体の知れない小さな神さまたちに率いられた小さなコミュニティが、あちらこちらに出現した。

建築の世界でも、貧しさを表現に転用してしまう、あからさまな建築群が現われた。山根鋭二のクラス城、フラードームの素人建設者たち、石山修武のコルゲートパイプ。セルフビルドによるそれらの建造物は、まことに野放図な快活さと明るさを持ち、どこかに笑いを隠し持っていた。

ちょうどそのころ、正確には一九七二年のことだけれど、飛騨の山の中に小さな建築の学校が生まれた。名前を高山建築学校という。

廃校になった小学校の校舎を借りて、夏の一か月間、二、三〇人ほどの学生たちが集まった。学生の数を、時には

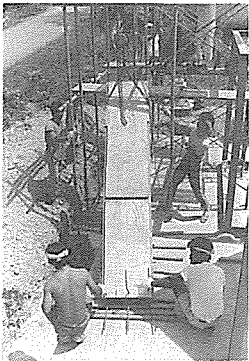
超えてしまうほどの講師たちもやってきた。おんぼろの木造校舎にふきだまった砂埃を頭から浴び、足の裏を真っ黒にしなが、建つことのない建築の絵を描き続け、議論を尽くした。

みんな、建築という言葉が嫌いで、口あたりの良い議論はひとつもなかった。最新の理論を語る者は軽蔑されてコソコソと逃げ帰った。

——それじゃ、おまえの言うそのモダンな理論を、自分でちゃんと生きてみせてくれ——建築への欲求不満を満帆にした講師たちのそんな罵声を聞きながら、これから建築の世界に踏み込んでいかななくてはならない学生たちの胸は、なんだかドキドキと高鳴ったのだ。

それから二三年間、学校は延々と続き、私自身もまた延々とこの学校の学生であり続けている。

高山建築学校は迷走を続けた。七〇年代には廃校を探して日本中を放浪した。秋田や山形の村々を渡り歩



校舎の自力建設の様子とその断片。(写真/杉全泰)

だの、建築の不思議な断片が林立している。その積石造の建築現場は、まるで中世の工事場みたいだ。これらの建造物は、作品ではない。建築ではない。高山建築学校は、否定に否定を重ねた。何かが生まれようとする度に、それを壊した。そしてそのことによって、ここは一時期、本当にすぐれた建築運動の場だった。どんな場面でも、一人であることが剥き出しにされたからだ。

物言わぬ学校には、無名の、物言わぬ建築家たちが集まっている。彼らは日本中に散開して、物言わぬ建築をつくり続けている。

(ちよう・うみひこ/建築家)

\*

「ひろば」へのご投稿をお待ちしております。「住」に関する提案から日頃お感じになっておられることまで、研究者・実務者から市民の皆さま方の忌憚のないご投稿をお待ちしております(採用分については薄謝進呈)。

原稿用紙(四〇〇字詰)三枚程度。原稿には住所、氏名、年齢、職業を御記入下さい。なお、内容を傷つけない範囲で一部手直しさせていただく場合がありますので、ご諒承下さい。

〈宛て先〉

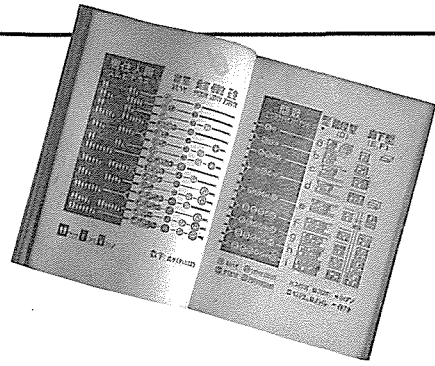
〒156 東京都世田谷区船橋4丁目29-8

財団法人住宅総合研究財団

すまいるん編集部「ひろば」係



## 横山 勝樹



「住居計画」は単なる設計の前段階という意味ではない。それは、必ずしもその時々において確立された理論に基づいて行なわれてきたのではなく、少数派の主張であったり、場合によっては痛烈な批判に曝されたりもしてきた。もちろん、ここでは「計画」の普遍性と体系化を目指して、今日において重要な位置づけを占めるに至った名著を誌面の限り取りあげたいと考えている。しかし、私は「計画」という言葉には、「慣習との闘い」という猛々しさと危うさが運命的につきまとうのではないかと思う。普遍性のために「住居計画」を中立化して、何と「闘って」いるのかを意識しなければ、その本来の意味は読みとれない。それ故、この解題も個々の著書の内容よりも、むしろその背景を中心に述べたいと思う。個々の著書と読者自身の接し方こそが大事だと考えるからである。また以上の考え方から、ここでは住居の設計・建設とその主張、住居の調査・研究のまとめ、住居にかかわる市民運動やユーザー参加の記録などをすべて「住居計画」として広く捉えることにしたい。

● 住居計画は、近代建築運動を抜きにして考えることはできない。しかし同時に、二度の大戦により、多くの一般市民の住居が失われたという現実が、新しい建築の潮流に勢いを与えたという事実も見逃せない。廃虚の前に立つ人びとにとって科学技術は、古い様式を乗り越え平和と繁栄をもたらす力であり、一つの手段であった。コルビュジェ『輝く都市都市はかくありたい』は、その理念を記した代表的著書である。宮脇『日本の住宅設計 作家と作品―その背景』や黒沢『近代・時代の中の住居 近代建築をもたらした46件の住宅』は、住宅建設の歴史を通して住居計画の展開を明らかにした好著であるが、やはり近代建築運動が全体を位置づける中心となる。またブードン『ペサック集合住宅』は、コルビュジェの建設した集合住宅を、後日、住み手の側から見た異色の一冊である。一方、同時代の日本の建築家の著書としては、池邊『すまい』が科学的に住居を考えることを一般向けに説き、吉阪『ある住居』が自邸の建設理念を小論として記していることが、それぞれに近代建築運動の受け取り方の違いも感じられ興味深い。

● 日本の近代化は、西洋的な生活様式や価値観の浸透と古い住宅形式との相克という特殊性もっていた。特に家における個の確立は、戦後民主主義の考え方と相まって、間取りのつくり方を住居計画の中心的課題として据え付けた。西山『これからのすまい』は、戦後日本の住居計画の原点といえるが、戦

〈住居計画の本〉基本図書リスト \*印は当図書室に未所蔵

・L・コルビュジェ著『輝く都市 都市はかくありたい』

一九四七年(坂倉準三訳、丸善、一九五六年)。

・西山卯三著『これからのすまい 住居の話』相模書

房、一九四七年。

・池邊陽著『すまい』岩波書店(岩波婦人叢書)、一九五

四年。

・吉阪隆正著『ある住居』相模書房、一九六〇年。

・S・シャマイエフ、C・アレキサンダー著『コミュニティとプライベート』一九六三年(岡田新一訳、鹿島

出版会、一九六七年)。

・西山卯三著『住宅計画』勁草書房、一九六七年。

・P・ブードン著『ル・コルビュジェ ペサック集合住

宅』一九六九年(山口知之ほか訳、鹿島出版会、一九

七六年)。

・鈴木成文著『建築計画学』集合住宅 住戸 丸善、一

九七一年。

・O・ニューマン著『まもりやすい住空間 都市設計に

よる犯罪防止』一九七二年(湯川利和ほか訳、鹿島出

版会、一九七六年)。

・E・グランジャン著『住居と人間 住居における人間

工学的基礎データ』一九七三年(洪悦郎ほか訳、人間

と技術社、一九七八年)。

・鈴木成文ほか著『建築計画学』集合住宅 住区 丸善、

一九七四年。

・宮脇檀編著『日本の住宅設計 作家と作品―その背景』

彰国社、一九七六年。

・GLC編『低層集合住宅のレイアウト』一九七八年(延

藤安弘監訳、鹿島出版会、一九八〇年)。

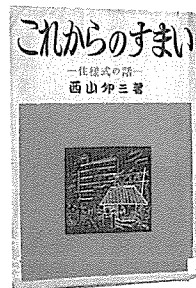
・D・ハイデン著『家事大革命 アメリカの住宅、近隣、

都市におけるフェミニニスト・デザインの歴史』一九八

一年(野口美智子ほか訳、勁草書房、一九八五年)。

・R・J・ローレンス著『ヨーロッパの住居計画理論』

## 住居計画の本



西山卯三著  
『これからのすまい』  
の表紙と内容。  
(相模書房、1947)

大きな影響を与えた。さらに、ウエイツほか『コミュニティ・アーキテクチャ 居住環境の静かな革命』や神谷ほか『コーポラティブ・ハウジング』は、居住者の直接参加による住宅建設やコミュニティづくりについての記録である。また佐藤『集合住宅団地の変遷 東京の公共住宅とまちづくり』は、戦前戦後につくられた公共住宅のコミュニティの今後を考える上で示唆的である。

この他、グランジャン『住居と人間 住居における人間工学的基礎データ』のように住宅を居住性能として表そうとする考え方、ハイデン『家事大革命 アメリカの住宅、近隣、都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』のようにフェミニズムから見た住居なども、住居計画を考える上では重要な視点であった。

前の居住調査に基づいて庶民の立場にたった新しい住宅のあるべき姿を説いている。戦前の生活様式を一掃するために、当時の調査研究のまとめは強い威力を発揮したと思われる。その後の庶民住宅は、調査研究と並行して公共住宅の設計・建設が進められることで変化していった。その経緯は、西山『住宅計画』や鈴木『建築計画学6 集合住宅 住戸』から知ることができる。

一方、近代以降の住居計画に対する最も大きな批判と反省は、それがコミュニティの形成に何ら寄与せず、むしろ阻害をしているという点であった。シャマイエフほか『コミュニティとプライバシー』やニューマン『まもりやすい住空間 都市設計による犯罪防止』には、コミュニティの必要性和その計画理論が述べられている。鈴木ほか『建築計画学5 集合住宅 街区』は、その調査研究として先駆的であり、GLC編『低層集合住宅のレイアウト』は、コミュニティ形成に配慮した日本のタウンハウス設計にも

● 住居計画は、個別性や地域性といった概念をも取り入れて進展してきた。その経緯は鈴木『住まいの計画 住まいの文化 鈴木成文住居論集』に詳しい。日本建築学会編『集合住宅計画研究史』は、日本における住居計画研究の到達点を、ローレンス『ヨーロッパの住居計画理論』やコフロン『ハウジング・デザイン』は、ヨーロッパにおける住居計画研究の到達点をそれぞれ総覧するものと考えられる。しかし、すべてが充足したかと思え、住居計画が関わるべき相手が明確にされない今日、なぜ研究という手段がなおも必要なのか。その答えを見いだすことができるか否かが、ここで取り上げた著書との重要な接し方ではないかと私は思う。

(よこやま・かつき) 当財団図書情報委員  
女子美術短期大学造形科助教授

一九八七年(鈴木成文監訳、丸善、一九九二年)。  
・N・ウエイツ、C・ネヴィット著『コミュニティ・アーキテクチャ 居住環境の静かな革命』一九八七年(塩崎賢明訳、都市文化社、一九九二年)。

・鈴木成文著『住まいの計画 住まいの文化 鈴木成文住居論集』彰国社、一九八八年。  
・神谷宏治ほか著『コーポラティブ・ハウジング』鹿島出版会、一九八八年。  
・佐藤滋著『集合住宅団地の変遷 東京の公共住宅とまちづくり』鹿島出版会、一九八九年。  
・日本建築学会編『集合住宅計画研究史』日本建築学会、一九八九年。

・黒沢隆著『近代・時代のなかの住居 近代建築をもたらした46件の住宅』リクルート出版、一九九〇年。  
・I・コフロン、P・フォーセット著『ハウジング・デザイン』一九九一年(湯川利和監訳、鹿島出版会、一九九四年)。

## ●新シリーズの開始にあたって／塚礼子

△図書室だより』のページに、本号から「住について考えるための基本図書」を語るシリーズを始める。もともとこの図書室の蔵書は、図書委員の専門性を生かして選定し、委員の交代によって蔵書の幅を拡げていこうという方針で形づくられてきた。いわば、人々をもとにしたやり方である。個性ある蔵書群には、しかし、基本的な図書が抜け落ちてはいないか。そんな心配から、図書委員会で基本図書リストづくりは始まった。

基本図書とは何か、など論じつつ選定作業を進めるうち、分野による性格の違いもさることながら、基本図書についても、選定した人々の視点の色濃く出るものであることがよくわかってきた。リストは署名入りということになる。

この図書室の蔵書の特徴も踏まえたゆるやかな全体像と分野構成の想定をもとに、順次、担当委員がそれぞれの文脈で分野を切り取り、そこに位置づけながら基本図書を語るようになっていく。

(ありづか・れいこ) 当財団図書情報委員会委員長、  
埼玉大学教育学部家政学科助教授

第16回 住総研シンポジウム

住宅設計の現在——設計者は何を考えているか

日時 七月二日(金) 九・三〇〜一七・〇〇  
場所 建築会館ホール(東京都港区芝5丁目26-20)

講演

1 住居設計論——光・スケール・場所性  
室伏次郎(建築家、神奈川大学工学部教授)

2 住まいを巡るつなぎのデザイン——時をつなぎ、暮らしをつなぎ、空間をつなぎ  
平倉直子(平倉直子建築設計事務所代表)

3 住まいの設計トランプ集——Aシステム対Bシステム  
中埜 博(びるだあず・やあど主宰)

4 日本の現代住宅設計に何が見えるか  
植田 実(住まいの図書館出版局編集長)

討論

パネリスト 植田 実(前掲)

太田邦夫(東洋大学工学部教授)

隈 研吾(隈研吾建築都市設計事務所社長)

見城美枝子(エッセイスト)

司会 西 和夫(神奈川大学教授) 副司会 小澤朝江(湘北短期大学専任講師)

参加費 一般 三〇〇〇円・学生 一〇〇〇円、当日徴収  
申し込み方法

はがきに、氏名(ふりがな)、性別、年齢、現住所、勤務先学校学部学科名、職位(学年)、連絡先電話番号をご記入の上、七月八日(月)までに、当財団まで郵送して下さい。先着順にて、定員二〇〇名になり次第、締め切らせていただきます。定員に達した場合は、お断りの方のみご連絡いたします。

〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8

電話 03-3484-5381 「シンポジウム」担当まで。

講演のタイトル、パネリスト等に変更が生じる場合もございます。

第19回高齢者フォーラム  
開催のお知らせ

在宅医療とハウスアダプテーション——公的介護保険制度の導入をめぐる——と題して川崎幸病院副院長の杉山孝博氏と近森リハビリテーション病院(高知市)院長の石川誠氏にご講演いただきます。

日時 七月二日(火) 一八・三〇〜二二・三〇  
場所 せたがや女性センター「らぶらぶ」11階

住総研 刊行物のご案内

お問い合わせは当財団まで。

●印の研究論文を購入ご希望の方は、丸善出版事業部 03-5684-5571へお申し込み下さい。

研究論文 新刊

●研究 No.9315

建築・医療・保健・福祉の連携による住宅改造のシステム化に関する研究(1)  
長倉康彦

高齢者・障害者が住み慣れた住宅に自立的に住み続けるための建築・医療・保健・福祉の連携による住宅改造システムのあり方を探るために、各専門機関や専門職の現状での取り組みを全国的に調査し、その中から先進的な事例について取り上げて今後に向けての検討を行なっています。

A5判 53ページ 1854円

●住総研「研究年報 No.22」

一九九四年度の助成研究二六件の「研究報告要旨・梗概」をはじめ、一九九五年七月

次号予告

'96年秋号 一〇月一日発行

特集 英国人のみた日本のハウジング

〈ミニシンポジウム〉

鏡に映った日英のハウジング

岩下繁昭(サセックス大学客員研究員)

菊池成朋(マンチェスター大学客員研究員)

司会 野城智也(武蔵工業大学建築学科助教授)

〈論文〉

日本のプレハブ住宅から得た教訓

ステイヴン・クローマク(アラップ)

日本の住宅産業における技術革新に学ぶ

デビッド・ギャン(サセックス大学)

日英住宅寿命比較

ジム・マイケル(DLEコンサルタンシー)

〈すまいのテクノロジ〉

ぼくの日本趣味

ニック・ランドール(ブルクス・ランドール・アソシエイツ)

〈私のすまいるん〉

日本公共住宅頑張れ

イアン・カフーン(ハンバーサイド大学)

'96住総研シンポジウム

住宅設計の現在 設計者は何を考えているか

七月二日に開催いたしますシンポジウムの講演および討論の記録を掲載いたします。内容はこのページ上段のご案内を参照下さい。

〈すまい再発見〉

パークヒル

黒野弘靖(新潟大学工学部建築学科)

他

タイトルは仮題 執筆者は変わることがあります。

## 助成研究に応募多数——幅広い内容の二二件が選出

当財団で毎年行なっております研究助成に、今年も九三件のご応募をいただきました。四月の研究運営委員会で、社会性や学際性に富む二二件の研究課題が選考されました。六月の理事会での正式決定を待って、詳細をご報告いたします。

## 研究運営委員の交替について

当財団の活動の一つである、研究助成に力添えいただいております委員の一部が交替いたしました。現在は次の方々をお願いしています。

(50音順) \*印は委員長、\*\*印は新任

坂本 功\*\*

(東京大学工学部建築学科教授)

住田 昌一\*

(福山女子短期大学学長)

高見澤 邦郎

(東京都立大学工学部建築学科教授)

西 和夫

(神奈川県立大学工学部建築学科教授)

服部 岑生\*\*

(千葉大学工学部建築学科教授)

峰政 克義

(清水建設㈱情報システム本部本部長)

村上 周二

(東京大学生産技術研究所教授)

## ◎アジア住宅交流フォーラムが活動中

近年世界の中でめざましく地位を高めてつある、近隣であるアジア諸国の住宅・都市・建築について、既成の認識を疑い、あらたな地平をめざすことを理念として、標記のフォーラムが昨年三月に発足し、すでに五回のフォーラムを開催するなど活動を行なっています。

委員長

村松 伸

(東京大学生産技術研究所助手)

委員

五十嵐 太郎

(東京大学大学院建築学専攻院生)

大田 省一

(東京大学大学院建築学専攻院生)

大月 敏雄

(横浜国立大学工学部建設学科助手)

木下 光

(関西大学工学部建築学科助手)

牧 紀男

(京都大学大学院環境地球工学専攻院生)

以上の方々にコアメンバーとして活動していただいています。皆様のご協力、ご支援をお願いいたします。

開催の第15回住総研シンポのための三編の委託論文、住総研委員会活動報告などを収録。わが国の住研究の水準を示すものとして、国内はもちろん、海外でも好評をいただいております。

A4判400ページ 定価4635円



○高齢者のすまいづくり通信22号発行

第18回フォーラムの記録として、京都市上京区春日住民福祉協議会の高瀬博章氏から住民自治によるまちづくりとハウスメーカー・板橋区衛生管理課の国光登志子氏からハウスメーカー・在宅ケアのシステム化に向けての課題が報告されています。

B5判24ページ 無料

●かわる住宅・まちづくり

——30代の住宅トピック

編著者 住総研住宅トピック委員会  
当財団で活動していた住宅トピック委員会の討論内容が一冊の本になりました。

経済成長の鈍化・高齢化社会の到来などの環境変化を住宅・まちづくりの転換点としてとらえ、行政・メーカー・設計・研究等に身を置く30代の若手が、フレッシュな眼差しで新しい住宅政策のパラダイム、新しい住宅・市街地像を描いています。

A5判380ページ 定価2884円

## 「すまいごろん」のご購読について

●発刊日は原則として、冬号一月一六日、春号四月一日、夏号六月一五日、秋号一〇月一日です。したがって、送付開始は、購読料受領後の最新号とさせていただきます。なお、購読手続きには約一週間かかりますので、お含みおき下さい。

●購読満了時にご通知いたしますので、引き続きご購読いただきますよう、お願い申し上げます。

●バックナンバーのお求めにもおこたえしております。ご希望の方は、あらかじめ在庫の有無、送料を左記財団まで、ご確認下さい。

購読料は次のとおりです。

一年間 二〇〇〇円(送料共)  
三年間 五〇〇〇円(送料共)

お支払い方法

●領収書は、郵便局の払込票兼受領証で代えさせていただきます。財団からは改めて発行いたしません。

●購読期間中の購読中止による購読料返金はいたしません。

「すまいごろん」は次の店頭でも販売しておりますので、ご利用ください(店頭での予約購読の受け付けはしておりません)。

●建築学会資料頒布所 港区芝5-26-20

電話(03)34561205

●南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21

電話(03)32911338

(財)住宅総合研究財団

〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8

電話(03)48415388 FAX(03)48415794

## アメリカの草の根の住居に見たもの

オウジュール・デュイ / USA 特集・1967

文 益子 義弘

書棚の片隅に一九六七年のフランスの建築誌「オウジュール・デュイ」(au jour d'hui)がある。すでにその製本もかなり傷んで、ページもバラバラになりかけている。かつて繰り返しページをめくった痕跡が、そのほつれた本のかたちに残っている。

六七年は、私がまだ大学を出て間もない頃である。その頃の外国雑誌はその国での発行よりかなり遅れて日本に入って来ていたから、それを手にしたのはしばらく後のことだろう。もちろん素寒貧だったから、たかが雑誌とはいえ少々無理をして、でも絶対にそれを欲しいと思った。

その号には巻頭にルイス・カーン設計のソーク研究所が載っている。その記事のあとにその号の特集としてアメリカの草の根をなす沢山の住宅が掲載されていた。

それは今なおキラキラしている。新鮮な場所の感覚と空間の像がそこにある。多分、今も感じるその強い印象は、私の世代の建築についての逡巡とその時代の状態において、それは目の鱗を剥がされる思いのする事件であったことによるのだろう。

● ライトやミース、そしてコルビュジェやアルトを頂点として、眩しい建築世界はその頃まだ海のむこうにあった。その眩しさは、建築以前の、あるいは建築が当然に基盤とするところの、社会や経済の圧倒的な豊かさの水準の差異を原因ともしていたことは言うまでもない。特に建築を学び始めたその頃の私

たちにとって、強い逆光の中ではものすべてが平盤なシルエットに見えるのと同じように、豊かさという眩しい光に逆照されたその建築世界は、内容や細部の違いを越えて、とりあえずはその総体が「正しい」ものとして目に映った。特に住居という生活の様態やレベルがもろに反映される対象にその思いは著しく、本来は十分な空間の量を背景として成り立っていた当時主流をなす建築家たちの数々の名作や事例の質を、自分たちの現実との結び目をおよそ実感として持てぬまみにせよ、ひたすらにコピーすることを良しとしていた。

そのオウジュール・デュイ誌の特集に集められた五〇余に及ぶ住居は、そんな巨匠たちを頂点とする作品や次第にそれらが教条化されつつあった建築のスタイルとは大いに違っていた。好ましい個々の場所の実像が次第にふくらんでひとつの生活世界をかたちづくるような、あるいは、ひとつひとつの場の感受性にまつわる心地の総体が住まいというかたちに結晶したもののようには思われた。

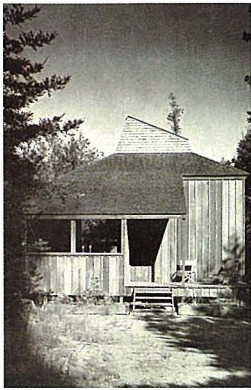
おそらく、そのことに光を当てた編集者の意図は、次第に生氣を失って形式化されてゆく建築のモダニズムに対する警鐘としての、新たな視点の解き起こしにあっただろう。いま時間というフィルターを通して冷静に振り返れば、それがその後の建築の潮流が変わるひとつのエポックにもなったと認められるのだけれども、その時に受けた私の衝撃と思いはそんな理性的なレベルとは無縁の、まこと

に現実的で個人的な解放の感覚に関わることである。それまでの偉大すぎる教条やそれと現実とのギャップに縛られて身動きならぬ状態から「ああ、こんなふうには身近な場を見据えていくことで新鮮な建築世界は拓けるのだ」というごく素朴な共感と、そこに多数集められた場所を感じ取る共通なテイスト(趣)にそれまで言葉や概念の世界で理解しようとしていたものとは別種の、建築やその場所のありように関わるもうひとつの普遍性の匂いを嗅ぎとったことである。

● そこに掲げられた数多くのすまいに共通する建築的なテイストは、「場所の感覚の保護」とでもいうようなものである。その構成は、どちらかといえばたどたどしく、機能と場の整合性や形自身の構成的な筋道を通すというよりも、その場所にあるとする居心地の感覚に確かな空間としての骨格やいくらかの場の存在の保証を見出そうとして探り出されたもののような印象を受ける。

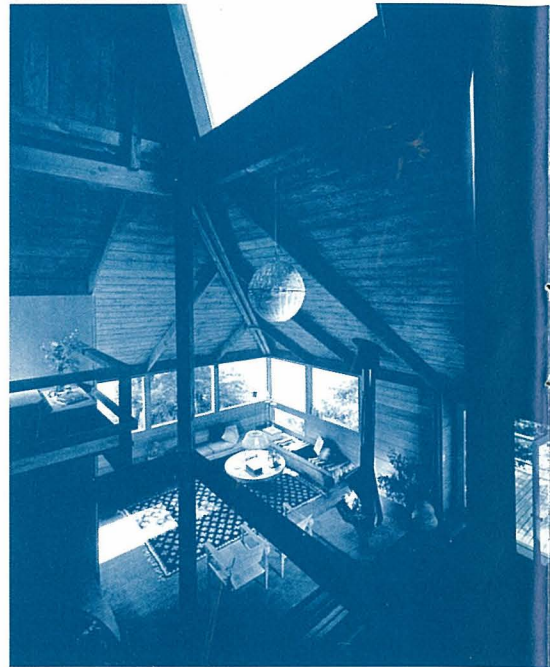
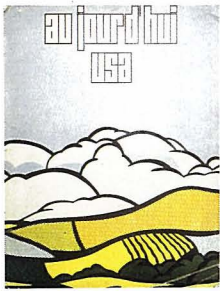
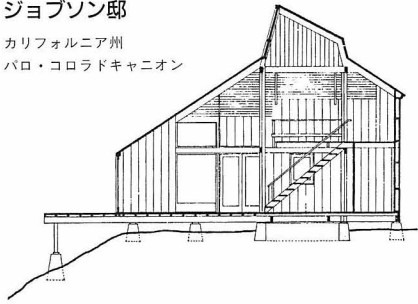
たとえばC・ムーアやL・リンドン他のMLTWチームが設計したジョブソン邸(一九六〇年)は、その平面の図を見る限りにおいてはまことに空疎なとりとめない空間であるかのように思える。いわゆる美しい巧妙なプラン生活織り上げる適度な場の分節や空間的な経験の誘導をそこに見届けることは困難だ。そして、杉と樅の材に覆われたその場所の実像は、はるかに新鮮な魅力に富む。その空間は上階を含めていくつかのアルコ





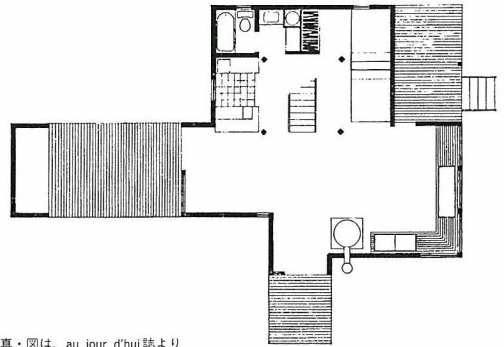
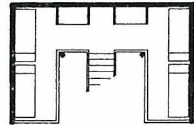
ジョブソン邸

カリフォルニア州  
パロ・コロラドキャニオン



設計=MLTW

チャールズ・ムーア  
ドンリン・リンドン  
ウィリアム・ターンブル  
リチャード・R・ウィッチカー  
1961年



写真・図は、au jour d'hui誌より

↑ブよりなっている一体の簡素なものだ。その簡素さの中に、人の居場所の求心力とでもいうものが、陽光や屋外の風景や場の寸法との関係で個々のコーナーに刻まれている。風船を膨らませたような印象を持つその平面図（ひとつの思考）は、結局そうした場へのまなざしの中から生まれてきたものであったのだろう。一体の空間の中で、人と人との適度な距離や関係を、そして、人を寄せる場としての魅力をいくらかのアルコーブに刻むことでその全体の家としての骨格が生み出されたものなのだろう。

● あらためて記すまでもなく、その特集の軸になったチャールズ・ムーア、エシエリックや、そこでは一片のモデル写真を取り上げられたにすぎないベンチュリも、あるいはまた、きつぱりとした構成力に優れたグワズミの活動も、新たな建築世界の主流としてその後の活動を私たちがよく知るところとなる。でもそのことは、時代の流れゆかたちと、アメリカにおける建築社会の仕組みが持つ別種の力学のなせるものと理解しておこう。私にとっては、その時その特集があらわにしようとした「場所の哲学」——ひとつのただそこに居ることの充足に寄与するもの——に果たす建築のありかがなお気掛かりであり、そこに、今その内側の成因の移りに揺れ動く住まいという空間の持つ芯を、あらためて見届けたいと思うのである。

（ますこ・よしひろ／東京芸術大学美術学部建築科教授）



## 編集後記

一九八五年暮れに天逝した友人であり美術評論家の坂崎乙郎さんと出会ったのは、一九五一年のある日、私が彼の父君で美術史家の坂崎坦先生のお宅をお尋ねした時だと記憶している。乙郎さんは二三歳、私が二〇歳の春だった。当時は銀座に広告塔のある風景のなかで、乙郎さんたちと一緒に、サロン・ド・メ工展や泰西名画展など、ありとあらゆる展覧会を觀て廻ったものだ。私たちは貧しかったが、酒のみ、やきとりをくい、そしてだべった。話はつきまず、街ゆく女の人々はみんな綺麗に見えた。そんな青春の一瞬であった。

丁度、月刊『美術批評』（美術出版社、一九五二年一月創刊）の全盛期で、当時は美術評論家の登龍門の役割を担っており、針生一郎、瀬木慎一、東野芳明、中原佑介、多木浩二さんたちが輩出した時期である。

以前、ある会合で、建築評論家の神代雄一郎さんと一緒に機会を得た。美術にくらべて建築では、「建築史はその正当性は認知されたが、建築批評の領域は、いまだ地についていないのではないか」というようなことが話題になった。

このことは、私どもを含めて建築ジャーナリズムの責任でもある。現実を直視すれば、建築に関わるもの全体が、時流にながされ、権威におもね、住まいの人間性を軽視して来はしなかったろうか。現在、私たちは住まいの在りかたについて、人の心を振りどころとして、腰を据えて考える必要性を痛感するのである。

この『戦後住宅史を読み直す』という企画も、そんな思いから、批評精神に裏打ちされた諸兄にご登場いただいたつもりである。

意のあるところをお汲みとりいただき、じっくりとお読み願えれば幸いです。

（本号責任編集 立松久昌）

住宅総合研究財団（略称「住総研」）は

昭和三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮迫した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

以来四〇年余、現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「研究年報」研究報告書」を発刊、また住に関する専門図書室、セミナー室等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業に努めております。

この「すまいろん」は、活動の一環として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様により広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行（季刊）されているものです。ご利用のほど、よろしく、お願い申し上げます。

季刊 すまいろん '96年夏号

一九九六年六月一五日発行

頒価 500円

発行 財団法人 住宅総合研究財団  
発行人 大坪 昭

〒156 東京都世田谷区船橋4丁目29-8  
電話 (03) 3484-5381

編集委員

服部岑生（千葉大学建築学科教授）\*

片山和俊（東京芸術大学建築科助教授）

小林秀樹（建設省建築研究所）

野城智也（武蔵工業大学建築学科助教授）

立松久昌（月刊「住宅建築」顧問）

\* 委員長

● 制作 建築思潮研究所

印刷・製本 慶昌堂印刷株式会社